

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第157集

大 坪 西 遺 跡

2009

財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー



大坪西遺跡は、山口川（矢田川）南側の沖積地と遺跡の南東に聳える猿投山から派生する丘陵袖部に立地している。当地は、北から南に流れる赤津川と東から西に流れる海上川が合流し山口川となり、かつ山口川が丘陵部から沖積地へ広がる地点に相当する。遺跡は、東側を吉田川に、西側を薬師川によって挟まれた、沖積低地上に立地しており、現況で標高は約 92m を測る。



序

瀬戸市は、六古窯の一つに数えられるほど、古くから窯業の町として栄えてきました。われわれが今日あるのも、先人が培ってきた知識や技術の蓄積があつてからこそであり、瀬戸市域はそのことを教えてくれる、いいケースであるといえましょう。

さてこの度、大坪西遺跡の発掘報告書を刊行する運びとなりました。以前に縄文時代後期の竪穴建物跡がみつかった大坪遺跡に近く、この調査でも縄文時代の遺構・遺物の発見が期待されましたが、この調査では、これまで知られていた縄文時代後期ばかりではなく、やや場所をかえて晩期前半の遺構・遺物も見つかりました。これまで知られていた大坪遺跡、大六遺跡をはじめ、近年調査された惣作・鐘場遺跡、鳳山C窯跡、吉野遺跡に加えて、矢田川流域にまたひとつ縄文時代の遺跡が見つかったことは、当時のひとたちの活動の様子を考える上で、貴重な資料となるでしょう。また、弥生時代から古墳時代にかけての水田跡が面的に見つかったのも大きな成果として挙げることができます。

最後になりましたが、発掘調査につぎまして、地元住民の方々をはじめ各方面の方々にご配慮いただき、さらに関係各機関および関係者のご指導とご協力をいただきましたことを、厚くお礼申し上げる次第であります。

平成 21 年 3 月 31 日
財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 林 良三

例言

1. 本書は、瀬戸市大坪町に所在する大坪西遺跡(県遺跡番号 030915)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国道 248 号線の建設に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課から愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じて、財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施した。
3. 調査期間は平成 12 年 10 月から平成 17 年 12 月である。
4. 調査担当者は、平成 12 年度が北村和宏(課長補佐兼主査、現愛知県埋蔵文化財調査センター主査)・小澤一弘(主査、現調査研究専門員)・魚住英史(調査研究員、現瀬戸市立品野台小学校教諭)、平成 13 年度が服部信博(主査、現一宮興道高校教諭)・宇佐見守(調査研究員、現調査研究主事)・織部匡久(調査研究員、現愛知県教育委員会文化財保護室)、平成 17 年度が小澤一弘・樋上 昇(主任、現調査研究専門員)である。

5. 調査では、以下の方々からのご協力を受けた。

平成 12 年度

調査補助員：横山 誠

発掘作業員：浅見久江・大江裕美・太田重明・岡田靖子・加藤和枝・後藤久美子・塩見早智代・
杉原千速・塚本 博・長江典子・中根千恵子・丹羽美佐江・野牧 励・平田多助・
宮本勢津子・森 優子・山下洋子

平成 13 年度

調査補助員：中島 京

発掘作業員：井上次代・大河内園子・大川内具昭・加藤竹枝・河西寿政・壺井順治・西田悦子・野田和義・
日比野征二・宮本智子・三輪正樹・山田邦夫・横山令子

平成 17 年度

測量：(株) 二友組

土工：愛知産業株式会社、発掘作業員：塩見早智代ほか

6. 平成 12 年発掘調査時の航空測量に関して、株式会社日建技術コンサルタントから支援を受けた。

7. 遺物整理、製図については次の方々のご協力を受けた。

小川あかね・堀田春美(整理補助員)

遺構図および遺物実測図トレースについては、(株) ウェルオンに委託し、川添が校正した。

8. 出土遺物の写真撮影については金子知久氏(スタジオ遊)に委託した。

9. 発掘調査および報告書作成に際しては、次の関係機関の指導・協力を受けた。

愛知県建設部・愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター・瀬戸市教育委員会(五十音順、敬称略)

10. 発掘調査および報告書作成にあたり、次の方々および機関から御教示・御協力を頂いた。

大塚達朗・長田友也・瀬瀬 茂・佐野 元・増子康真・百瀬長秀・松本泰典・山下勝年(敬称略)

11. 本書の執筆は、主に川添和暁(調査研究主任)が担当した。但し第 5 章第 1 節は馬場健司氏(パリノ・サーヴェイ株式会社)、第 3 節はパレオラボ AMS 年代測定グループによる。また第 2 節は、主に堀木真美子(調査研究主任)が担当した。

12. 本書の編集は川添和暁が行った。

13. 調査区の座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第 VII 系に準拠する。ただし、旧基準で表記してある。

14. 調査記録および写真記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

15. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目 次

巻頭図版

序・例言・目次

第1章 遺跡の位置および調査の経過 1 頁

第1節 環境と立地

第2節 調査の経緯と経過

第2章 調査方法および基本層序 9 頁

第1節 調査区設定と調査方法

第2節 時代および時期と基本層序

第3章 縄文時代の遺構・遺物 15 頁

第1節 01A 区

第2節 01B 区

第3節 05 区

第4章 弥生時代以降の遺構・遺物 43 頁

第1節 00 区

第2節 01B 区・05 区

第5章 自然科学的分析 49 頁

第1節 植物珪酸体分析

第2節 大坪西遺跡出土の石器石材について

第3節 炭素年代測定

第6章 総括 61 頁

第1節 遺跡の変遷

第2節 出土土器について

第3節 縄文時代後晩期集落研究の現状と課題

写真図版

挿図目次

- 図 1 遺跡位置図
- 図 2 大坪西遺跡位置図 (1 : 5,000)
- 図 3 瀬戸市の地質概念図
- 図 4 周囲の遺跡位置図 1 (1 : 25,000)
- 図 5 大坪遺跡出土石器
- 図 6 大六遺跡部分磨製石鏃
- 図 7 調査区配置図および調査区セクション位置図
- 図 8 調査区壁土層断面図 01 (01A 区 1 : 60)
- 図 9 調査区壁土層断面図 02 (00 区 1 : 60)
- 図 10 調査区壁土層断面図 03 (01B 区 1 : 60)
- 図 11 調査区壁土層断面図 04 (05 区 1 : 60)
- 図 12 01A 区縄文時代遺構配置図 (1 : 100)
- 図 13 01A 区縄文時代遺物出土散布図 (1 : 100)
- 図 14 01A 区縄文時代出土遺物接合関係図 (1 : 100)
- 図 15 01A 区縄文時代主要遺物出土位置図 (1 : 100)
- 図 16 01A 区出土縄文土器実測図 01(1 : 3)
- 図 17 01A 区出土縄文土器実測図 02(1 : 3)
- 図 18 01A 区出土縄文土器実測図 03(1 : 3)
- 図 19 01A 区出土縄文土器実測図 04(1 : 3)
- 図 20 01A 区出土縄文土器実測図 05(1 : 3)
- 図 21 01A 区出土縄文土器実測図 06(1 : 3)
- 図 22 01A 区出土縄文土器実測図 07(1 : 3)
- 図 23 01A 区出土縄文土器実測図 08(1 : 3)
- 図 24 01A 区出土縄文土器実測図 01(2 : 3)
- 図 25 01A 区出土縄文土器実測図 02(2 : 3)
- 図 26 01A 区出土縄文土器実測図 03(2 : 3)
- 図 27 01A 区出土縄文石器実測図 04(1 : 2)
- 図 28 0BA 区出土縄文土器実測図 01(1 : 3)
- 図 29 05 区縄文時代遺構配置図 (1 : 100)
- 図 30 05 SB01(1 : 50)
- 図 31 05 SB02・03(1 : 50)
- 図 32 05 区出土土器 01(1 : 3)

- 図 33 05 区出土土器 02(1 : 3)
- 図 34 05 区出土石器 01(2 : 3)
- 図 35 05 区出土石器 02(2 : 3)
- 図 36 05 区出土石器 03(2 : 3)
- 図 37 05 区出土石器 04(2 : 3)
- 図 38 05 区出土石器 05(1 : 2)
- 図 39 古墳時代以降遺構配置図 (1 : 300)
- 図 40 各調査区弥生時代～古墳時代出土遺物 (1 : 3)
- 図 41 各調査区古墳時代以降出土遺物 01 (1 : 3)
- 図 42 各調査区古墳時代以降出土遺物 02 (1 : 3)
- 図 43 各調査区古墳時代以降出土遺物 03(1 : 3)
- 図 44 植物珪酸体群集と海綿骨針の産状
- 図 45 暦年校正結果
- 図 46 御山寺遺跡出土縄文土器 (1 : 3)
- 図 47 大坪西遺跡遺跡変遷図
- 図 48 瀬戸山口地区縄文時代遺跡分布図
- 図 49 大六遺跡 (宮石ほか 1963 を改変)
- 図 50 縄文時代晩期前葉～中葉の小地域区分案

表目次

- 表 1 周辺の遺跡一覧表
- 表 2 大坪西遺跡 01B 区の植物珪酸体分析結果
- 表 3 大坪西遺跡出土石器チャート石材分類表
- 表 4 測定試料および処理
- 表 5 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

写真目次

巻頭図版 1 吉野遺跡・大坪西遺跡・大坪遺跡・大六遺跡の遠景

巻頭図版 2 01A 区縄文時代遺物出土状況 05 区縄文時代遺物出土状況

写真 1 大坪西遺跡 01B 区で検出された植物珪酸体

写真 2 御山寺遺跡出土土器

写真図版 1 発掘前状況 01A 区西壁 01A 区炭化材出土状況

写真図版 2 01A 区縄文時代遺物出土状況

写真図版 3 01A 区遺物出土状況 01A 区 SU02 遺物出土状況 01A 区 SU03 遺物出土状況

写真図版 4 01A 区完掘全景

写真図版 5 05 区西半分縄文時代遺構全景

写真図版 6 05 区縄文時代遺構検出状況 05 区 SB01

写真図版 7 05 区 SK12 遺物出土状況 05 区 SK09 遺物出土状況 05 区 SK08 遺物出土状況

写真図版 8 01B 区古墳時代水田 01B 区南壁 01B 区北壁

写真図版 9 01B 区 SK01・02、SD01 05 区西半分古墳時代以降全景 05 区 ST01・02
05 区西半分古墳時代以降全景 05 区東半分全景 05 区東半分南壁

写真図版 10 00 区全景 00 区 SX02 00 区 SX01 00 区南壁

写真図版 11 01A 区縄文時代遺物（土器）

写真図版 12 01A 区縄文時代遺物（土器）

写真図版 13 01A 区縄文時代遺物（土器）

写真図版 14 01A 区縄文時代遺物（土器）

写真図版 15 01A 区縄文時代遺物（土器）

写真図版 16 01A 区縄文時代遺物（土器）

写真図版 17 01A 区・01B 区縄文時代遺物（土器）

写真図版 18 01A 区縄文時代遺物（石器）

写真図版 19 01A 区縄文時代遺物（石器・石製品）

写真図版 20 05A 区縄文時代遺物（土器）

写真図版 21 05A 区縄文時代遺物（土器・石器）

写真図版 22 05A 区縄文時代遺物（石器）

写真図版 23 縄文時代以外の遺物

写真図版 24 縄文時代以外の遺物



01A 区縄文時代遺物出土面下層確認の様子



05 区縄文時代遺物出土面下層確認の様子

第1章 遺跡の位置および調査の経緯

第1節 環境と立地

1. 遺跡の位置

大坪西遺跡は、瀬戸市大坪町地内に所在する。瀬戸市は愛知県の中央北部、岐阜県との県境に位置し、旧尾張国の北東端にあたる（図1）。北は岐阜県多治見市、土岐市等に接し、西は春日井市、名古屋市、尾張旭市に隣接する。南は愛知郡長久手町に、東は旧三河国に属する豊田市藤岡町に接している。瀬戸市は「セトモノ」の名前で知られるように古来より窯業生産の一大中心地として繁栄したところである。現在は名古屋市、豊田市の近郊という地の利から市の南西部を中心に宅地造

成が進行しつつある。市域は東西12.8km、南北13.6kmで、周囲約50kmの楕円形を呈している。



図1 遺跡位置図

瀬戸市南端地域は、長久手町とともに、平成17年（2005年）度に世界万国博覧会（通称 愛・地球博）が開催され、それに伴い、会場周辺および東海環状自動車道の整備などが行なわれた。

2. 地理的環境

瀬戸市は名古屋市の東に展開する尾張丘陵地帯の一部に位置し、木曽山脈の最南端にあたる。その大部分の標高は100mから600mの丘陵地で占められている。中でも市域西側には100mから200mの低位丘陵が展開しており、市街地や耕作地を形成している。それらの低位丘陵帯は市内を流れる河川によっていくつかに分けられている。市境北東に沿って庄内川が南流し、その支流である蛇ヶ洞川が市域北部、水野川が市域中部を東から西へと流れている。また市域中南部には矢田川（山口川）とその支流である瀬戸川が東から西へと流れている。水野川の北側を穴田丘陵、水野川と瀬戸川に挟まれた地域を水野丘陵と呼んでいる。また瀬戸川と矢田川に挟まれた部分を菱野丘陵、矢田川以南を幡山丘陵と呼称している。菱野、幡山丘陵地は近年、宅地造成が進み、平地同様住宅地が増加している。さらに河川沿いには狭い沖積

地が盆地状に広がっており、蛇ヶ洞川沿いには上半田川盆地、下半田川盆地、水野川沿いには上流に品野盆地、下流に水野盆地が形成され、矢田川

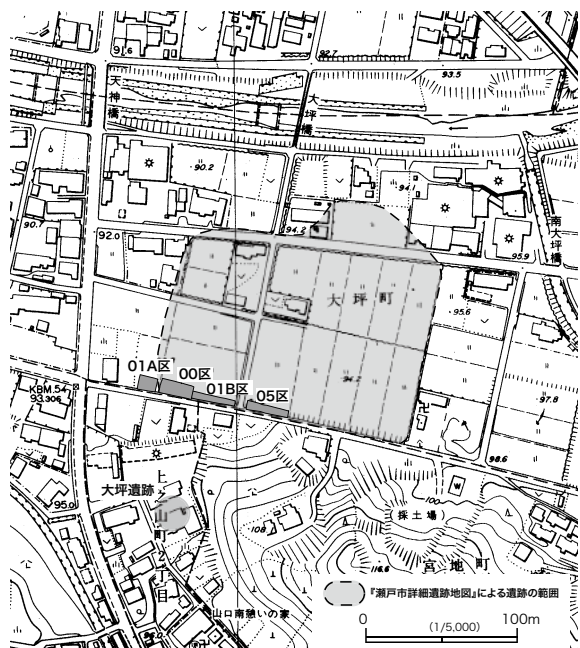


図2 大坪西遺跡位置図（1：5,000）

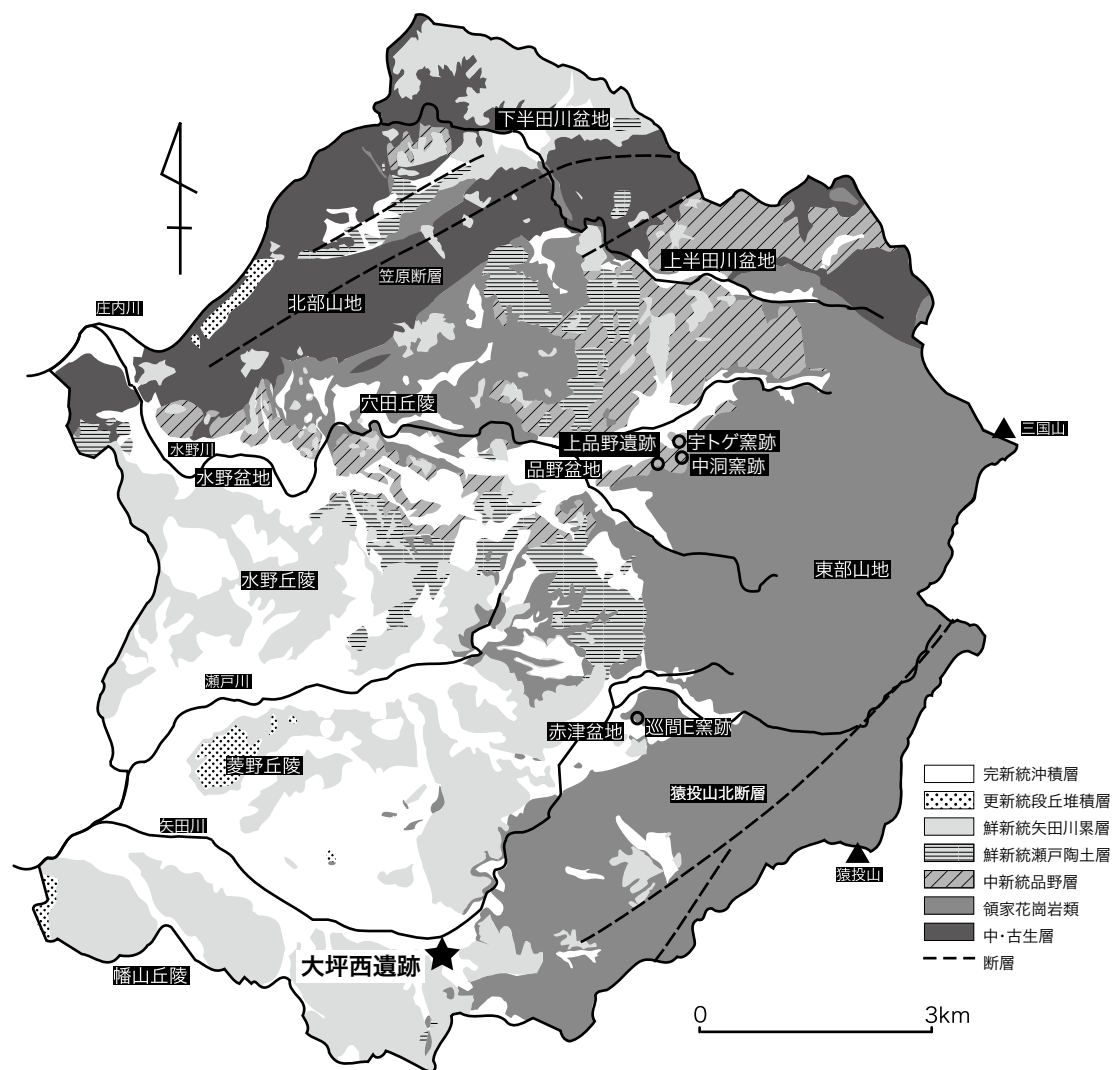


図3 瀬戸市の地質概要図（瀬戸市史編集委員会 1986『瀬戸市史』資料編二自然
および愛知県 1997『愛知県活断層アトラス』を引用一部改編

上流（赤津川）には赤津盆地がある。また、矢田川と瀬戸川沿いには西方にむかって平地が広がっており、名古屋市北東部の沖積地へとつながっている。北部及び東部山地は国有林と県有林が広がり、土砂採集場以外は自然の多く残る丘陵地帯となっている。

瀬戸市における地質的特徴は、伝統的な窯業地であることから分かるように、市域中央部に良好な陶土層（瀬戸陶土層）がみられることである。この陶土層は、その基盤である中・古生層及び花崗岩層の上に厚く堆積しており、その由来は第三紀鮮新世から第四紀更新世初めにかけて伊勢湾を

中心に広がっていたとされる東海湖の堆積物である。また、市域中部に広がる水野砂礫層、蛇ヶ洞川北部に広がる土岐砂礫層（いずれも矢田川累層）中にも砂礫層に挟まれて粘土層がみられる。一方市域北部には中・古生層、東部には花崗岩類が広がっており、この部分では粘土層はみられない（図3）。

さて、大坪西遺跡は、山口川（矢田川）南側の沖積地と遺跡の南東に聳える猿投山から派生する丘陵袖部に立地している。当地は、北から南に流れる赤津川と東から西に流れる海上川が合流し山口川となり、かつ山口川が丘陵部から沖積地へ広

がる地点に相当する。遺跡は、東側を吉田川に、西側を葉師川によって挟まれた、沖積低地上に立

3. 歴史的環境

大坪西遺跡を中心とする 10km 四方には、窯業遺跡を中心として、250 カ所ほどの遺跡が現在までに登録されている。ここでは、ごく簡単に周囲の遺跡の状況を概観する（図 4・表 1）。

縄文時代 瀬戸市域では品野町の上品野遺跡において、台形様石器・局部磨製石斧に代表される後期旧石器時代 I 期に属する石器群が出土している（川添編 2005）。吉田奥遺跡では、後期旧石器時代から縄文時代草創期にかけてと考えられる剥片類がまとまって出土している。品野西遺跡（青木編 1997）や惣作・鐘場遺跡（酒井編 2008）から、有舌尖頭器など縄文時代草創期石器群の好例がいくつか知られている。縄文時代早期後半から末にかけては、八王子遺跡で表裏条痕文期の遺構・遺物がまとまって出土している（武部編 2003）ほか、鳳山 C 窯跡でも早期末を中心とする土坑・土器・石器が報告されている（永井ほか 2005）。縄文時代前期の資料は、吉野遺跡で土器片などが散発的に出土している以外は、不明瞭である。縄文時代中期の事例としては、特に中期末の事例として、吉野遺跡の事例がある。内田町遺跡では、縄文時代中期後葉から後期中葉を中心とした資料が報告されている（岡本・佐野・河合 2002）。土坑のいくつかは落穴状遺構と報告されている。また、打製石斧が 130 点以上とまとまって出土しているのも、注目されよう。縄文時代後期中葉から後葉とされる大坪遺跡と、晩期前半を中心とする大六遺跡は、古くからの調査事例として、愛知県下においてもよく知られているところである。

地しており、現況で標高は約 92m を測る（図 2）。

以下、大坪西遺跡付近の縄文時代の遺構・遺物が出土した遺跡を概観していく。

1. 吉田奥遺跡（155）（服部ほか 1992）

大坪西遺跡の南東 1,000m ほどの猿投山から伸びる丘陵東斜面に立地している。昭和 63 年から平成元年（1988～1989 年）にかけて瀬戸市教育委員会によって調査が行われた。古墳時代の竪穴建物跡調査時に床下より、下呂石製の剥片類がまとまって出土した。剥片類は総点数 18 点で、台形状および貝殻状の剥片が連続して作出されたようで、剥片間の接合が 3 点確認されている。これらの剥片はすべて同一母岩から作出され、尖頭器様の両面加工石器製作の際に生じた調整剥片で、後期旧石器時代から縄文時代草創期に属する可能性が指摘されている。

2. 吉野遺跡（104・105）（永井編 2004、青木編 2005）

大坪西遺跡の東 400m ほどの山口川右岸、丘陵部から低くなる沖積地上に立地する。平成 12 年度から 14 年度（2000～2002 年度）に愛知県埋蔵文化財センターが（以下、県埋文とする）、平成 14 年度と 15 年度（2002・2003 年度）には瀬戸市埋蔵文化財センターが（以下、市埋文とする）調査を行っている。吉野遺跡として調査・報告された範囲は、屋戸町遺跡の南東端から吉野遺跡・吉野 A 遺跡までの範囲である。

県埋文の調査では、草創期・前期・中期から後期・晩期の遺構・遺物が出土した。草創期の資料として下呂石製の有舌尖頭器が 1 点出土した。前期では、土坑 2 基と土坑内から十三菩提式に比定



図5 周辺の遺跡位置図1(1:25,000)国土地理院「瀬戸・猿投山・長久手・豊田北」をもとに作成

表1 周辺の遺跡一覧表(番号は図5と一致)

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	東町C窯跡	13世紀	83	若宮1号墳	古墳	165	大草9号窯跡	12世紀
2	川合A窯跡	13世紀	84	山口堰堤1号墳	古墳	166	大草10号窯跡	11～12世紀
3	川合G窯跡	14世紀	85	山口堰堤2号墳	古墳	167	大草16号窯跡	12世紀
4	川合B窯跡	13世紀	86	山口堰堤3号墳	古墳	168	大草11号窯跡	13世紀
5	川合C窯跡	13世紀	87	北山古墳	古墳	169	大草12・13号窯跡	12・13世紀
6	川合D窯跡	13・15世紀	88	高塚山3号墳	古墳	170	大草14号窯跡	13世紀
7	川合J窯跡	13世紀	89	高塚山1号墳	古墳	171	大六遺跡	縄文
8	川合H窯跡	13世紀	90	高塚山2号墳	古墳	172	大六古墳	古墳
9	川合K窯跡	13世紀	91	塚原1号墳	古墳	173	掛下町神明遺跡	中世～近世
10	川合I窯跡	13世紀	92	塚原2号墳	古墳	174	南山25号窯跡	13世紀
11	川合F窯跡	13世紀	93	塚原4号墳	古墳	175	南山30号窯跡	13世紀
12	川合E窯跡	13世紀	94	塚原3号墳	古墳	176	南山15号窯跡	13世紀
13	万徳峠窯跡	13世紀	95	塚原5号墳	古墳	177	南山34号窯跡	13世紀
14	塩草A窯跡	13世紀	96	塚原6号墳	古墳	178	南山40号窯跡	13世紀
15	塩草B窯跡	13世紀	97	塚原7号墳	古墳	179	南山1号窯跡	13世紀
16	万徳寺1号墳	古墳	98	塚原8号墳	古墳	180	南山口南山遺跡	13世紀
17	万徳寺2号墳	古墳	99	掛下遺跡	中世～近世	181	南山32号窯跡	13世紀
18	万徳寺3号墳	古墳	100	大坪西遺跡	縄文・古墳～近世	182	南山41号窯跡	13世紀
19	萩殿窯跡		101	大坪遺跡	縄文	183	南山42号窯跡	13世紀
20	萩殿B窯跡	13世紀	102	南大坪橋遺跡	古代～近世	184	南山5・6号窯跡	12世紀
21	萩殿A窯跡	13世紀	103	大坪東遺跡	古代～近世	185	南山14号窯跡	13世紀
22	萩殿C窯跡		104	屋戸町遺跡	古代～近世	186	南山7号窯跡	12世紀
23	春雨A窯跡	13世紀	105	吉野遺跡	古代～近世	187	南山43号窯跡	13世紀
24	春雨D窯跡	14～15世紀	106	吉田遺跡	古墳	188	葉師山窯跡	17世紀
25	宝ヶ丘A窯跡	13世紀	107	吉野A遺跡	中世～近世	189	欠下遺跡	17世紀
26	宝ヶ丘B窯跡	13世紀	108	吉野B遺跡	中世～近世	190	南山16号窯跡	13世紀
27	のぞみ学園裏窯跡	13世紀	109	屋戸遺跡2	縄文	191	南山17号窯跡	13世紀
28	水無瀬中学校窯跡	12～13世紀	110	屋戸遺跡	縄文	192	南山城跡	中世
29	水無瀬東窯跡	12～13世紀	111	広久手1号窯跡	12世紀	193	長洞窯跡	11世紀
30	長根6号窯跡	13世紀	112	広久手2号窯跡	12世紀	194	南山29号窯跡	13世紀
31	長根5号窯跡	12世紀	113	広久手29号窯跡	13世紀	195	南高塚山1号墳	古墳
32	井林6号窯跡	12世紀	114	百代寺窯跡	11世紀	196	南山39号窯跡	13世紀
33	井林4号窯跡	12世紀	115	広久手22号窯跡	13世紀	197	南高塚山2号墳	古墳
34	井林3号窯跡	13世紀	116	広久手3号窯跡	13世紀	198	南山28号窯跡	12世紀
35	井林5号窯跡	13世紀	117	広久手4号窯跡	13世紀	199	南山37号窯跡	13世紀
36	井林7号窯跡	13～14世紀	118	川原山1号墳	古墳	200	南山19号窯跡	13世紀
37	井林8号窯跡	13～14世紀	119	川原山2号墳	古墳	201	南山18号窯跡	11世紀
38	井林9号窯跡		120	川原山3号墳	古墳	202	南山12号窯跡	11世紀
39	長根3号窯跡	13世紀	121	広久手1号墳	古墳	203	南山38号窯跡	
40	長根4号窯跡	13世紀	122	広久手2号墳	古墳	204	南山11号窯跡	13世紀
41	長根2号窯跡	13世紀	123	広久手3号墳	古墳	205	南山36号窯跡	13世紀
42	長根1-1号窯跡	12世紀	124	屋戸A窯跡	13世紀	206	南山31号窯跡	13世紀
43	長根1-2号窯跡	13世紀	125	広久手H窯跡	13世紀	207	南山8・9号窯跡	11～14世紀
44	山口八幡5号窯跡	13世紀	126	広久手C3窯跡	11世紀	208	南山35号窯跡	13世紀
45	山口八幡6号窯跡	13世紀	127	広久手C2窯跡	13世紀	209	南山13号窯跡	12世紀
46	赤重窯跡	19世紀	128	広久手C4窯跡		210	南高塚山3号墳	古墳
47	平子窯跡	12～13世紀	129	広久手C1窯跡	11世紀	211	南山20号窯跡	13世紀
48	緑2号窯跡	13世紀	130	広久手D2窯跡	13世紀	212	南山21号窯跡	13世紀
49	緑1号窯跡	13世紀	131	広久手F窯跡	11世紀	213	南山24号窯跡	12世紀
50	釜ヶ洞2号窯跡	13世紀	132	広久手D1窯跡	15世紀	214	南山22号窯跡	13世紀
51	釜ヶ洞1号窯跡	12～13世紀	133	広久手D2窯跡	13世紀	215	南山23号窯跡	13世紀
52	今林1号窯跡	12世紀	134	広久手28号窯跡	11～13世紀	216	南山33号窯跡	13世紀
53	今林2号窯跡	12世紀	135	塔山城跡	中世	217	南山3号窯跡	13世紀
54	今林3号窯跡	13世紀	136	広久手観音堂遺跡	近世	218	南山4号窯跡	13世紀
55	今林4号窯跡	12世紀	137	宮地A窯跡	13世紀	219	南山44号窯跡	12世紀
56	大津城跡	中世	138	広久手13・14号窯跡	13世紀	220	南山10号窯跡	13世紀
57	山口八幡4号窯跡	13世紀	139	広久手16号窯跡	13世紀	221	福井古窯	鎌倉
58	山口八幡1号窯跡	13世紀	140	広久手6号窯跡	13世紀	222	茨ヶ廻間古窯	古墳
59	山口八幡2号窯跡	15世紀	141	吉田4号墳	古墳	223	神明社4号古墳	古墳
60	山口八幡3号窯跡	15世紀	142	広久手7号窯跡	13世紀	224	神明社1号古墳	古墳
61	山口八幡裏1・3号窯跡	15世紀	143	広久手17号窯跡	13世紀	225	神明社2号古墳	古墳
62	経塚遺跡	13世紀	144	吉田1号墳	古墳	226	石場水車場跡	近世～近代
63	上菱野城跡	中世	145	吉田2号墳	古墳	227	石場古墳	古墳
64	山口八幡3号墳	古墳	146	広久手21号窯跡	13世紀	228	来姓5号墳	古墳
65	山口八幡2号墳	古墳	147	宮地1号墳	古墳	229	来姓6号墳	古墳
66	山口八幡1号墳	古墳	148	宮地2号墳	古墳	230	来姓7号墳	古墳
67	本能寺古墳	古墳	149	宮地3号墳	古墳	231	来姓8号墳	古墳
68	矢形古墳	古墳	150	広久手8号窯跡	13世紀	232	来姓9号墳	古墳
69	幡山遺跡	古代～近世	151	広久手19号窯跡	13世紀	233	来姓1号墳	古墳
70	東米泉遺跡	縄文	152	広久手12号窯跡	12世紀	234	来姓2号墳	古墳
71	菱野熊野神社古墳	古墳	153	吉田奥2号墳	古墳	235	来姓3号墳	古墳
72	石口遺跡	古墳	154	吉田奥3号墳	古墳	236	来姓4号墳	古墳
73	山口城跡		155	吉田奥遺跡	後期旧石器～縄文・古代	237	来姓1号窯跡	平安
74	若宮遺跡	古代～近世	156	広久手20号窯跡	10世紀	238	来姓4号窯跡	鎌倉
75	山鍵遺跡	弥生	157	吉田奥4号遺跡	中世	239	来姓3号窯跡	平安
76	塩草1号墳	古墳	158	吉田奥5号墳	古墳	240	来姓2号窯跡	平安
77	塩草3号墳	古墳	159	広久手27号窯跡	13世紀	241	来姓5号窯跡	鎌倉
78	塩草2号墳	古墳	160	広久手26号窯跡	13世紀	242	松崎古墳	古墳
79	若宮A窯跡	13世紀	161	広久手25号窯跡	13世紀	243	八草城跡	室町
80	海上E窯跡	13世紀	162	広久手15号窯跡	13世紀	244	広見城	室町
81	塚原2号窯跡		163	広久手5号窯跡	12世紀			
82	塚原1・3号窯跡	13世紀	164	弁天遺跡	中世～近世			

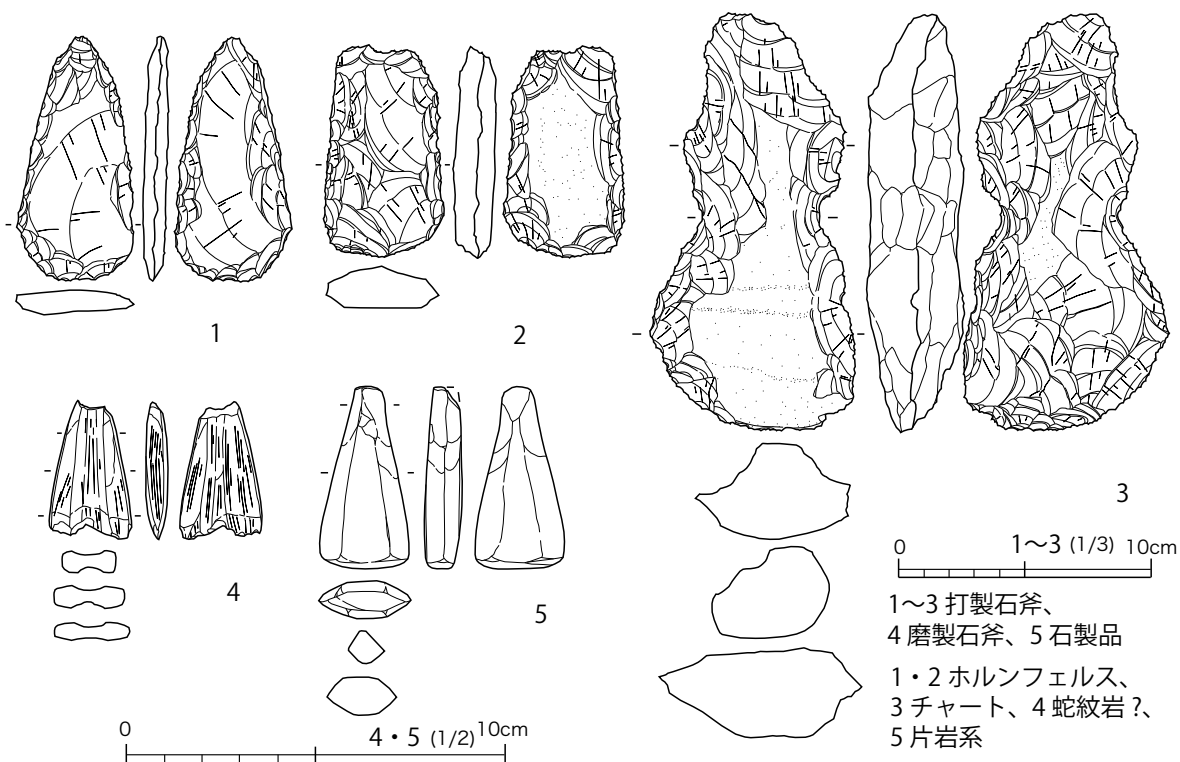


図5 大坪遺跡出土石器（瀬戸市教育委員会所蔵）

される土器が報告されている。当遺跡では中期末から後期前葉にかけての資料が中心で、竪穴建物跡2基と土器埋設遺構1基、その他土坑が検出されている。竪穴建物跡は1基には石囲炉が見つかった。市埋文の調査でも、土器片・石器が出土している。

近年、増子康眞による吉野C式の提唱は、当地域の中期末の様相への提言のみならず、中期末・後期初頭の広域編年への提言としても注目されているところである（増子2005）。

3. 大坪遺跡（水野1957・宮石ほか1958）

大坪西遺跡北東側の河岸段丘上、薬師川が矢田川沖積地に合流する地点に位置する。標高は約100mである。昭和31年（1956年）に瀬戸市教育委員会の委嘱により山口遺跡調査保存会によって調査が行われた。遺物包含層とされる黒色有機土層は地表下約1mの位置に存在していたようで、土層の関係は不明ながら竪穴建物跡1軒が

検出され、中央には地床炉が見つかった。出土遺物は、縄文時代後期中葉を中心とする土器・石鏃・石錐・打製石斧・磨製石斧・磨石などが出土したと報告された。

大坪遺跡出土土器は、その全体の様相が不明瞭なママ、大坪式として東海地域における縄文時代後期中葉後半の標式とされたことがある（久永1969）。増子康眞は大坪遺跡出土土器群は型式設定には適さないとして、馬場遺跡出土資料の提示などを行なっている（増子1994ほか）。大坪遺跡出土遺物に関しては、その後、服部 郁によってまとめられたが（服部1991）、この時には出土状況が不明な状態となっていたようで、土器は後期中葉後半～後葉を中心として晩期まで認められ、石器も石鏃・石匙・打製石斧・礫器様石器・磨石・敲石類、および磨製石斧あるいは磨製石斧様の石製品が報告された。

4. 大六遺跡 (宮石ほか 1963)

大坪西遺跡の西 1,400m ほどの、標高約 85m、山口川南側の河岸段丘上に位置する。当地は、山口川に大六川が合流する地点付近にあたる。昭和 36～37 年と 38 年 (1961～63 年) に調査が行われた。調査区中央区を中心に、縄文時代の遺構・遺物が調査された。遺構は土器棺が 2 基とピット、および遺物包含層である。出土遺物には、縄文時代晩期前半期を中心とする土器群と、石鏃・石錐・石匙・磨製石斧・磨石・石剣類がある。また、調査区東区からは古墳時代の竪穴建物跡が調査されている。

第 1 次調査の出土土器について、久永春男は元刈谷式土器単一の土器群とした上で、その特徴をまとめている (久永 1963)。また近年、佐野元は大六遺跡出土遺物の再整理を行ない、特に有文土器について詳細な検討結果を提示している (佐野 2001)。これまで知られていた出土遺物以外に、土製耳飾り・スクレイパー・異形石器・楔形石器・打製石斧・礫器様石器・切目石錘・礫石錘・台石が報告された。

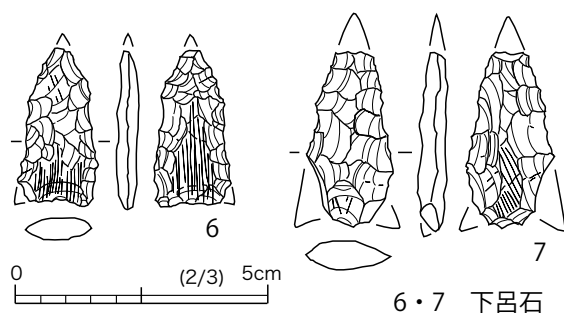


図6 大六遺跡出土部分磨製石鏃
(瀬戸市教育委員会所蔵)

上に挙げた遺跡以外に、東米泉遺跡 (70)・屋戸遺跡 (110) および屋戸遺跡 2 (109) がある。東米泉遺跡は石鏃散布値として知られている地点である。また、屋戸遺跡および屋戸遺跡 2 からは、土器・石器が表採され、土器は縄文後期に属する

ものであったといわれている (青木 1998:95 頁)。

弥生時代 弥生時代の遺構・遺物の出土は、瀬戸市域全体でみても多くない。そうした中で、近年明らかになった点として、吉野遺跡 (104・105) では、県埋文および市埋文の両方の調査で水田跡が検出されている。市埋文調査区では畦畔の軸は、真北に対して若干北西側に振る形で、一辺約 8m の規模で検出されている。弥生時代中期中葉の岩滑式の土器片が検出され、水田に対応する時期と考えられている。

古墳時代 大坪西遺跡周辺には 60 カ所ほどの古墳が知られている。いずれも後期古墳で、墳丘の形状は円墳がほとんどである。近年の調査では、平成 18 年度 (2006 年) 市埋文による塚原古墳群の調査と、県埋文による山口堰堤 3 号墳 (86)・若宮 1 号墳 (83) の調査が行なわれた。塚原古墳群の調査では、塚原 1 号墳 (91) の移築保存が行なわれた。

また、古墳時代の集落としては、上述したように、大六遺跡で竪穴建物跡が検出されている。近年の調査では、惣作・鐘場遺跡でも竪穴建物跡がまとまって検出された (酒井編 2008)。また、瀬戸市上品野遺跡では、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての竪穴建物跡群が調査・報告されている (川添編 2005)。

古代～中世以降 この時期の遺跡としては、窯業遺跡が多く確認されており、既に調査も行われている。これらの遺跡群が当地域の特徴であり、特に、大坪西遺跡南側の周囲には、広久手窯跡群・南山窯跡群など、古代末から中世前半期にかけての窯跡が多く見つかり、灰釉陶器の最終段階の指標となっている百代寺窯跡 (114) も

所在する。近年調査された窯跡としては、古瀬戸前期および山茶碗7型式の塚原1号窯跡があり、さらに3号窯跡も調査によって初めて確認された(82)。

また、周囲には、上菱野城跡・山口城跡・塔山城跡・南山城跡など、大坪西遺跡が立地する沖積地を囲む丘陵周辺には、中世期以降の城跡が確認されている。

第2節 調査の経緯と経過

1. 調査にいたる経緯

本事業は、国道248号線の建設に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行なわれたものである。瀬戸市教育委員会により平成4年から9年にかけて行なわれた遺跡分布調査では、古代から近世の遺跡として、須恵器・山茶碗・施

釉陶器の出土が報告されている(瀬戸市教育委員会1997)。平成11年度(再度確認)には、万博に関連した、国道248号線に関連する試掘調査が愛知県教育委員会によって行なわれ、大坪西遺跡に関しては、後述する01A区の一部が調査されている。

2. 調査・整理の経過

今回の調査対象地域は、遺跡範囲の南西端である。調査は平成12年に1調査区(00区)・13年に2調査区(01A・01B)・17年度に1調査区(05区)の4調査区を設定し、三カ年にわたって、計1,150㎡を調査した。17年度は調査に入る前に、6月26日に立会調査を行なった。なお、諸事情により調査期間中の現地説明会および地元説明会の開催は難しかったものの、01A区・01B区調

査終了後、翌平成14年1月12日(土)に山口憩いの家で、吉野遺跡とともに遺跡調査報告会を行なった。

遺物の洗浄・注記は、平成17年度内に終了した。

その後、平成20年1月から3月までの期間で、出土遺物の分類・接合・復元・実測などの整理作業を行い、報告書作成作業を進めていった。

第2章 調査方法および基本層序

第1節 調査区設定と調査方法

調査は4調査区に分けて行った(図7)。西から01A区・01B区—00区—05区である。調査区内には5m四方でグリッドを設定した。グリッドは国土交通省告示に定められた平面直角座標第VII系(旧基準)に準拠している。これを包含層掘削および出土遺物取上げの基本単位とした。

調査では、まず表土・耕作土をバックホウで除去し、調査員による遺物包含層の精査・検討を繰り返し、作業員による掘り下げを順次行った。遺構確定後、土色の記録を経て、各遺構を完掘した。

全体の遺構がほぼ各掘した段階で、測量および全体写真撮影を行った。これを各調査区で実施した。

調査では、遺構番号は調査区ごとに順次付けられている。整理・報告でも番号をそのまま踏襲したため、番号の付け替えなどは行っていない。従って遺構名は調査区名を冠した、□□区 SK △△で呼称する。なお整理の結果、以下の報告で遺構の性格を変更した場合でも、遺構記号の付け替えは行わないこととした。

第2節 時代および時期と基本層序

時代および時期 今回の調査で、調査された遺構・遺物の時代および時期は次の通りである。

縄文時代 中期・後期・晩期
弥生時代 中期・後期
古墳時代 前期・後期
古代 平安時代
中世～近世 鎌倉時代・室町時代・江戸時代

出土遺物は27リットルコンテナで12箱分である。遺物の多くは、縄文土器・石器で、特に01A区で出土した縄文時代後期の土器群が最も多い。

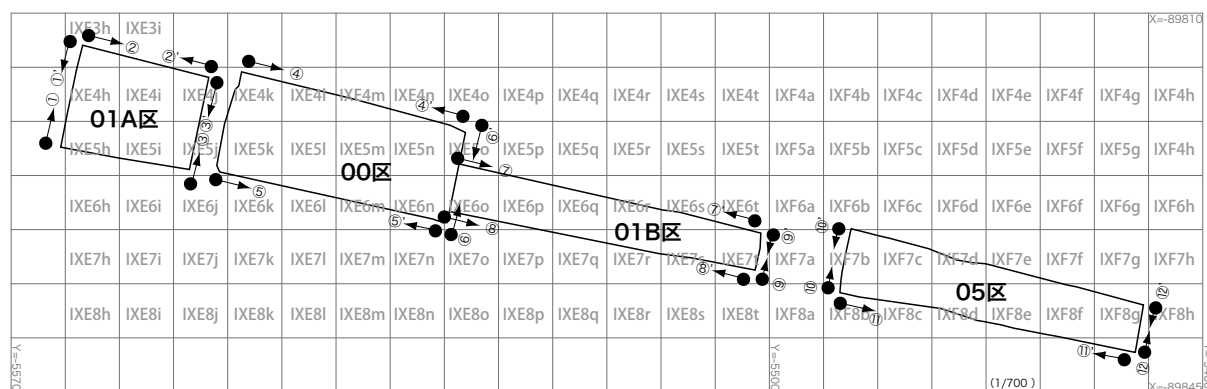


図7 調査区配置図および調査区セクション位置図

基本層序 大きく次の5層に分けられる。

I層：表土および現在の水田に相当する層。

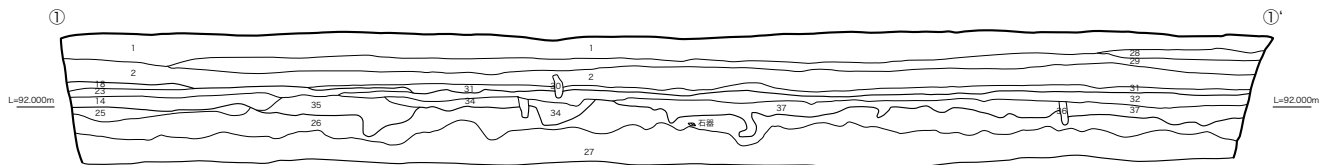
II層：古代～中世包含層。I層とII層はいずれも水田耕作土と考えられる。

III層：古墳時代水田検出層。この層からは、古墳時代の土師器が出土する。01B区では調査区全体で、05区では調査区西半分で検出された。

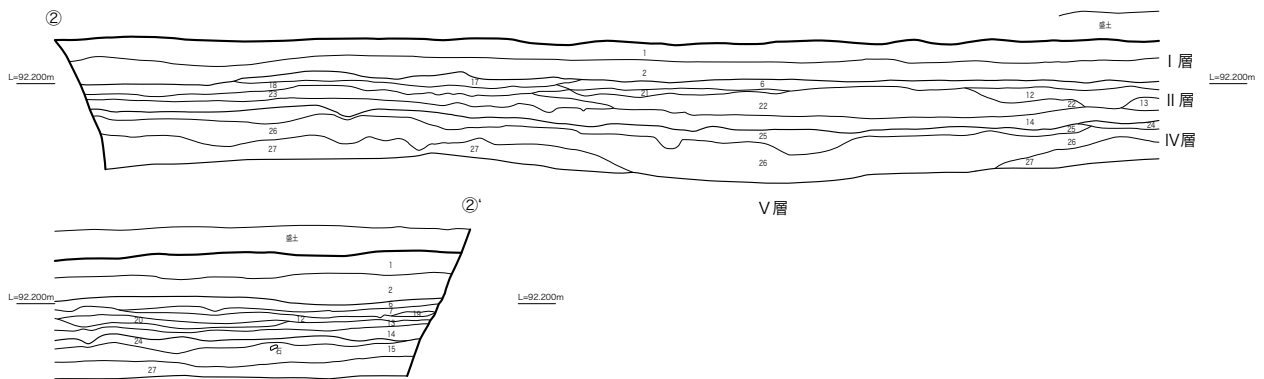
黒褐色・褐灰色・黄灰色粘土質シルトを主体とする。

IV層：縄文時代の遺構・遺物包含層。01A区では黄褐色シルトや灰黄褐色砂層から縄文時代後期中葉を主体とする遺物群が出土した。05区では古墳時代の水田耕作土である灰色粘土層から縄文時代晩期前半を主体とする遺物群が多く出土

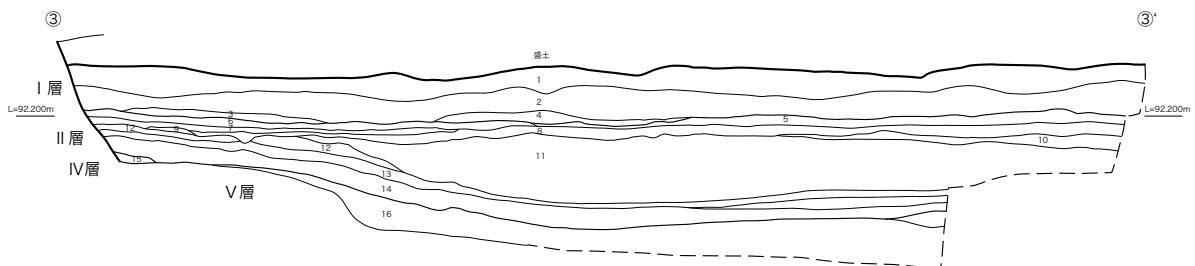
01A 西壁



01A 北壁



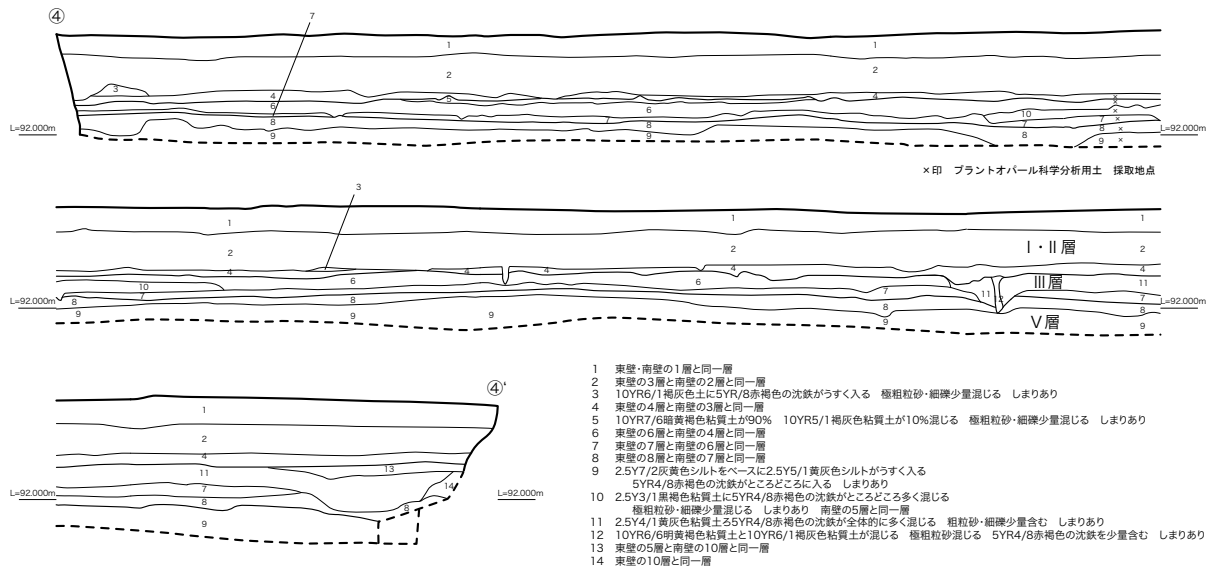
01A 東壁



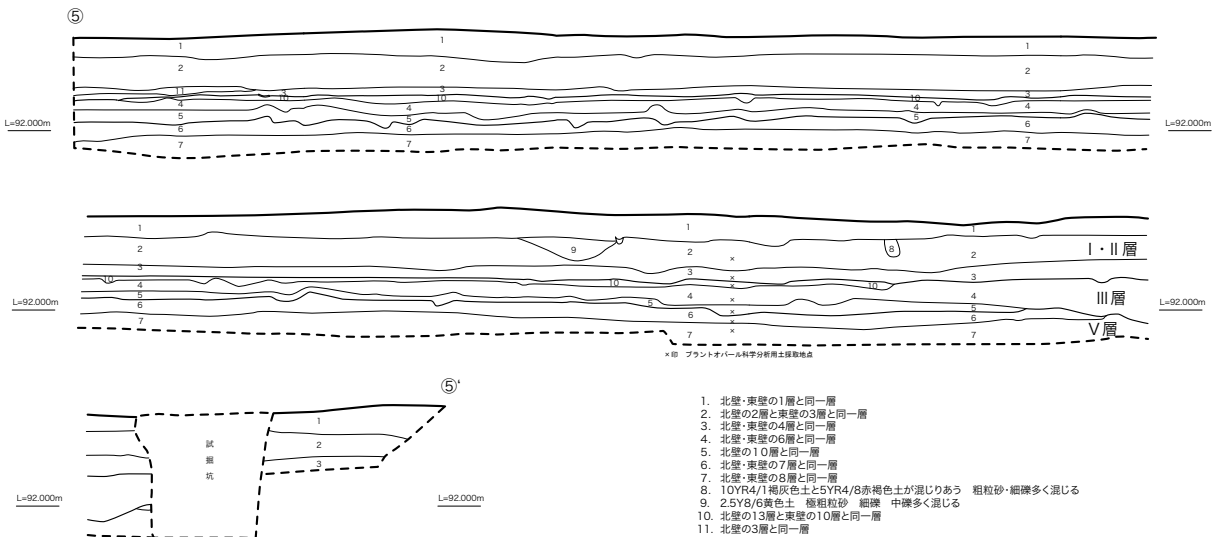
1	5Y3/2	オリブ黒色土、水田耕作土、しまりが弱い	19	2.5Y5/1	黄灰色粘質土と中粒砂混じる
2	5Y4/1	灰色土、水田耕作土	20	2.5Y7/1	灰白色粗粒砂、上下層の土混じる
3	2.5Y3/1	黒褐色粘質土、2層の間に沈鉄層あり	21	2.5Y4/1	黄灰色粘質土、沈鉄含む
4	2.5Y3/1	黒褐色粘質土	22	2.5Y7/2	灰黄色砂利
5	2.5Y4/2	暗灰色粘質土	23	2.5Y7/4	浅黄色シルト、上層との間に砂粒はさむ
6	2.5Y5/1	黄灰色粘質土、上層との間に沈鉄層あり、しまり強い	24	2.5Y5/2	暗灰色シルト
7	2.5Y4/1	黄灰色粘質土、しまり強い	25	2.5Y4/1	黄灰色～2.5Y5/2暗灰色シルト
8	10YR4/1	褐灰色粘質土、しまり強い	26	2.5Y5/3	黄褐色シルト、縄文土器含む
9	10YR8/1	灰白色細粒砂と10YR4/1褐灰色粘質土が混ざる	27	2.5Y6/2	灰黄色細粒砂、縄文土器含む
10	10YR4/1	褐灰色粘質土、下層の中粒砂混じる	28	2.5Y3/2	黒褐色土、円礫混じる
11	10YR7/1	灰白色粗粒砂、しまり弱い	29	2.5Y3/1	黒褐色土、円礫・粘土塊多く混じる
12	10YR8/1	灰白色細粒砂	30	2.5Y7/2	灰黄色細粒砂
13	10YR8/1	灰白色細粒砂、上層との間に10YR7/4にぶい黄褐色シルト層あり	31	2.5Y5/1	黄灰色粘質土、沈鉄多く含む
14	2.5Y2/1	黒色粘質土、しまり強い	32	2.5Y7/2	灰黄色細粒砂と2.5Y6/1黄灰色シルトとの混土
15	2.5Y4/1	黄灰色粗粒砂、縄文土器含む	33	2.5Y6/1	黄灰色シルト
16	7.5Y5/1	縄灰色シルト	34	2.5Y5/2	暗灰色シルト2.5Y3/1黒褐色シルト、ブロック状に混じる
17	2.5Y4/2	暗灰色粘質土	35	34よ02.5Y3/1	黒褐色シルトの混じりが少ない
18	2.5Y4/1	黄灰色粘質土、若干の砂利混じる	36	2.5Y7/1	灰白色細粒砂
			37	2.5Y3/1	黒褐色シルト

図8 調査区壁土層断面図01 (01A区 1:60)

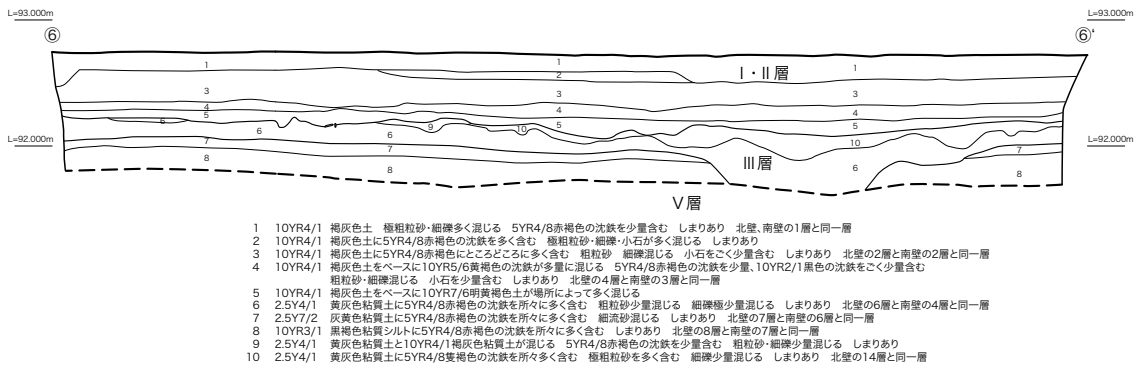
00 北壁



00 南壁



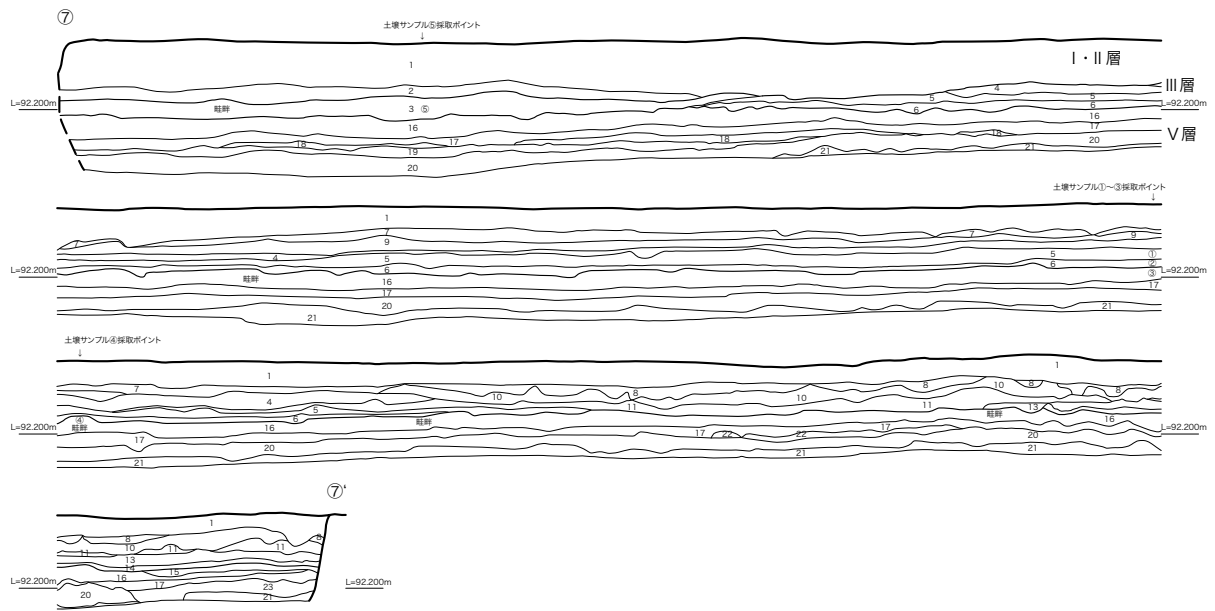
00 東壁



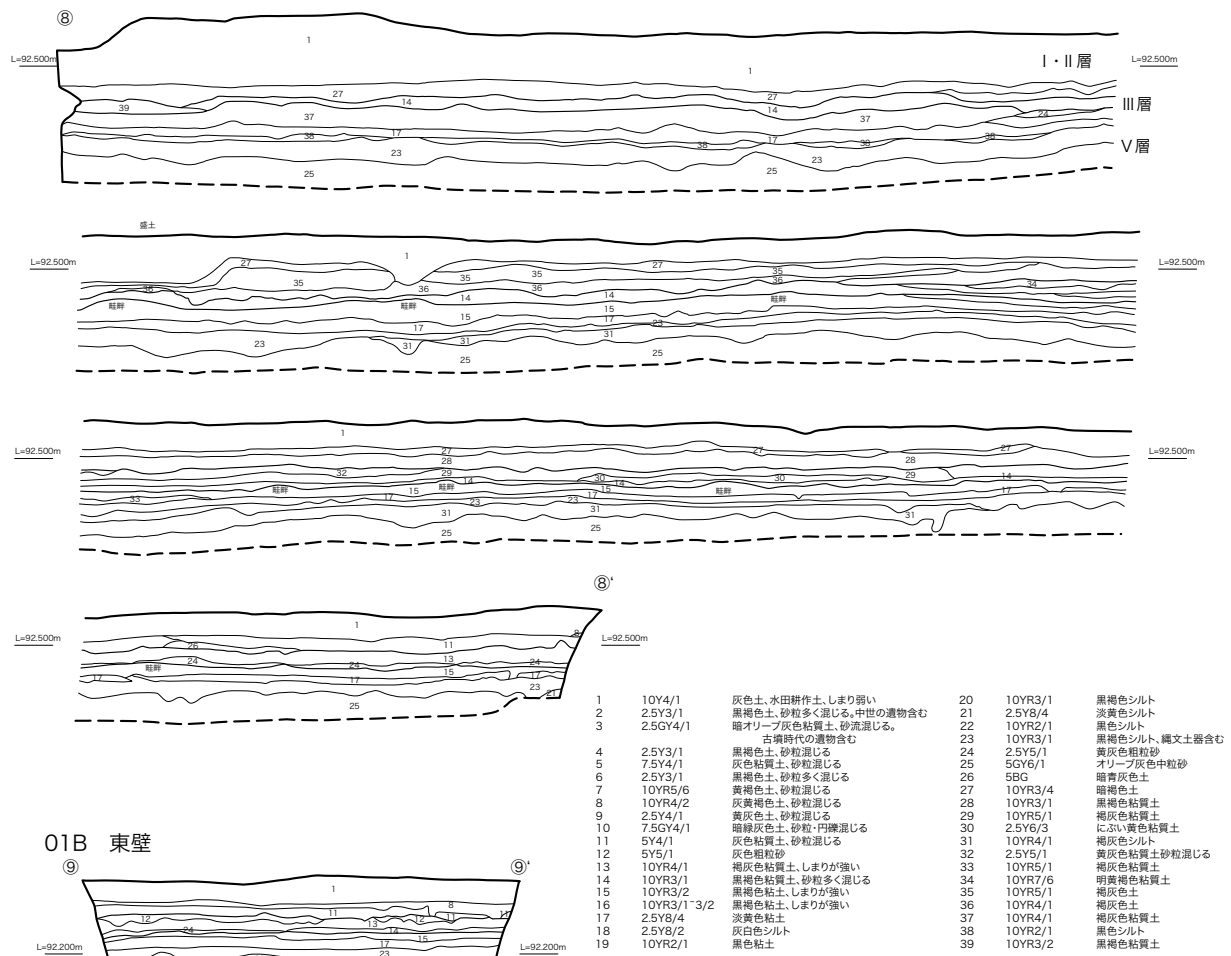
1層～5層は耕作土と考えらる
 4層、5層は沈跡を多量に含む床土か？4層下部から山茶碗出土
 6層～10層は自然の堆積と考えられる
 6層は自然堆積の遺物を含む層と考えられ、遺構のように見える落ち込みは自然のくぼみであり、そのくぼみに遺物(土師器 7世紀か?)が流れ込んだものと思われる
 特に遺物は6層の最下部 7層に近い部分に多く見られる

図9 調査区壁土層断面図 02 (00区 1:60)

01B 北壁



01B 南壁



01B 東壁

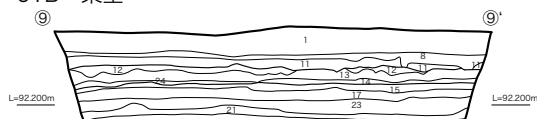


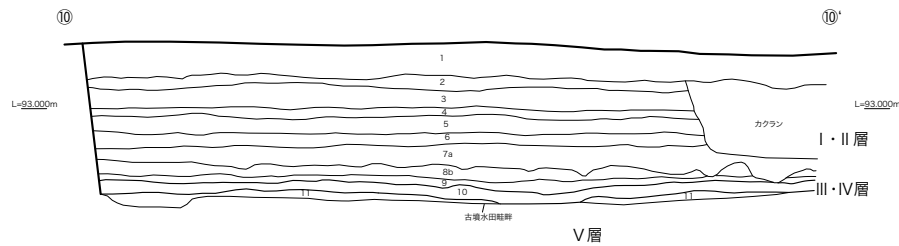
図 10 調査区壁土層断面図 03 (01B 区 1 : 60)

した。05 区における縄文時代遺構検出面はV層直上である。

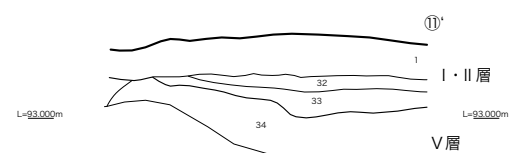
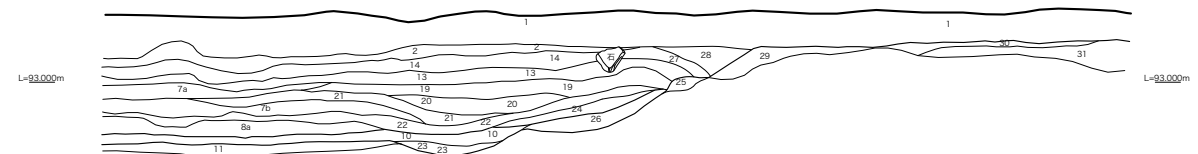
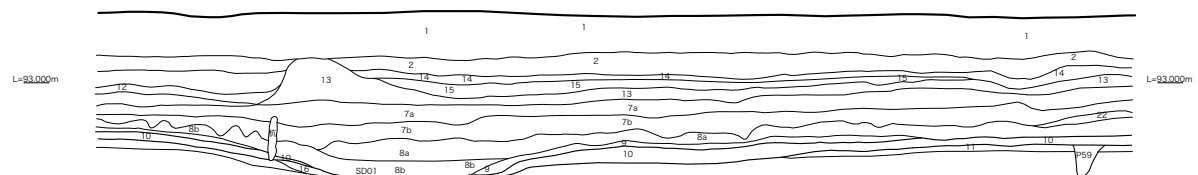
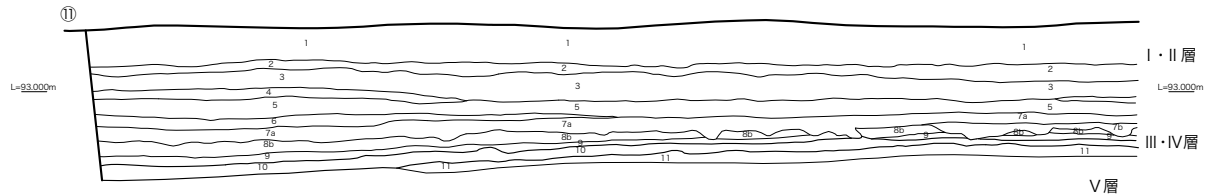
V層：基盤層。01A・00・01B区ではシルト層および砂層の互層堆積で、旧山口川にともな

う水性堆積層と考えられる。05 区では丘陵に向かって地形全体が上昇しており、黄褐色の粗粒砂および砂礫層が基盤層を形成している。

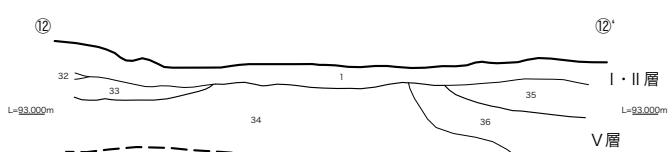
05 西壁



05 南壁



05 東壁



- | | | | |
|-----|----------|-----------|--------------------------------|
| 1 | 7.5Y5/1 | 灰色砂質土 | 小礫混じる。現水田耕作土。 |
| 2 | 7.5YR5/1 | 灰色砂質土 | +7.5YR6/6(橙色)がブロック状に混じる。現水田床土。 |
| 3 | 5G5/1 | 緑灰色砂質土 | 小礫混じる。旧水田耕作土(区画整理前)。 |
| 4 | 2.5Y6/1 | オリーブ灰色砂質土 | 礫混じり。 |
| 5 | 10Y6/1 | 灰色砂質土 | +7.5YR6/6(橙色)礫混じり。 |
| 6 | 2.5Y4/1 | 黄褐色砂質土 | 小礫混じり。 |
| 7a | 10YR3/2 | 黒褐色粘質土 | 洪水層。山茶碗混じる。 |
| 7b | 2.5GY6/1 | オリーブ灰色粗粒砂 | 洪水層。 |
| 8a | 10Y4/1 | 灰色粘土 | SD01埋土。炭化物多量に含む。 |
| 8b | 7.5YR5/2 | 灰褐色粘土 | +7.5YR7/8(褐色)。 |
| 9 | 10YR6/3 | にぶい黄褐色粘土 | 7.5Y3/1(オリーブ黒色)古墳水田耕作土。縄文遺物包含層 |
| 10 | 7.5Y4/1 | 灰色粘土 | 地山。 |
| 11 | 7.5Y7/1 | 灰白色シルト | 礫混じる。 |
| 12 | 2.5GY6/1 | オリーブ灰色砂質土 | 礫。黄褐色±混じる。 |
| 13 | 10Y7/1 | 灰白色砂質土 | +10G6/1(緑灰色)。 |
| 14 | 2.5Y7/6 | 黄褐色砂礫 | 小礫混じる。 |
| 15 | 10G6/1 | 緑灰色砂質土 | |
| 16 | 5Y5/1 | 灰色粗粒砂 | |
| 17 | 7.5Y7/1 | 灰白色粗粒砂 | |
| 18 | 2.5Y4/1 | 灰白色砂質シルト | +2.5Y8/1(灰白色)砂が礫状に混じる。 |
| 19 | 7.5Y6/3 | にぶい褐色砂礫 | SD04上層埋土。 |
| 20 | 7.5Y7/3 | にぶい褐色粗粒砂 | SD04上層埋土。 |
| 21 | 7.5Y6/6 | 褐色粗粒砂 | SD04上層埋土。 |
| 22 | 5Y4/1 | 灰色粘土 | 炭化物多量に含む。沈黙あり。 |
| 23 | 10YR5/1 | 褐色砂質シルト | SD04下層埋土。 |
| 24 | 7.5Y5/1 | 灰色粗粒砂 | 礫混じる。地山。 |
| 25 | 7.5Y7/1 | 灰白色粗粒砂 | 礫混じる。 |
| 26 | 7.5Y4/1 | 灰色粘土 | |
| 27 | 5Y8/2 | 灰白色粘土 | +7.5Y5/1(灰色)がブロック状に混じる。 |
| 28 | 10YR4/1 | 褐灰色粗粒砂 | 礫混じる。 |
| 29 | 5BG5/1 | 青灰色粗粒砂 | +地山ブロック土。 |
| 30 | 7.5Y4/1 | 灰色粗粒砂 | 礫混じる。 |
| 31 | 7.5Y4/1 | 灰色粗粒砂 | |
| 32 | 2.5Y5/1 | 黄灰色粗粒砂 | |
| 33 | 10YR3/1 | 黒褐色粗粒砂 | |
| 34 | 10YR8/6 | 褐色粗粒砂礫 | 地山。 |
| 35 | 10YR5/1 | にぶい黄褐色砂礫 | 地山。 |
| 36 | 10YR7/2 | にぶい黄褐色砂礫 | 炭化物混じる。 |
| P59 | 10YR4/1 | 褐灰色 | |

図 11 調査区壁土層断面図 04 (05 区 1 : 60)

第3章 縄文時代の遺構・遺物

第1節 01A区

1. 検出遺構 01A区は、設定された調査区の最も西側にあたる。調査区南東に自然地形の傾斜があり（01A NR01）、落ち際（掘削後のコンタレベルで91.5m）から岸側にあたる微高地上に遺物の出土分布が確認された。遺物包含層は01A区西壁付近で最大30cmほどの厚さを有しており、特に調査区西半分を中心に分布が濃密であるばかりか、さらに調査区外西側に向って遺物の包含は連続しているようである。第2章で言及したように、遺物包含層は黄褐色シルトや灰黄色

細粒砂からなっている。遺物包含層の掘り下げ（調査では検出Ⅲとして掘削）を行なった結果、最終的に遺物群のまとまりが4カ所に分かれて確認された。この4カ所のまとまりを、それぞれ01A SU01・SU02・SU03・SU04として記録した（図12）。01A NR01の埋土は縄文時代より以降の堆積層しか残存しておらず、縄文時代の遺物包含層が存在していたとしても、水流作用などで消失してしまっている可能性が高いと考えられた。

遺物包含層を完掘した旧地形の状況では、01A



図12 01A区縄文時代遺構配置図(1:100)

NR01 に直交する形で、調査区中央部に浅い落ち込みがあり、そこに炭化物の広がりが確認されている。

2. 出土土器の接合関係 (図 14) 出土土器において接合関係が確認できたものは 7 個体分と極めて少ない。近隣で出土したの土器片同士が接合したケースが多いなかで、107 のように微高地上と調査区中央部の浅い落ち込み内の土器片が接合する事例もある。

は、分布範囲においてやや疎密が認められるものの、調査区南東側の 01A NR01 の範囲を除いて展開しているのは上述の通りである。土器に関しては、深鉢あるいは鉢・浅鉢・注口土器があるが、ある特定器種が集中している区域というのは認められないようである。唯一、中期に属する土器である E-47 は、出土土器分布域の中心からやや離れた地点から見つかっている。石器の出土に関しても、土器の出土と同様の傾向がある。なお、石棒と考えられる S-68 は SU02 のなかという、最も遺物出土が濃密な区域から出土している。

3. 遺物の出土状況 (図 13・15) 遺物の出土

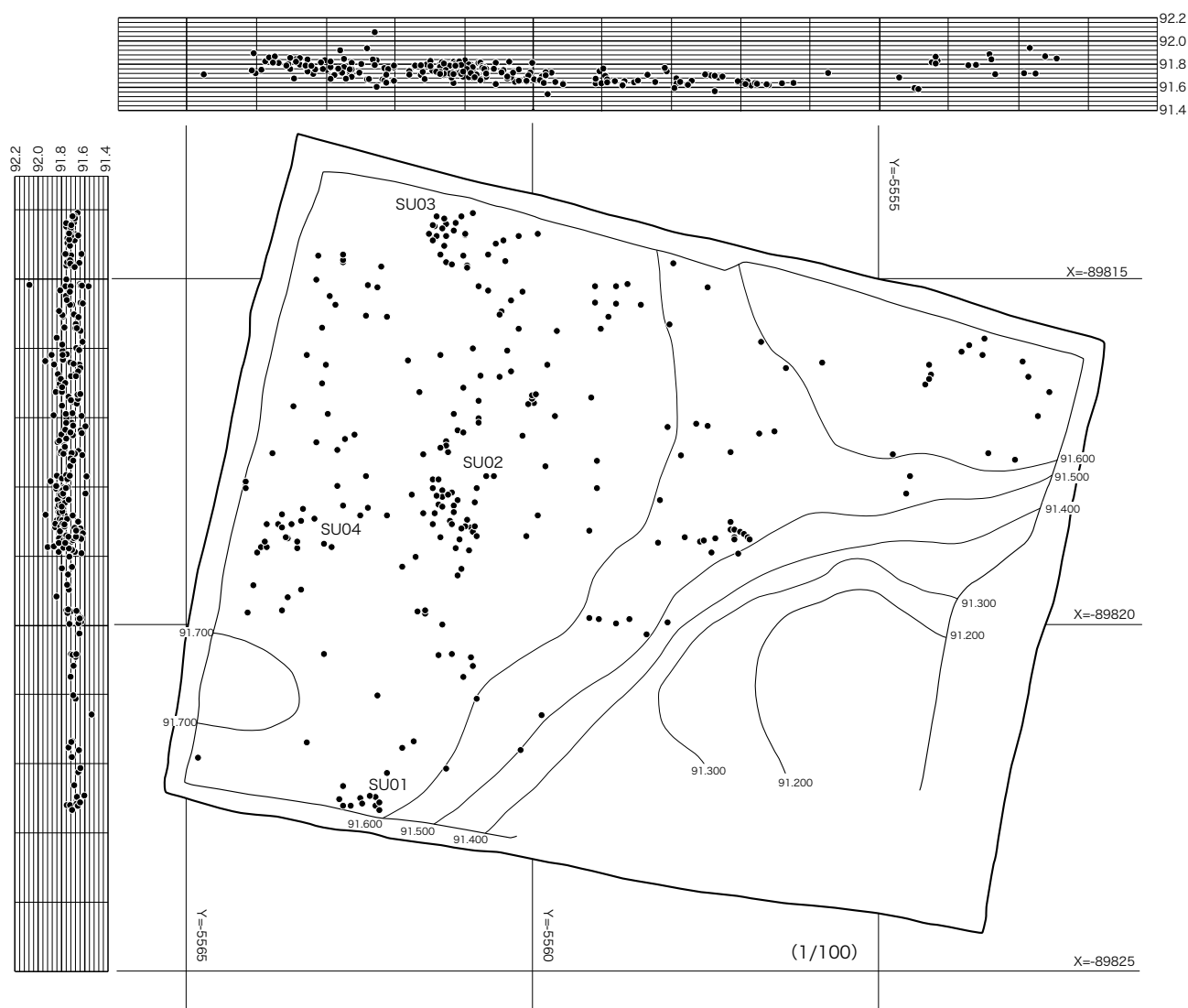


図 13 01A 区縄文時代遺物出土散布図 (1 : 100)

4. 出土遺物（土器） 01A区から出土した縄文土器片は計332点で、内訳は深鉢および鉢308点（口縁部72点・底部17点・胴部219点）、浅鉢4点、注口土器あるいは壺が20点である。このうち、文様の有無に関わらず口縁部片および器形の復元が可能なものを中心に図化を行ない、120点分を提示することとした。

a) 01A SU01 出土土器（図16の1～6）土器の出土は計9点で、そのうち6点を図化した。いずれも器形は深鉢あるいは鉢で、1・2は口縁部、3・4は胴部、5・6は胴部下半にあたると思われる。器面調整は外内面ともにナデ調整が多く、表面では幅5～10mm程度を一単位とする横方向のナデ調整が著しいものがある。

b) 01A SU02 出土土器（図16の7～13・図17の14～26）43点中、20点を図化した。7

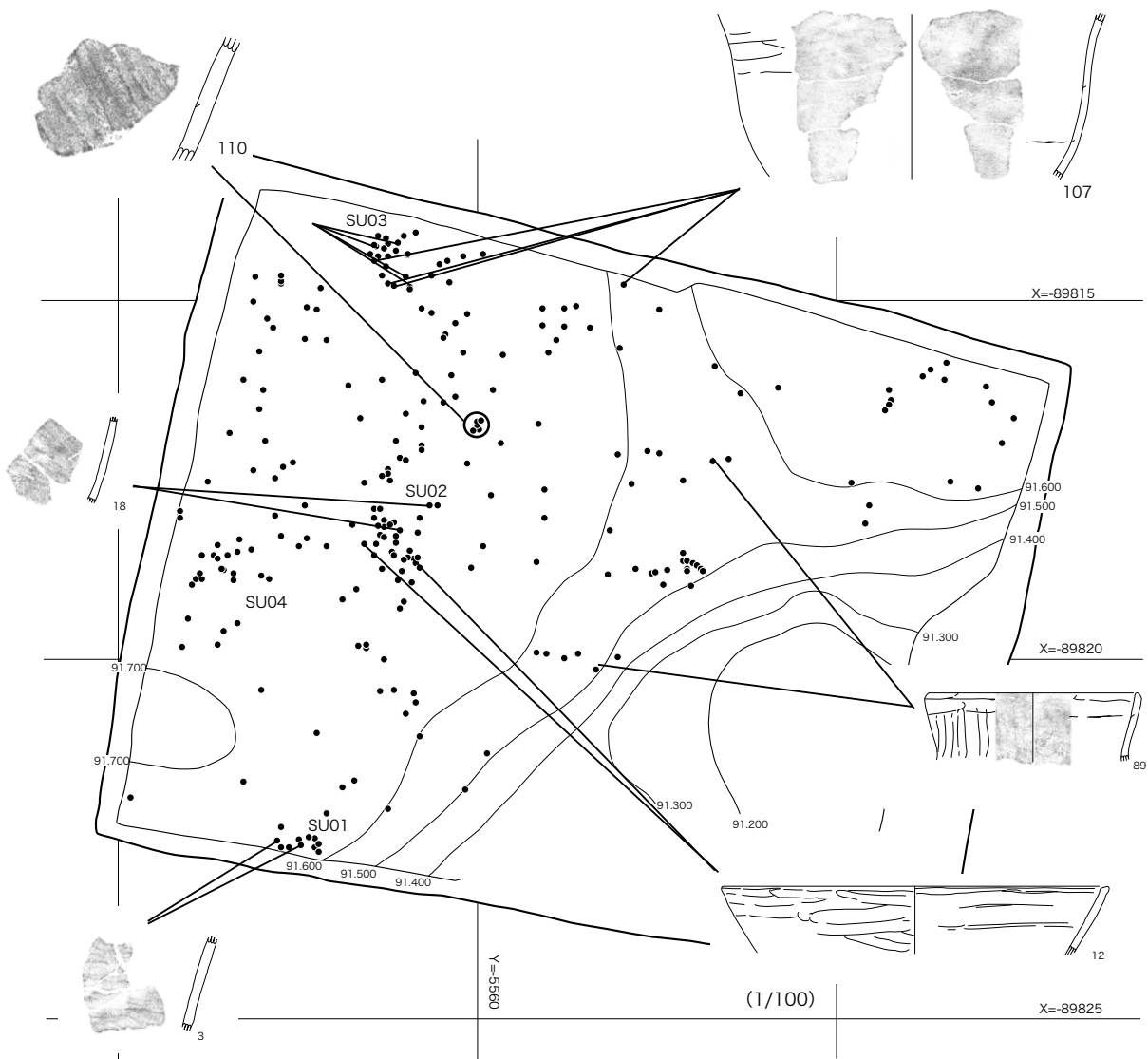


図14 01A区縄文時代出土遺物接合関係図（1：100）

は口縁部最大径の位置に横方向への沈線を巡らすもので、波頂部付近では同心円状に弧状沈線が連続して施されているものである。横方向の沈線と口縁端部との間および弧状沈線の間 LR が施されている。器面調整は表面がナデ、裏面には屈曲部を中心にユビのオサエの跡が認められる。8 は波頂部に三角形の突起が付けられているもので

ある。頸部で屈曲する器形で、口縁部には2本沈線内に巻貝による擬縄文が施され、屈曲部には刺突列が見られる。外面では突起の両端には棒状工具による盲孔が両側辺から施されており、内面には縦方向にへう状の工具による沈線が施されている。9 は横方向の沈線下に LR が施されているものである。10 は壺あるいは注口土器の胴部片と

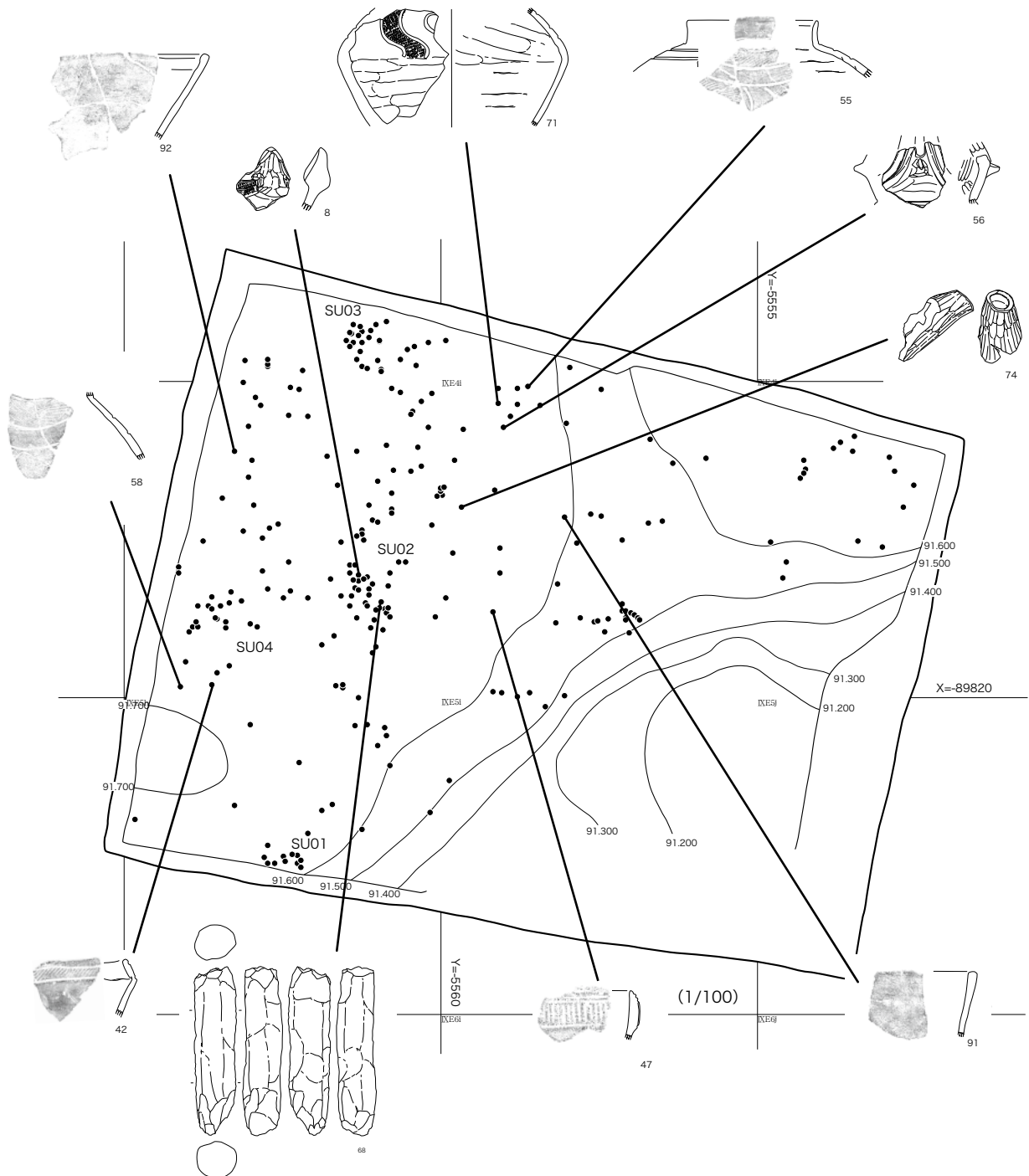


図 15 O1A 区縄文時代主要遺物出土位置図 (1 : 100)

考えられるもので、表面の器面調整はミガキ、横方向の沈線上にはLRが施されている。11～25は文様のない土器（片）である。12～14は深鉢あるいは鉢の口縁部で、12・13では口縁端部上面には面取りが施されているもので、12の内面にはナデ調整のへう状工具痕があり、13の内面には粘土紐接合痕が見られる。15～24は胴部片、25は底部片で、器面調整は全面ナデ調整である。25の底面は無調整のママである。26は焼成粘土塊と考えられる。表面の一部にスサの痕跡が確認できる。

7～10の存在から、これらの遺物群は後期中葉の西北出式の一群と考えられる。

c) 01A SU03 出土土器（図18の27～33・図19の34・35） 計21点出土したうち、7点を図化した。いずれも、深鉢あるいは鉢で、器面調整は外内面ともにナデ調整が主体である。31・32では斜方向にナデ痕の残されている部分もある。28は内面に幅広い凹みが横走するところがある。34・35は深鉢底部片で、34は底部に木葉痕が残されている。

d) 01A 区 SU04 出土土器（図19の34～40） 計14点出土したうち、6点を図化した。36～39は深鉢口縁部片で、39は緩い波状を呈するものである。40は胴部片、41は底部片で、底面には木葉痕が認められる。器面調整は、表裏面裏面ともにナデ調整である。

e) その他出土土器 その他、包含層などから出土した土器群を一括して報告する。

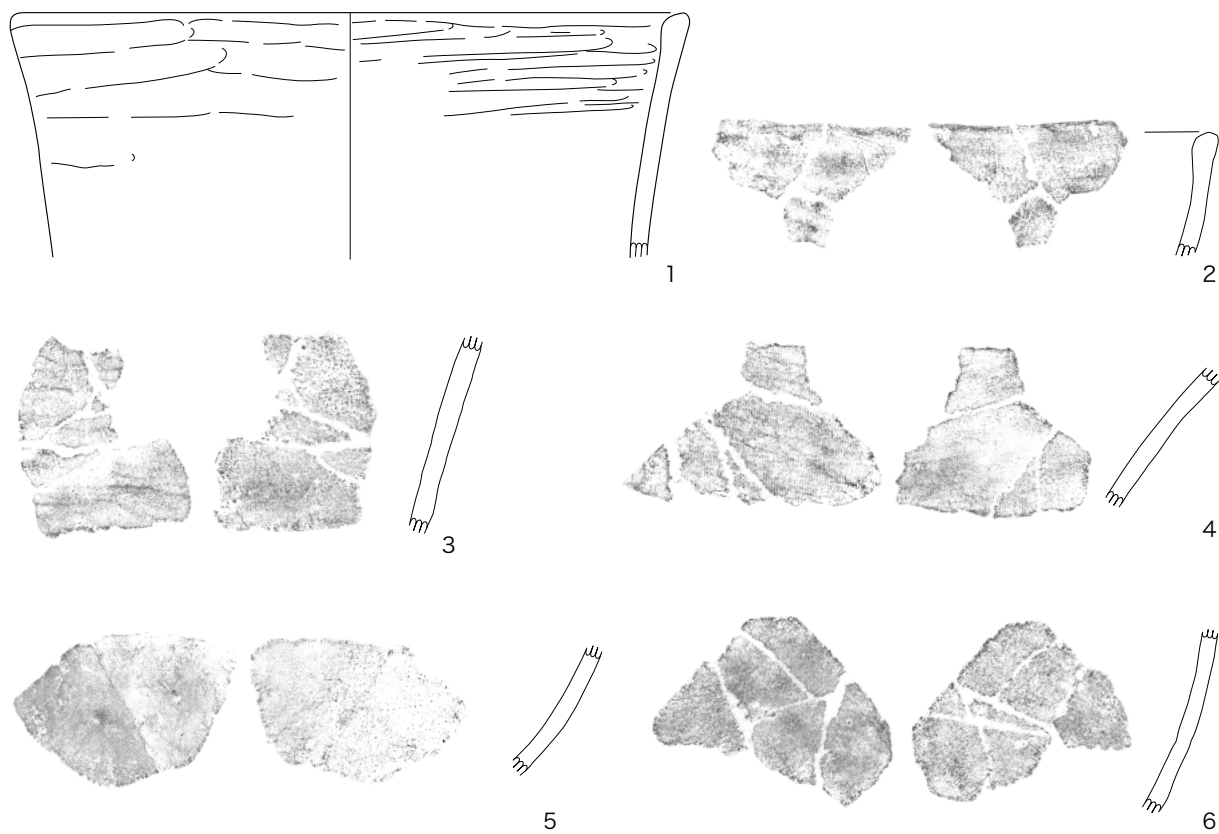
e-1) 中期中葉の土器（図20の47） 肥厚した口縁部外面に幅広の竹管状工具を並走させ、その間に縦位に半截竹管状工具による沈線文を充填させているものである。中期中葉の山田平Ⅲ式に比定される。

e-2) 後期中葉の土器群 01（図20の42・43・50） く字屈曲する深鉢あるいは鉢で、口縁部に並走する2条の沈線間に縄文が充填されているもの。42は緩い波状を呈し、縄文はLRが施される。内面はナデ調整で、屈曲部には粘土接合痕が確認できる。43も同様の器形を呈しているものの、沈線間にはRLの充填が認められるものである。50は横沈線をまたぐ形でLRが施されている。

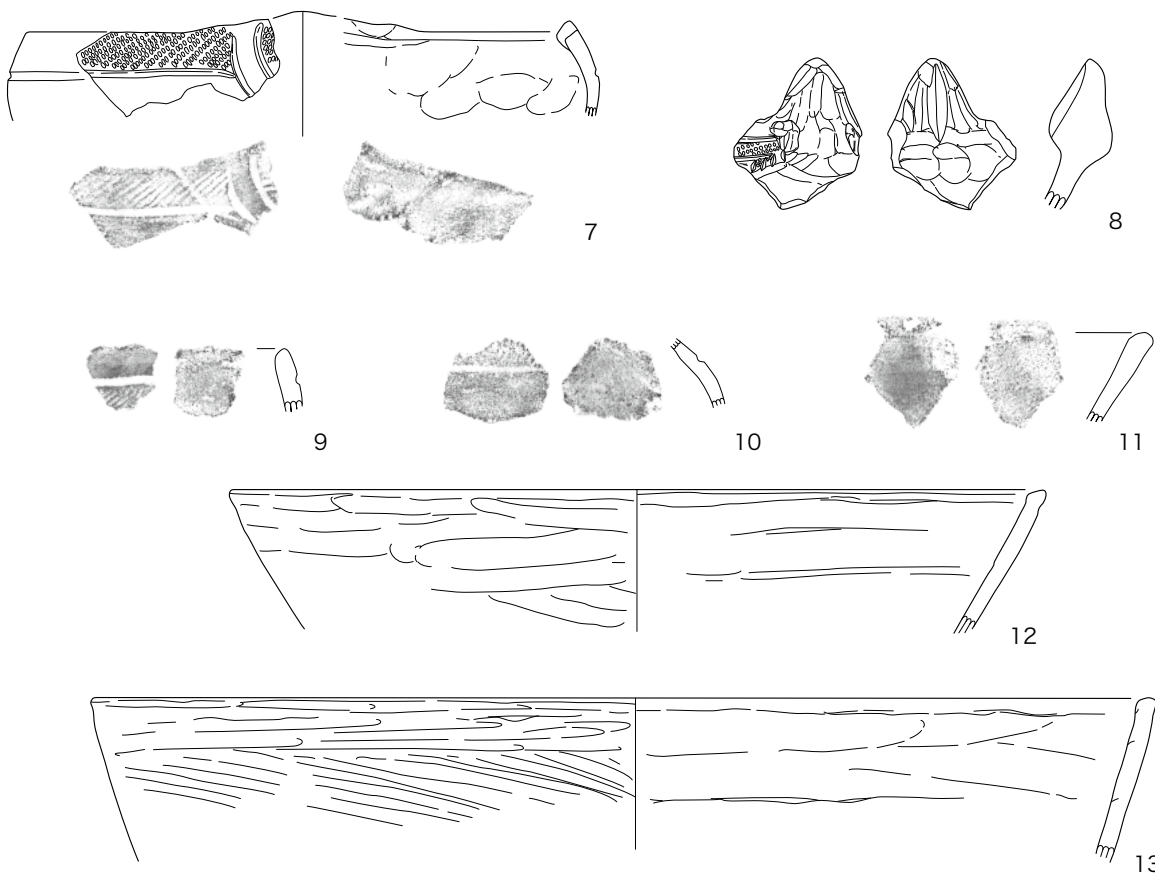
e-3) 後期中葉の土器群 02（図20の44～46） く字屈曲する深鉢あるいは鉢で、縦位方向に刻み目のある貼付け隆帯や（45・46）、同様の効果を有する刺突列文（47）が施されているもの。口縁部の形状に大きな特徴があるが、全形を窺えることのできる資料は少なく、本遺跡の資料でも破片資料にとどまっている。

e-4) 後期中葉の土器群 03（図20の48・51～53） その他の有文の深鉢あるいは鉢を一括する。48はく字屈曲を有する器形で、口縁部には横方向に沈線が見られる。51はく字屈曲する器形の頸部に連続する刻み目が施されているものである。52は並走する2本の沈線内に工具による刺突痕が存在する。53は口縁端部上面に沈線および刺突文が認められるものである。

e-5) 後期中葉の土器群 04（図20の49・54・55～74） 壺あるいは注口土器を一括する。49は突起状の貼付けを有し、並走する2本沈線内には縄文LRが充填されており、屈曲部には刻み目が施されている。55・57は同一個体と考えられ、口縁部から胴部上半までの資料である。胴部を中心に文様が施されており、平行する横沈線や館縦位方向の弧状沈線の中にLRの充填がみられるものである。加曽利B2式に比定されるものと考えられる。71は胴部上半から下半にかけての資料



01A SU01



0 10cm (1/3)

01A SU02

図 16 01A 区出土縄文土器実測図 01(1 : 3)

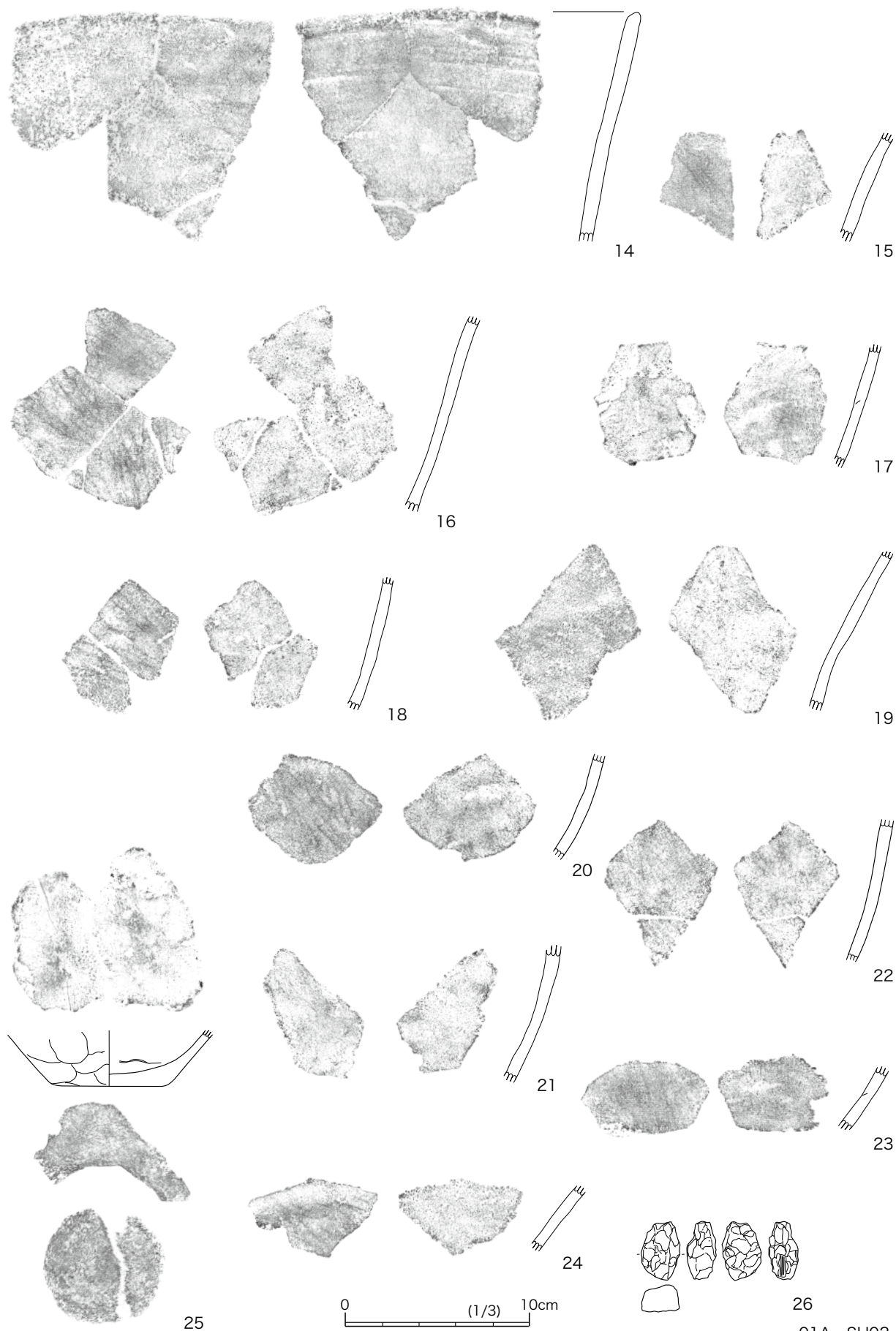


図 17 01A 区出土縄文土器実測図 02(1 : 3)

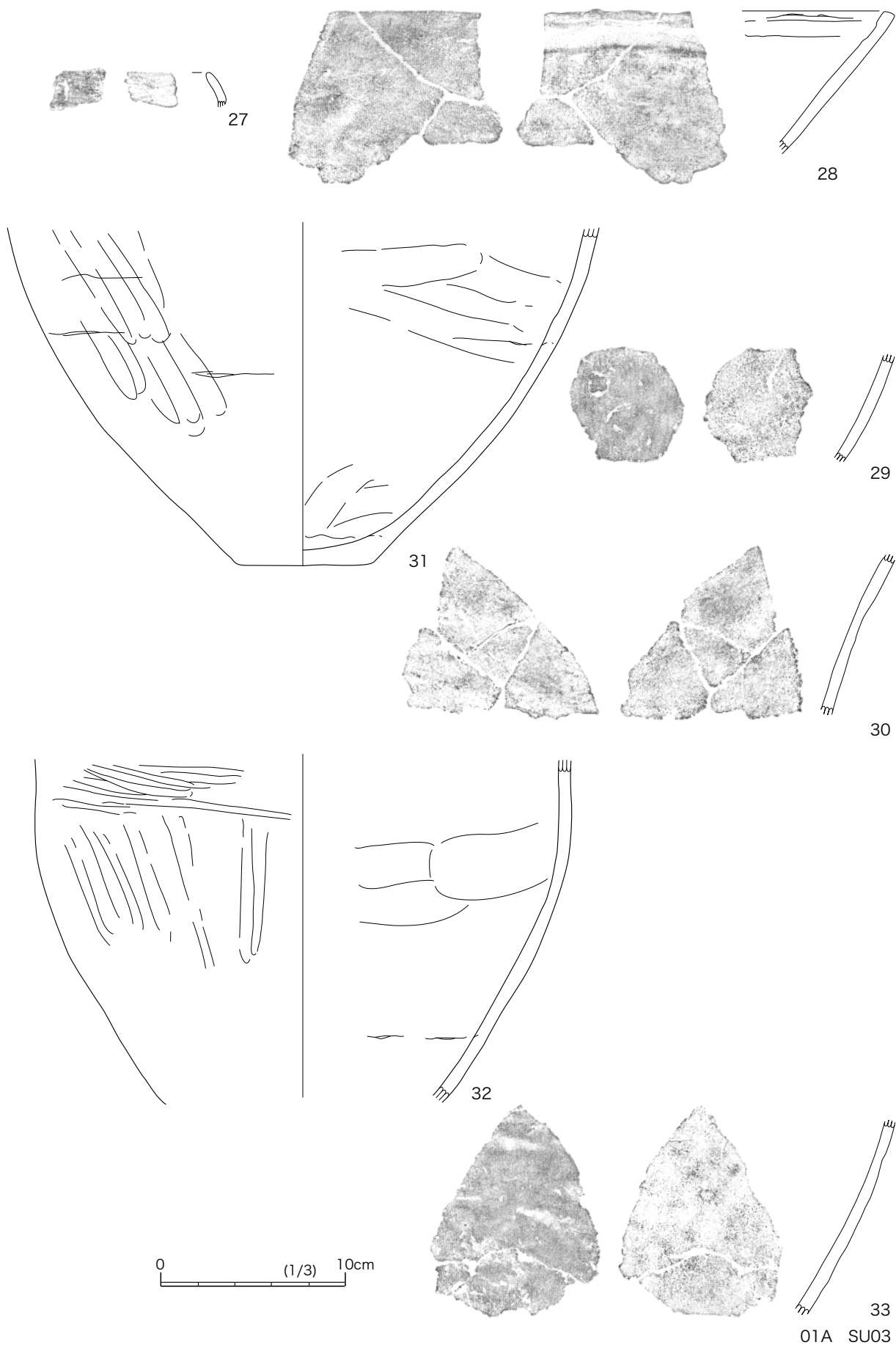


図 18 01A 区出土縄文土器実測図 03(1 : 3)

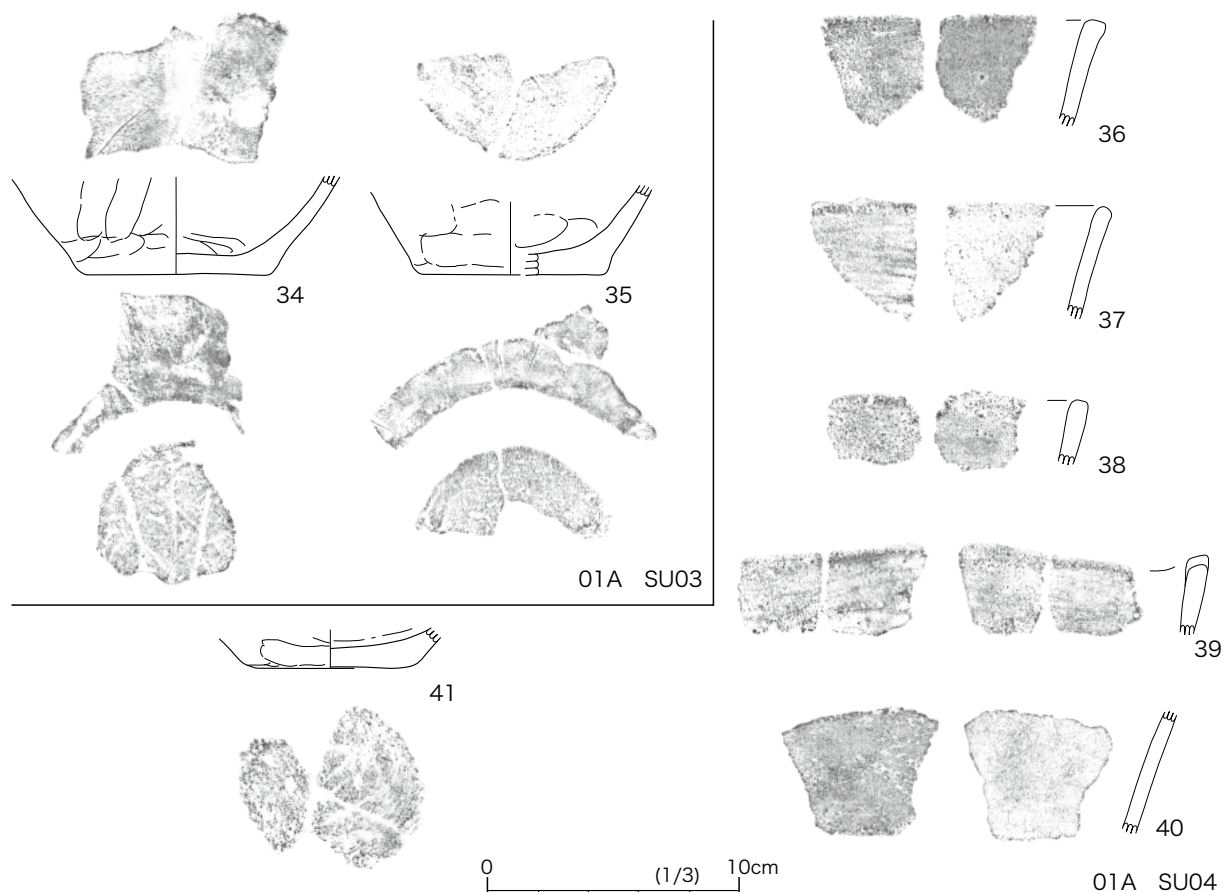


図 19 O1A 区出土縄文土器実測図 04(1 : 3)

である。蛇行する平行沈線内に縄文 LR の充填が認められるものである。加曽利 B1 式に比定されるものである。72 は胴部上半部上半部と考えられ、表面には斜方向に櫛描文がみられるものである。加曽利 B1 式あるいは B2 式に比定されるものと考えられる。以上、55・57・71 は施文された縄文が器面に明瞭な状態で残されているのが特徴的である。

56 は口縁部から頸部片と考えられる。くの字状に緩く屈折する器形でかつ波状を呈する部分で、口縁部に平行して貼付け隆帯が施され、波頂部には凹み、さらに下方には上面に沈線を有する突起状の貼付けがある。

58・63・73 は同一個体と考えられるものである。胴部上半に当たると考えられ、平行する沈線間に縄文 RL 施されている。

その他、主に胴部片を提示している。今回の調査では注口部の出土は少なく、図 21 の 74 のしか出土していない。

e-6) 後期中葉の土器群 05 (図 21 ~ 23 の 75 ~ 120) 無文の深鉢あるいは鉢を一括する。75 ~ 104 は口縁部片である。75 ~ 91 は直立気味の器形になると考えられるもので、87 は波状を呈するものである。器面調整は外内面ともにナデで、横方向に施されているものが多いようであるが、89 のように胴部は縦位方向に調整が施されているものもある。92 ~ 104 は傾斜する器形を有するものである。92 ~ 95・97 は内面に幅広の凹みを有するもので、92 ~ 94 は同一個体である。器面調整は外内面ともに横方向のナデ調整が主体である。

107 ~ 117 は胴部片である。胴部上半から下



01A 検川など
(51のみ01B)

図 20 01A 区出土縄文土器実測図 05(1 : 3)

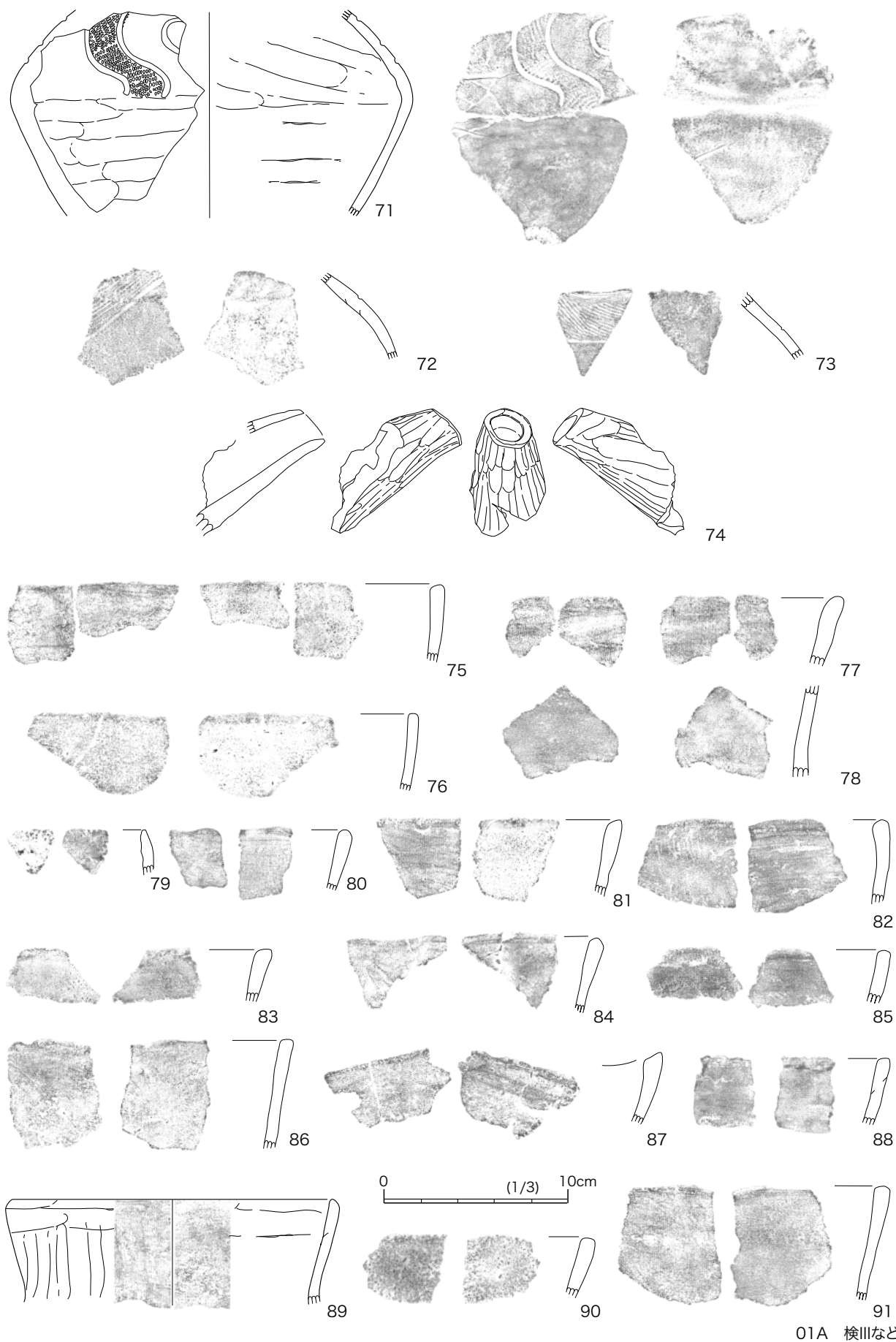


図 21 01A 区出土縄文土器実測図 06(1 : 3)

01A 検IIIなど

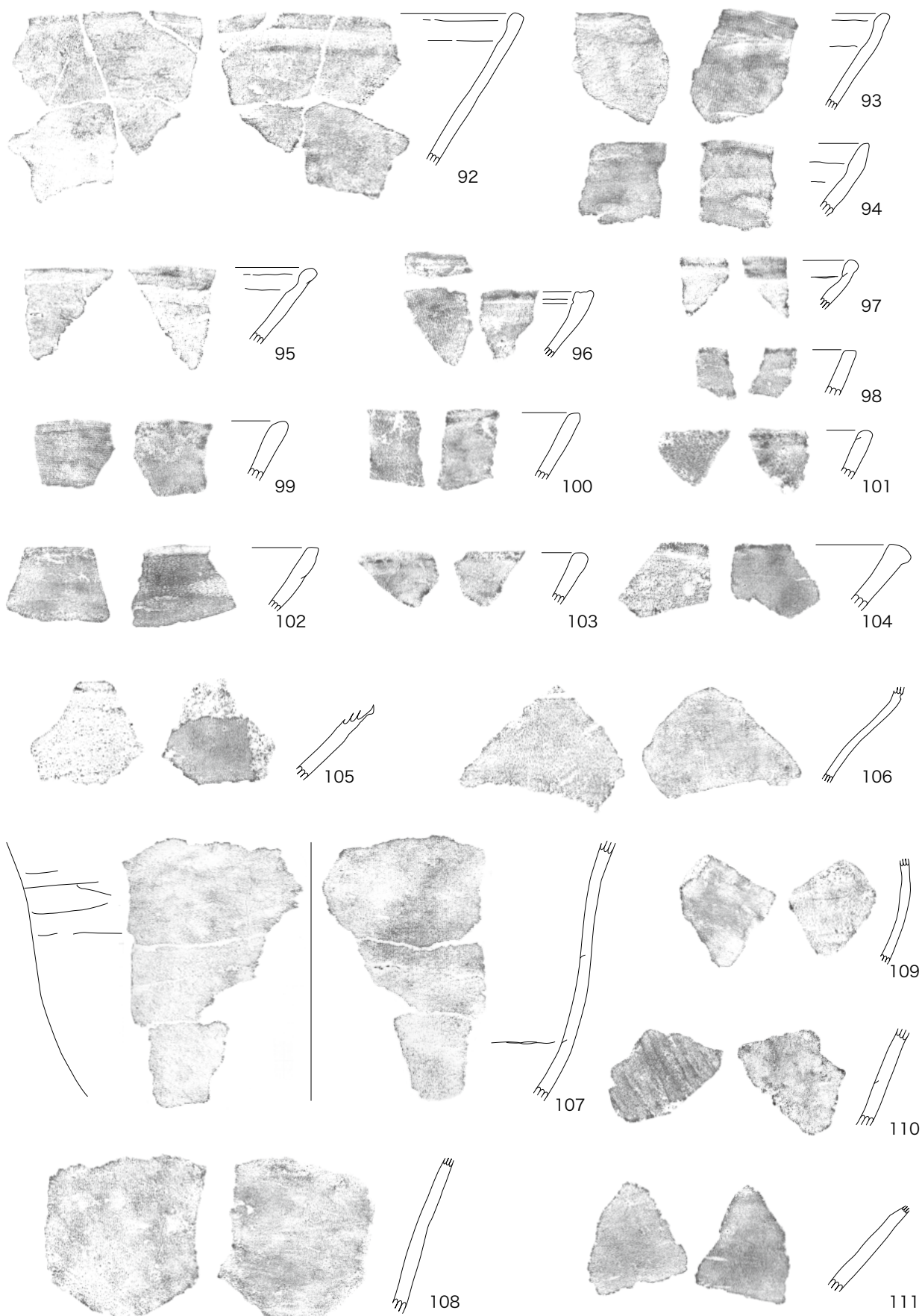
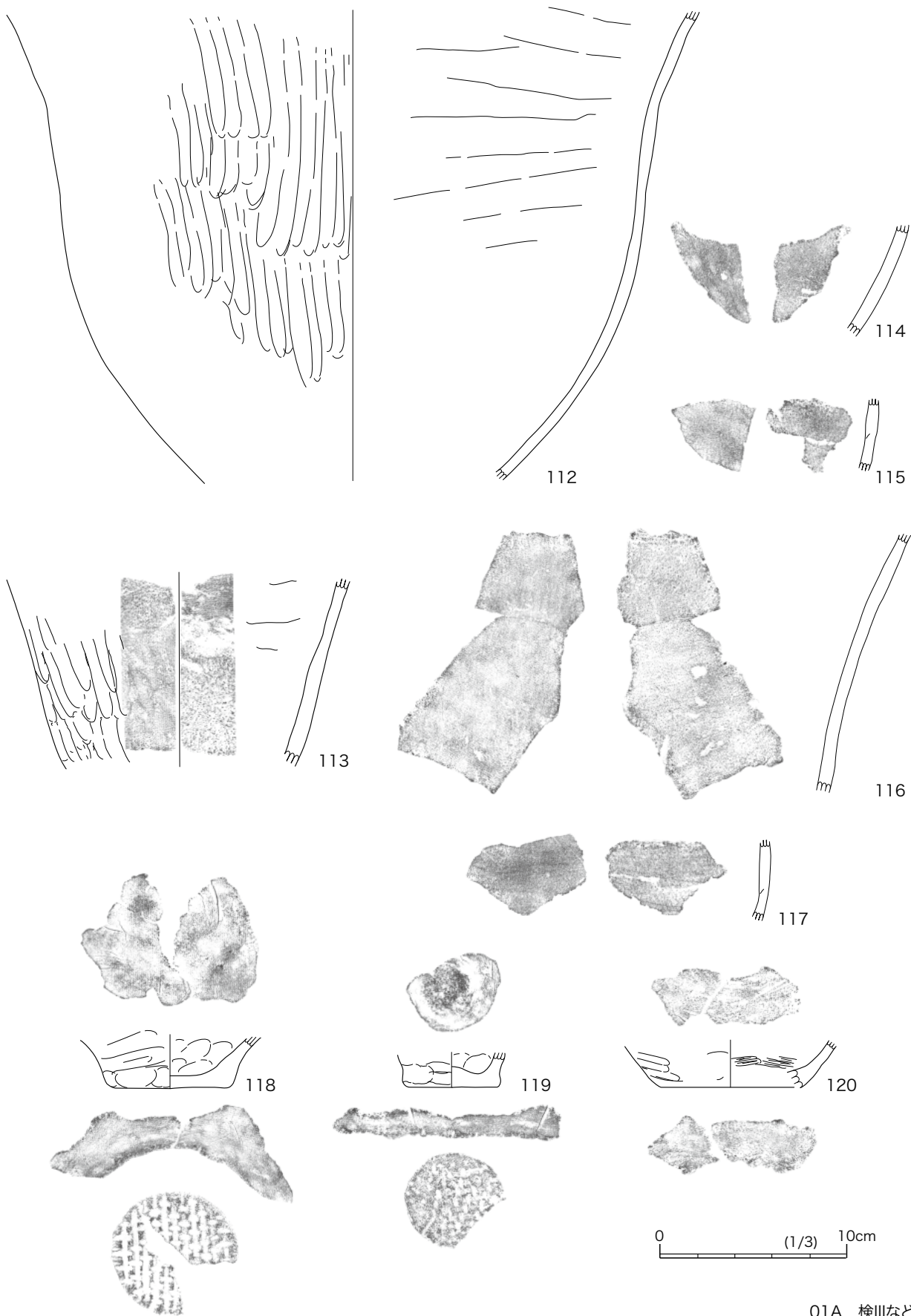


図 22 01A 区出土縄文土器実測図 07(1 : 3)



01A 検IIIなど

図 23 01A 区出土縄文土器実測図 08(1 : 3)

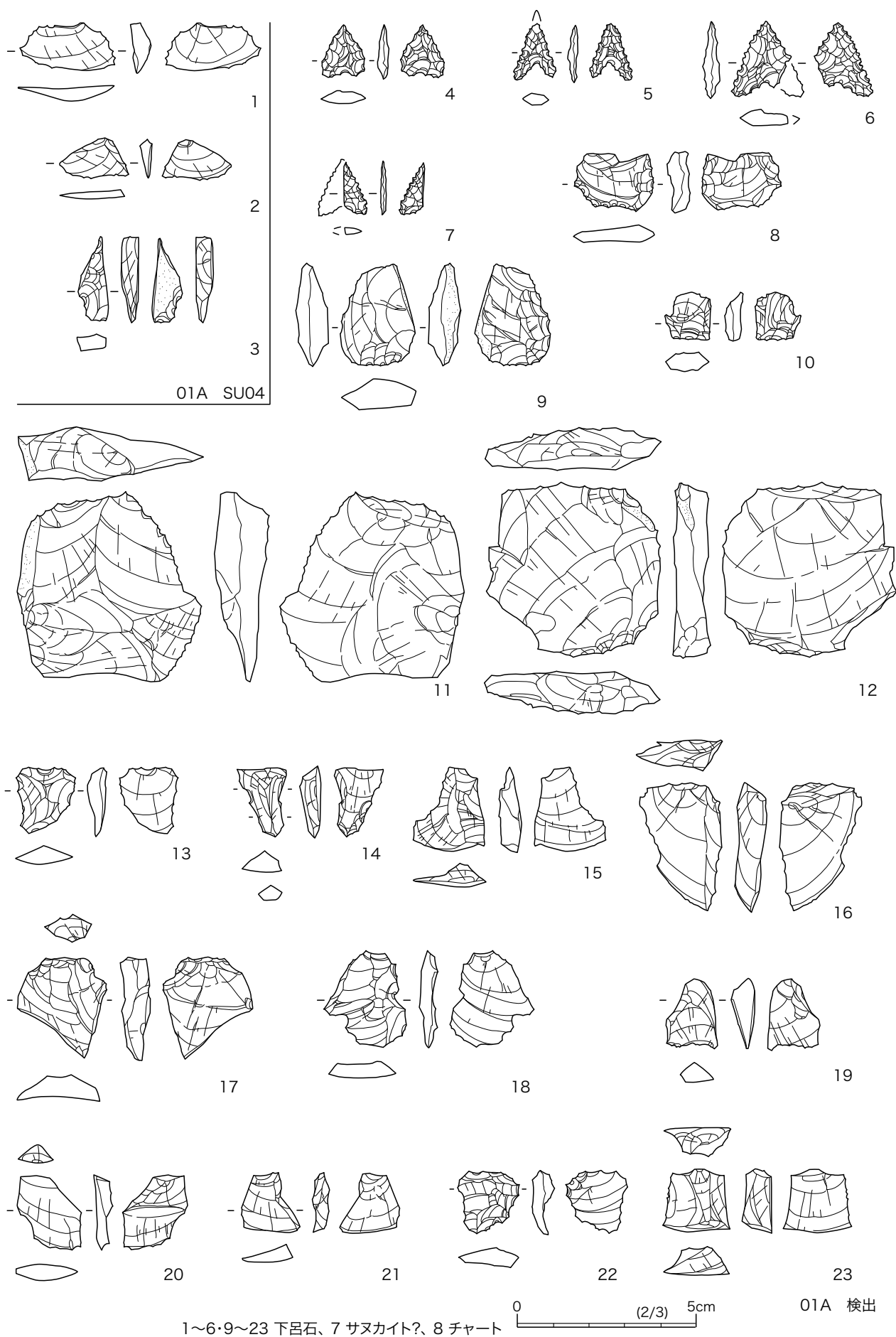


図 24 01A 区出土縄文時代石器実測図 01(2 : 3)



図 25 01A 区出土縄文時代石器実測図 02(2 : 3)

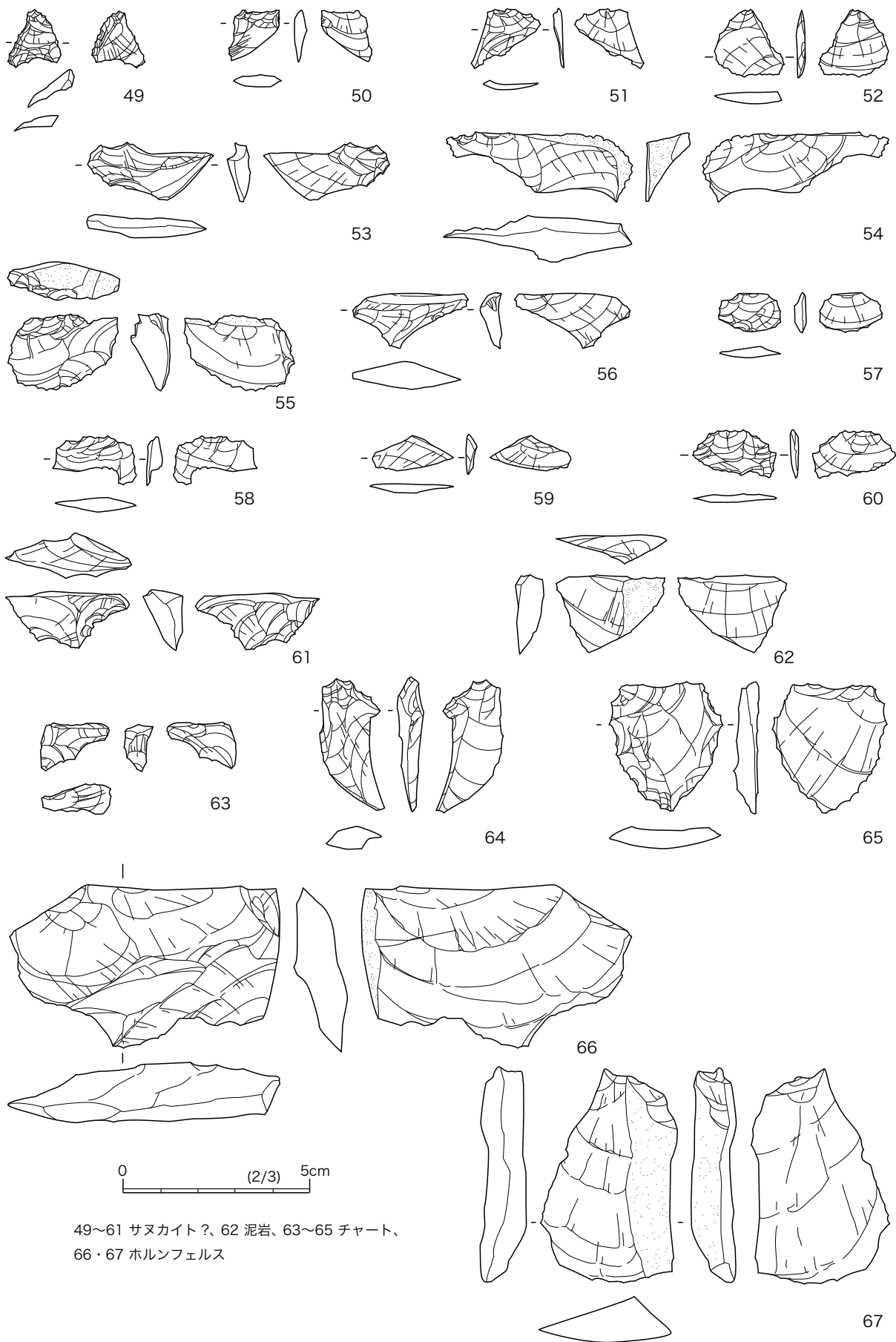


図 26 01A 区出土縄文時代石器実測図 03(2 : 3)

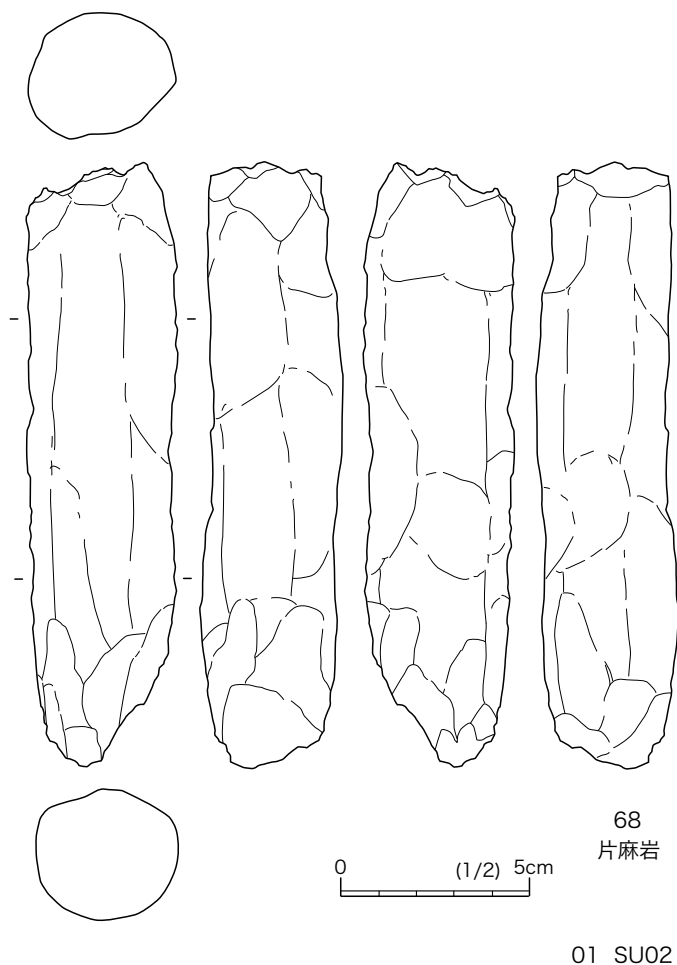


図 27 01A 区出土縄文時代石器実測図 04(1 : 2)

半にかけて緩い湾曲を呈する器形が多く、当該時期に多く見られる土器器形の特徴である。器面調整は外内面ともにナデ調整で、112・113 では縦位方向にナデ調整が施されている。

118～120 は底部片である。118・119 は底面に網代痕を有するもので、圧痕元の編物はともに1本越え2本くぐり1本送りである。器面調整は118・119 でナデ調整、120 では外内面に条痕が施されており、巻貝条痕の可能性もある。

5. 出土遺物（石器・石製品） 出土した石器器種には、石鏃・搔器・調整のある剥片・剥片・微細剥片・石核・大型剥片がある。遺物集積の中からの出土は、01A SU04 からのみであり、ほと

んどが包含層掘り下げ時に検出したものである。また、石製品は、01A SU02 から石棒が1点出土している。

a) 01A SU04 出土石器 (図 24 の 1～3・6) 石鏃1点・調整のある剥片1点・剥片3点が出土している。このうち、剥片1点を除いた4点を図化した。6は凹基無茎鏃で、側辺が鋸歯縁状を呈するものである。下呂石製。1・2は横長剥片、3は調整のある剥片である。3は縁辺に連続した剥離が認められる。いずれも下呂石製。

b) その他出土石器 検出で出土した石器を器種別に報告する。

b-1) 石鏃 (図 24 の 4・5・7) SU04 出土の1点を含めて、計4点出土しており、残りの3点を提示した。いずれも凹基無茎鏃で、5・7は側辺の鋸歯状が著しい。4・5は下呂石製、7はサヌカイト製。

b-2) 搔器 (図 24 の 8・9) 8は横長剥片の側辺に連続した剥離が、端辺にやや連続した微細剥離が認められるものである。チャート製。9は横長剥片の縁辺にやや不連続な剥離が認められるものである。下呂石門礫製。

b-3) 剥片・調整のある剥片・石核 小型剥片石器製作にともなうと考えられる器種を一括して報告する。図 24・25 の 11～48 は使用石材が下呂石のものである。11・12は剥離面の長軸が5cmを越える大型の剥片で、やや縦長を呈するものである。13～23はやや縦長状の剥片である。細長い菱形状を呈するものが多いものの、23のように方形状を呈するものもある。24～41は横長状の剥片で、貝殻状の形状を呈するものが多い。42～48は石核と考えられる。貝殻状剥片など横長状の剥片を多く作出していたようで、長

さ1～2cm程度で剥離を終了しているようである。49～61は使用石材がサヌカイトのものである。49は三角形を呈する剥片の一辺に連続した調整が加えられているものであり、石鏃未成品も考えられるものである。50～52はやや縦長状の貝殻状を呈する剥片である。53～60は横長状の剥片で、貝殻状を呈するものが多い。54は石核あるいは打面を調整するための剥片かもしれない。61は石核で、両面ともに同一方向から剥片が作出されたものと考えられる。62の

石材は泥岩で、三角形の剥片である。63～65は使用石材がチャートで、やや縦長状の剥片である。

b-4) 大型剥片 66・67は使用石材が砂岩起源のホルンフェルスの大型剥片である。66は横長に、67は縦長に剥片作出が行なわれている。

c) 石製品 (図27の68) 石棒と考えられる資料が1点出土している。片麻岩製で、表面の風化が著しいものである。

第2節 01B区

1. 出土遺物 (図28) 01Bでは、当該期の遺構は検出されなかったものの、縄文時代の遺物が散発的に出土している。図28の201は突帯文土器深鉢口縁部である。口縁部の突帯は刻み目や押圧のない素文突帯で、端部上端に付けられている。

頸部の屈曲は明瞭な段を有するものである。五貫森式に比定されるものか。203は条痕調整の深鉢胴部片で、外面には横方向に二枚貝条痕が認められる。縄文時代晩期後半のものと考えられる。

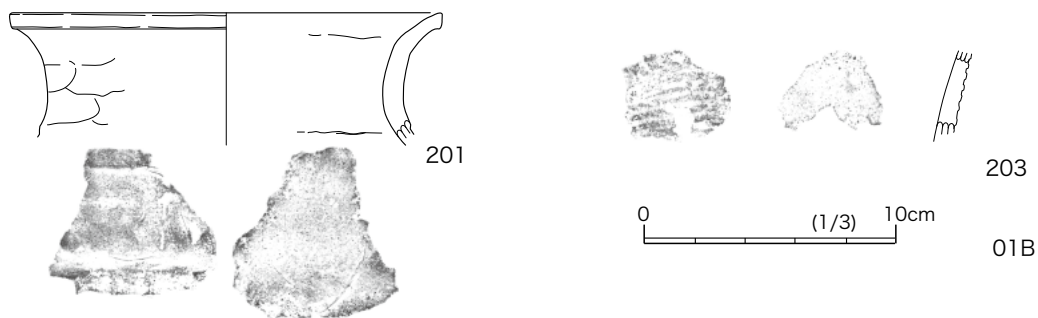


図28 01B区出土縄文時代土器実測図01(1:3)

第3節 05区

1. 検出遺構 05区では溝3条・土坑20基・ピット66基が検出され、竪穴建物跡状の落ち込み1基(05 SB01:以下、竪穴状遺構とする)とピット列による建物跡の想定2ヶ所(05 SB02・03)が確認された。05 SB01は調査区西寄りで直径約6mを測る落ち込みである。05 SB01の付近には、土坑05 SK01～12のほか、平面がL字形に曲がる溝05 SD02がある。うちSB01、SK08～10・12からは、磨製石斧や石鏃のほか、200点近い石器の剥片が出土している。05区は地形全体が東側から西側に向って傾斜している。

調査区西半分にわたって、縄文時代の遺構面に重なって、後述するような古墳時代の水田跡が検出されている。古墳時代の水田耕作土と縄文時代遺物包含層は連続した状態であることが確認されていることから、水田形成時には、既に縄文時代の旧地表面および遺物包含層は攪乱されている可能性が考えられる。調査区西半分では、05 SK06・07・08・10・11・14のように、北東—南西を長軸とする土坑が連続して検出されている。05 SB01同様に掘り方が10cm程度と浅い遺構群のようであるが、竪穴状遺構との前後関係は不明で

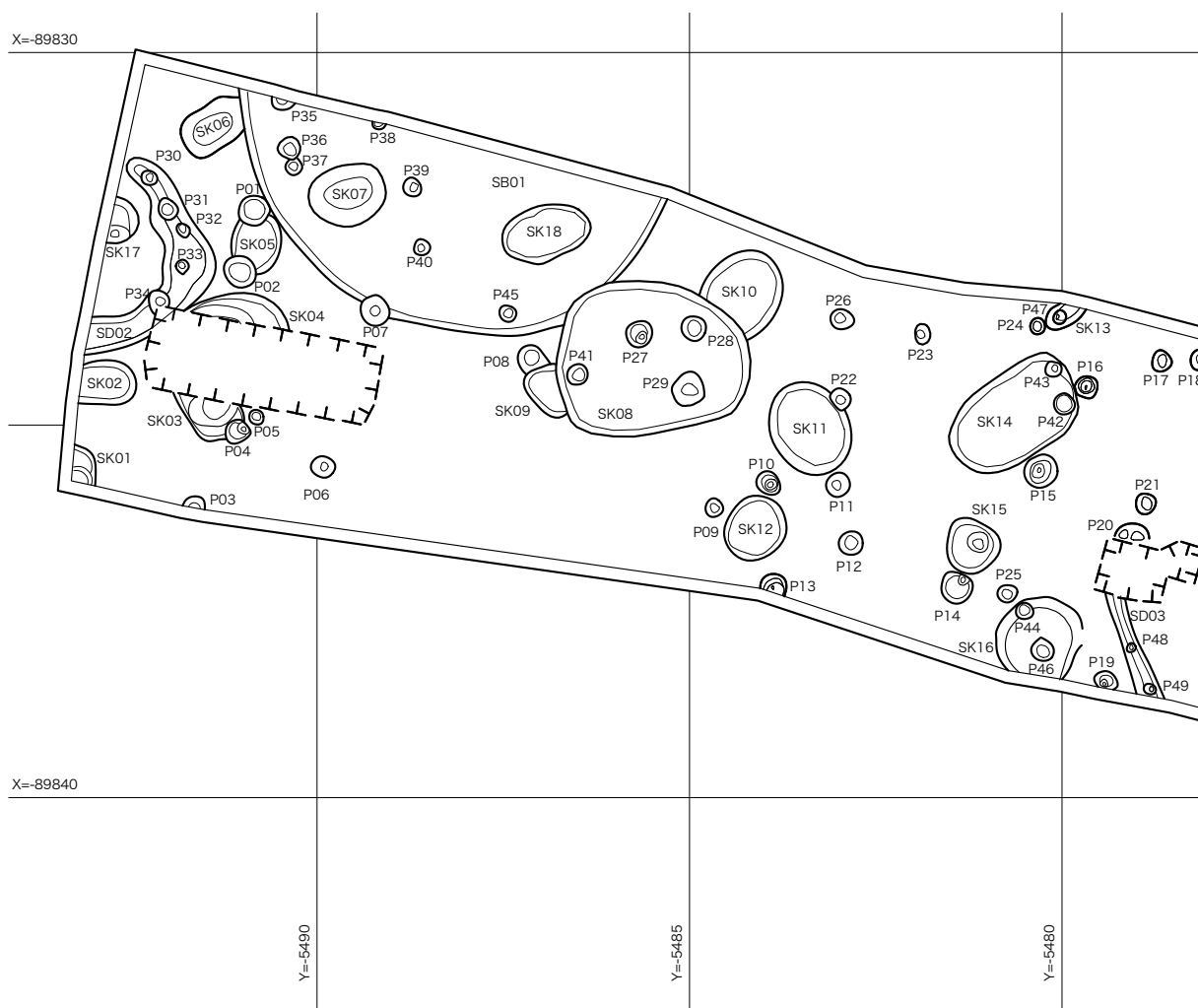


図 29

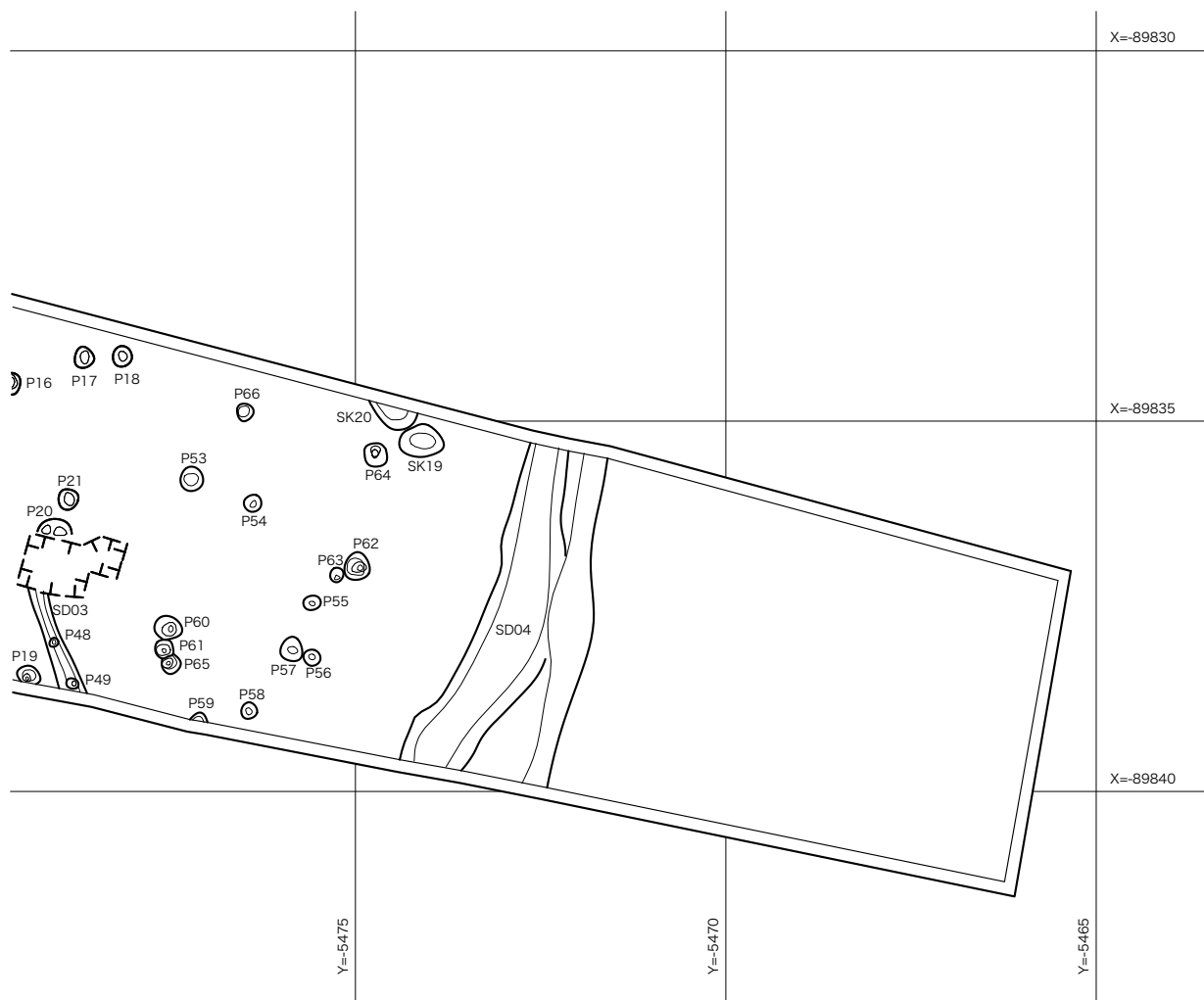
ある。なお、調査区東側に存在する 05 SD04 は、ここから東側に向って丘陵尾根に向って上昇していることと、縄文時代縄文時代遺物包含層下の自然地形でも同様な凹みがみられることから（図 11）、丘陵裾部を巡る自然流路状のものと考えられる。

以下、個別に遺構の状況を報告する。

a) 05 SB01（図 30） 約 6m を測る円形と考えられ、南側半分のみが確認された。落ち込み自体は西側に傾斜しており、北壁セクションによると低くなっている西側には床想定レベルの下に土の堆積があるようで、北壁セクションの 1 層と 4 層との境界が床面と想定される。床下の埋土は灰

白色砂質シルトで、埋土は黄褐色や灰白色の粘土および砂質シルトである。SK18 の西側に接した付近に自然礫 3 点が存在する。柱穴の配置も断定はできないものの、05 P35・36・37 と 05 P40 が組み合うかもしれない。なお、埋土から多くの遺物が出土しているが、特に東半分の 05 SK18 周囲から多く出土している傾向があり、全体の地形の傾斜からみた場合、むしろ地形の高い方からの遺物の出土が多いようである。

b) 05 SB02・03（図 31） ピット列が円形に配列する部分である。径は 4m ほどであり、建物跡を想定した場合、全体径としては 5～6m ほどとなり、05 SB01 とほぼ同等の大きさになる



05 区縄文時代遺構配置図 (1 : 100)

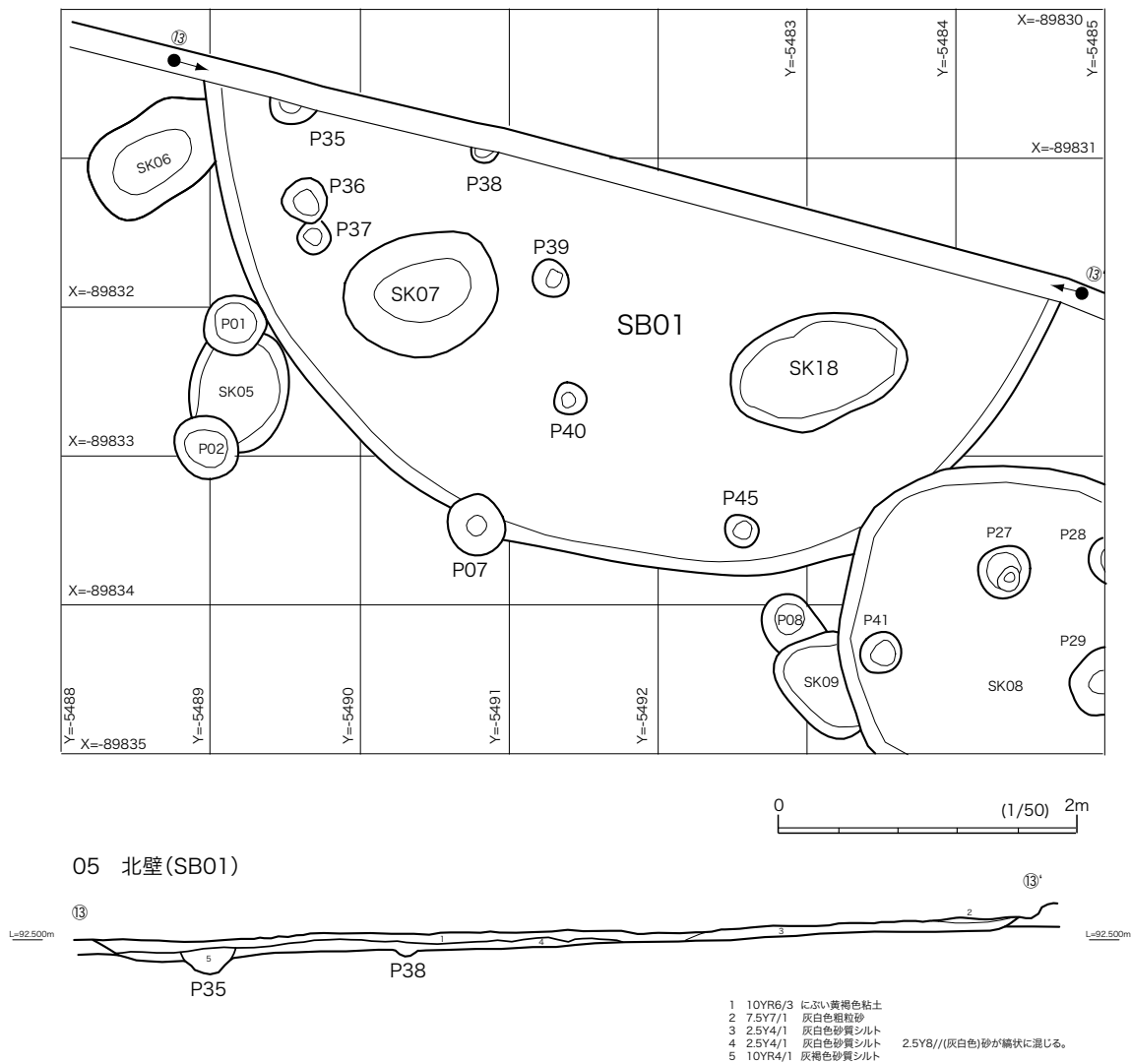


図 30 05 SB01(1 : 50)

と考えられる。05 SB02・03の想定が可能な場合、両者は同時には存在不能であり、時期的前後関係が考えられるものである。

c) 土坑群 05 区で検出された土坑は、上述した通り、調査時点ではいずれも掘り方が浅いようである。平面プランで見ると、次の三群に分類できる。

c-1 長軸と短軸比が 2 対 1 程度で長楕円形のプランを呈するもの。 05 SK02・03・06・14・18 が該当する。

c-2 長軸と短軸比が 4 対 3 程度で長楕円形のプランを呈するもの。 05 SK05・07・08・10・11

が該当する。

c-3 長軸と短軸比が 1 対 1 程度で円形のプランを呈するもの。 05 SK12・15・16 などが該当する。

時期的前後関係では、05 SB01 を基準とすれば 05 SK06 は SB01 より以前で、05 SK07・08 は SB01 より以降ということになる。出土遺物が多いのは 05 SK07・08・09・10・12 で、特に 05 SK08 から多く出土している。これら土坑の性格を断言するのは難しいが、土坑墓あるいは生活に関わる人為的掘削によるものと、自然地形の凹地がもとになっているものの両者が存在している可能性がある。

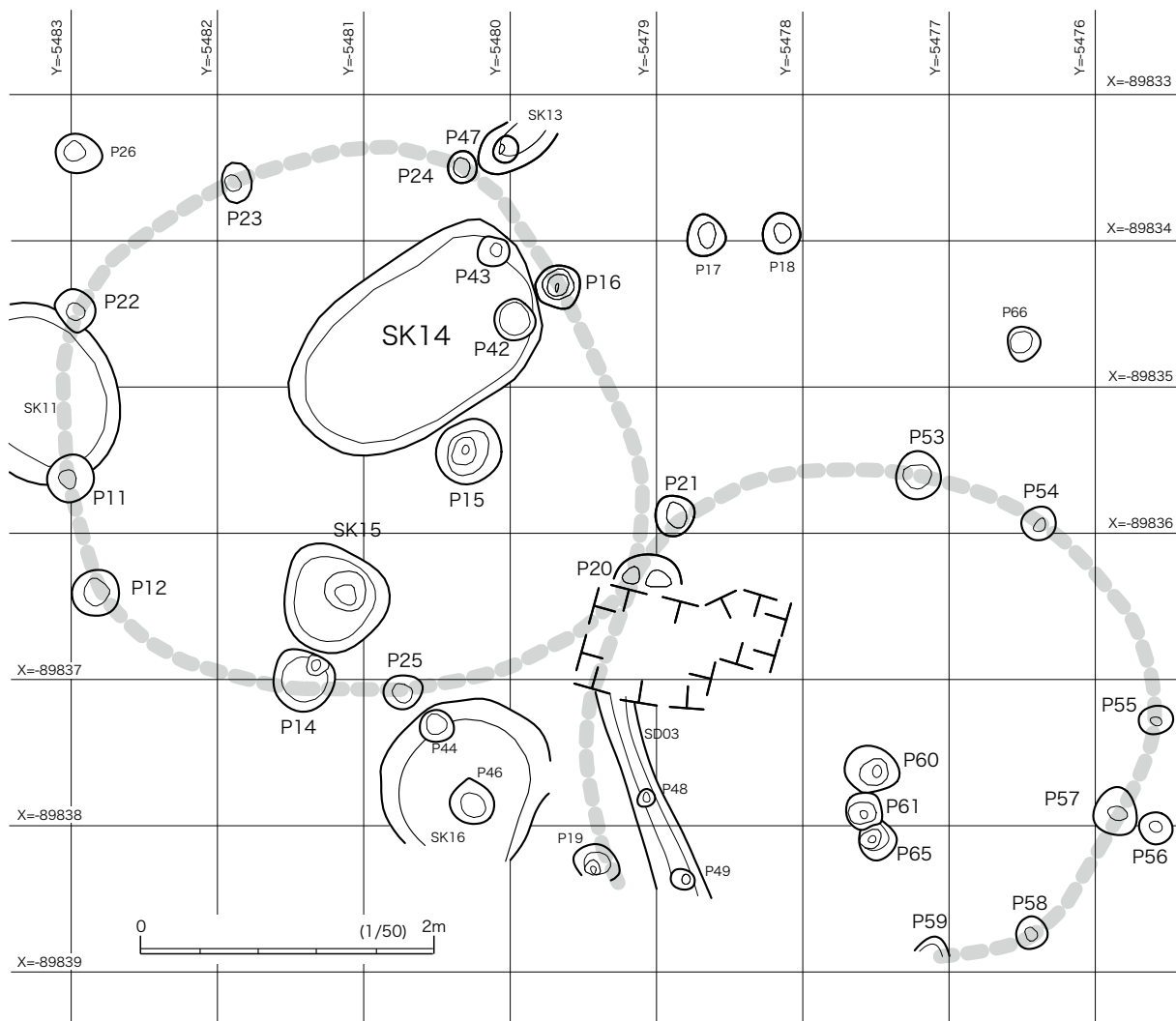


図 31 05 SB02・03(1:50)

2. 出土遺物（土器） 05 区で出土した縄文土器は、すべて晩期前半期に属するものと考えられる。総数計 111 点以上で、口縁部 25 点、底部 6 点、胴部が 80 点以上である。

a) 05 SB01 出土土器 (図 32 の 301・302)
7 点出土したうち 2 点図化した。301 は深鉢あるいは鉢の口縁部で、内向する器形である。器面調整は外内面ともにナデ調整である。302 は同じく胴部片で、調整は外面が横方向に二枚貝条痕、内面がナデ調整である。

b) 05 SK08 出土土器 (図 32 の 304～308)
10 点出土したうち 5 点を図化した。いずれも深鉢あるいは鉢の胴部片である。器面調整は、

305 の外面が斜方向のケズリ、307・308 の外面が斜めあるいは縦方向の二枚貝条痕で、それ以外はナデ調整である。また、306 の外面には粘土紐接合痕が確認できる。

c) 05 SK09 出土土器 (図 32 の 309～315)
14 点出土したうち 7 点を図化した。深鉢あるいは鉢の口縁部片・胴部片である。309・310 は外面に幅広の沈線が横方向に施されてるものである。301 はあたりが弱いものである。311 はやや肥厚する口縁部片で、外面に 2 条のいわゆる半截竹管文が、波状を呈して並走している。調整は外内面ともにナデ調整である。312 は口縁部片で、器面調整は外面が横方向の巻貝条痕、内面

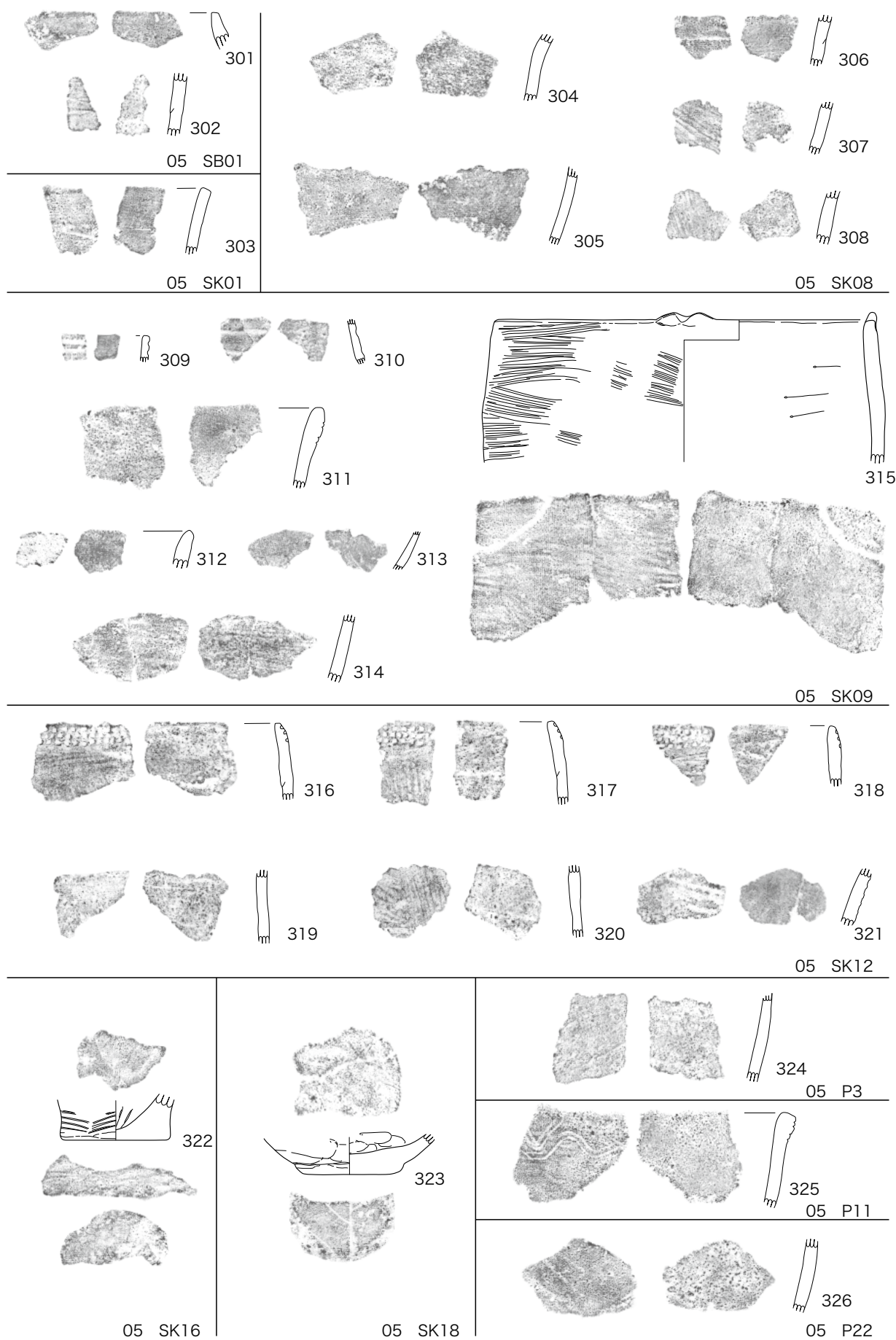


图 32 05 区出土土器 01(1:3)

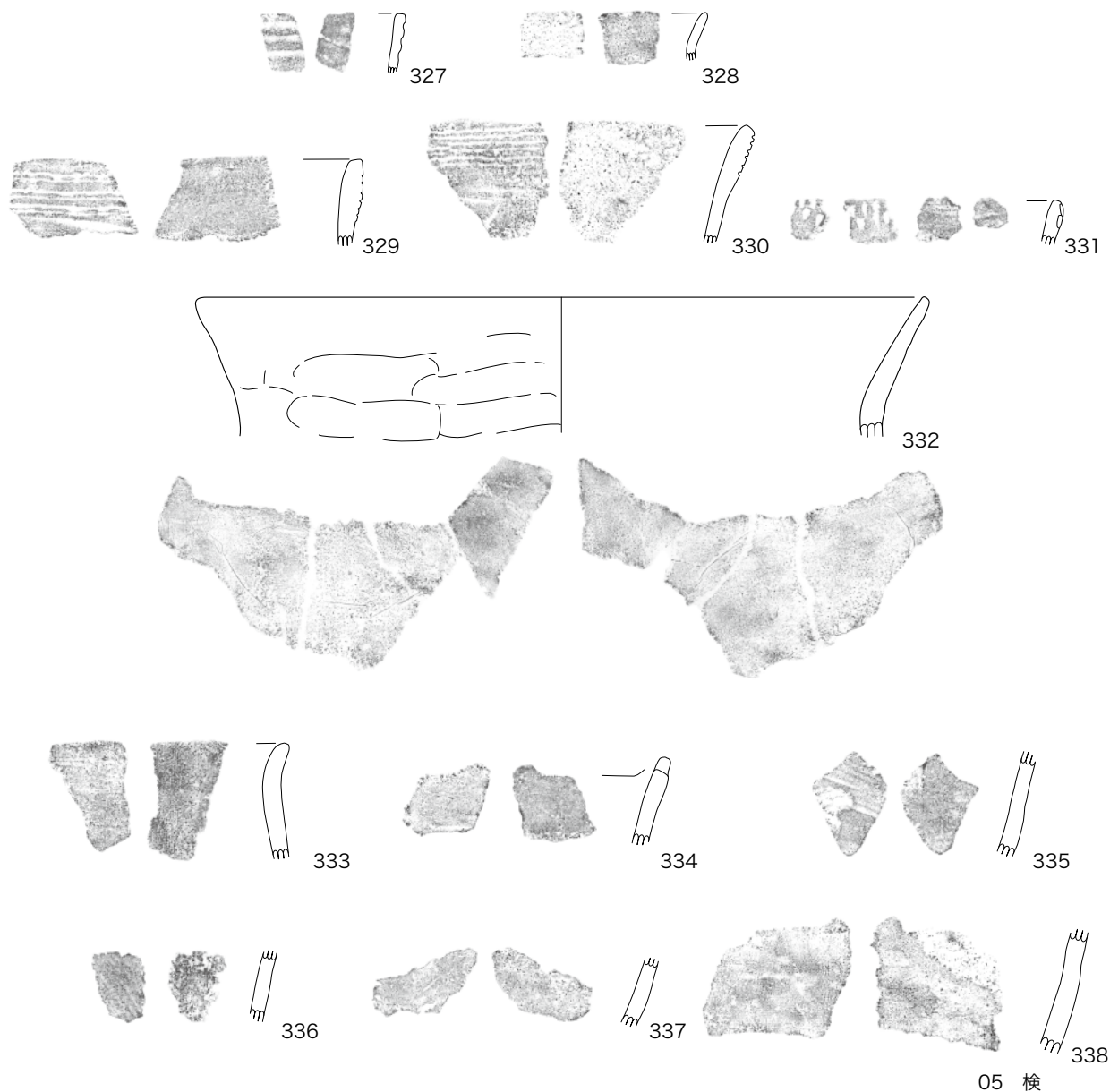


図 33 05 区出土土器 02(1 : 3)

はナデである。313・314は胴部片で、器面調整は313では外内面ともにナデ調整、314は外内面ともに横方向の巻貝条痕である。315は口縁部から胴部上半の破片で、胴部上半部分で最大径を測る、やや内向する器形である。平口縁の一端に山形突起が付けられているものである。器面調整は外面が横方向の巻貝条痕、内面がナデ調整である。

d) 05 SK12 出土土器 (図 32 の 316 ~ 321)

316 ~ 320は同一個体と考えられるものである。口縁部に向ってやや内向する器形と考えられる。施文は、縦方向に3点を一組としたし刺突列が口縁端部外面に展開する。器面調整は、外面では、口縁端部付近が横方向、そしてそれ以下胴部にかけて縦方向の巻貝条痕で、内面も斜方向あるいは横方向の巻貝条痕である。321は深鉢あるいは鉢の胴部下半片である。器面調整は、外面が横方向の二枚貝条痕、内面がナデ調整である。

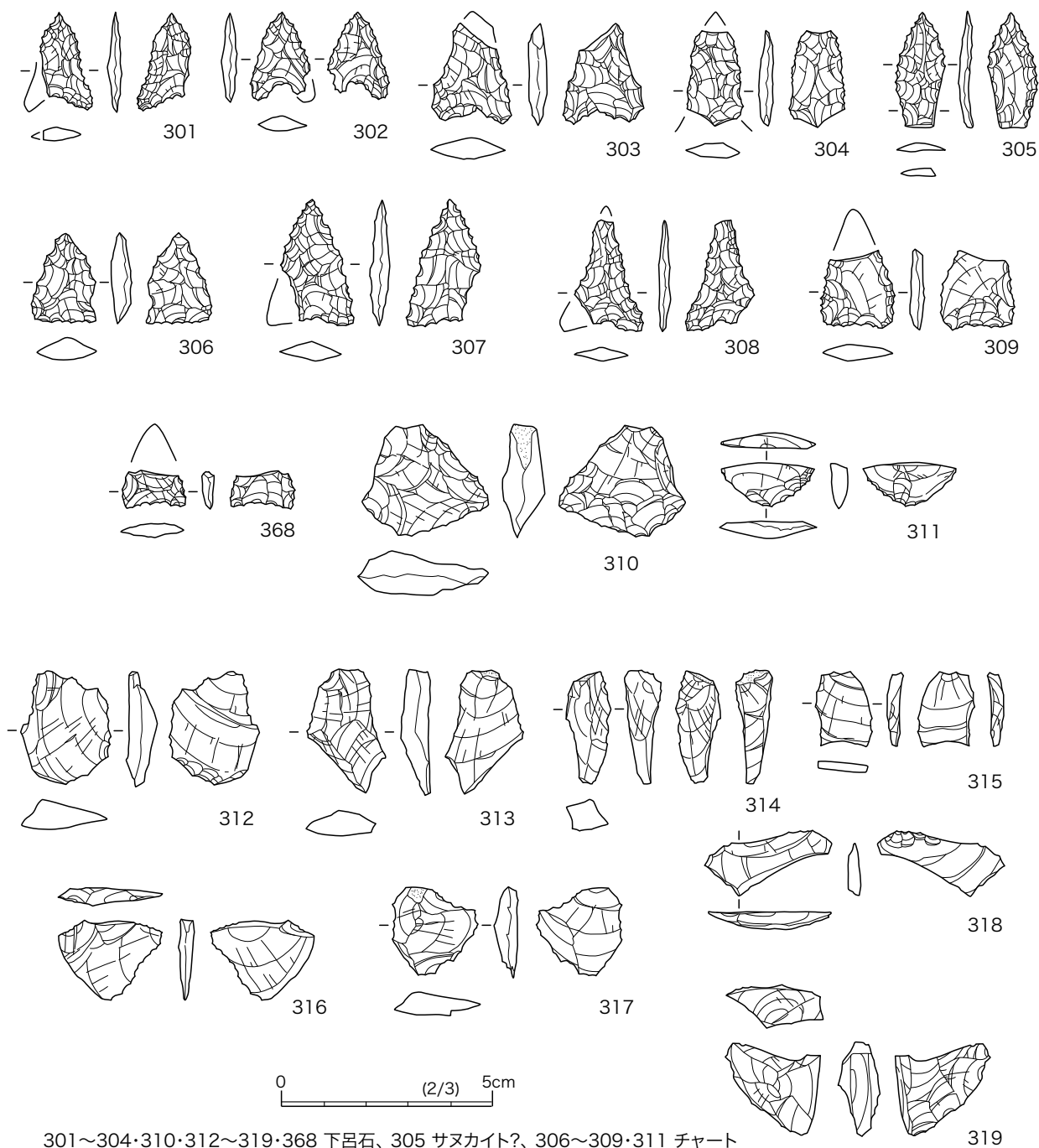
e) 05 区 その他遺構内出土土器 (図 32 の 303・322～326) 上記以外の遺構内出土土器について報告する。303 も深鉢あるいは鉢の口縁部片で、器面調整は外面があたりの弱い巻貝条痕かと考えられるものである。322・323 は底部片である。323 の底面には木葉痕が認められる。器面調整は、322 は外面が横方向の二枚貝条痕、内面が工具によるナデ、323 は外内面ともにナデと考えられる。324・326 は深鉢あるいは鉢の胴部片で、器面調整は外面が斜方向に巻貝条痕、内面はナデ調整と考えられる。325 は端部のみがやや肥厚する口縁部片で、外面に 2 条のいわゆる半截竹管文が、波状を呈して並走している。調整は外面が横方向の巻貝条痕、内面がナデ調整である。

f) 05 区 包含層出土土器 (図 33 の 327～338) 327～334 は深鉢あるいは鉢の口縁部片である。237 は凹線の可能性もあるやや深みのある沈線が並走するものである。端部は面取りが施されており、器面調整は外内面ともにナデ調整である。328 は外反する器形で、外面には LR が施文されている。329・330 はやや肥厚する口縁部片で、外面にはいわゆる半截竹管文が 3 条並走する。器面調整は、330 の外面が横方向の巻貝条痕である以外はナデ調整である。331 は外面に縦に 2 点一単位の刺突列が認められるものである。器面調整は外内面に横方向の巻貝条痕が認められるものである。332 は、頸部から口縁部にかけて外反する器形を有するものである。器面調整は外内面ともにナデ調整である。333 も口縁部にかけて外反する器形で、器面調整は外面が巻貝条痕、内面がナデ調整である。334 は平口縁に突起がつくもので、器面調整は外面が横方向に巻貝条痕、内面がナデ調整である。335～338

は深鉢あるいは鉢の胴部片である。器面調整は、335 の外面が斜位の二枚貝条痕で、336 の外面が斜位の巻貝条痕であるほかはナデ調整である。

3. 出土遺物(石器) 石器器種には、石鏃・石錐・搔器・使用痕剥片・楔形石器・石核・調整のある剥片・剥片・微細剥片・磨製石斧がある。小型剥片石器器種の出土点数が圧倒的に多く、それ以外は磨製石斧の 1 点のみである。

a) 05 SB01 出土石器 (図 34・35 の 301～334・368) この遺構からは、石鏃 10 点、搔器 1 点、使用痕剥片 1 点、石核 4 点、調整のある剥片 2 点、剥片 45 点、微細剥片多数が出土している。301～309・368 は石鏃である。301～303・307・308・368 は凹基無茎鏃、305・306・309 は平基無茎鏃である。304 は胴部片であるが、凹基無茎鏃の可能性がある。301・302・306 は鏃身が 3cm 以下と、やや小型である一方、307・308 のように 3cm 以上の大型のものも含まれている。最大厚部の断面形状は扁平な菱形を呈するものが多く、304 は扁平な六角形、305 は扁平なカマボコ形を呈する。使用石材は、301～304・368 が下呂石、305 がサヌカイト、306～309 がチャートである。310 は搔器と考えられるもので、両面に剥離調整が加えられているもので、端部にやや連続した二次調整剥離がみとめられるものである。下呂石製。311 は使用痕剥片と考えられるもので、半月状の横長剥片の一端に不連続な微細剥離が見られるものである。チャート製。312～319 は下呂石剥片と考えられるものである。312～315 は縦長状の剥片である。316～318 は横長状の剥片である。319 は調整のある剥片と考えられるが、両面ともに縁辺部から中央部に向って連続した剥離

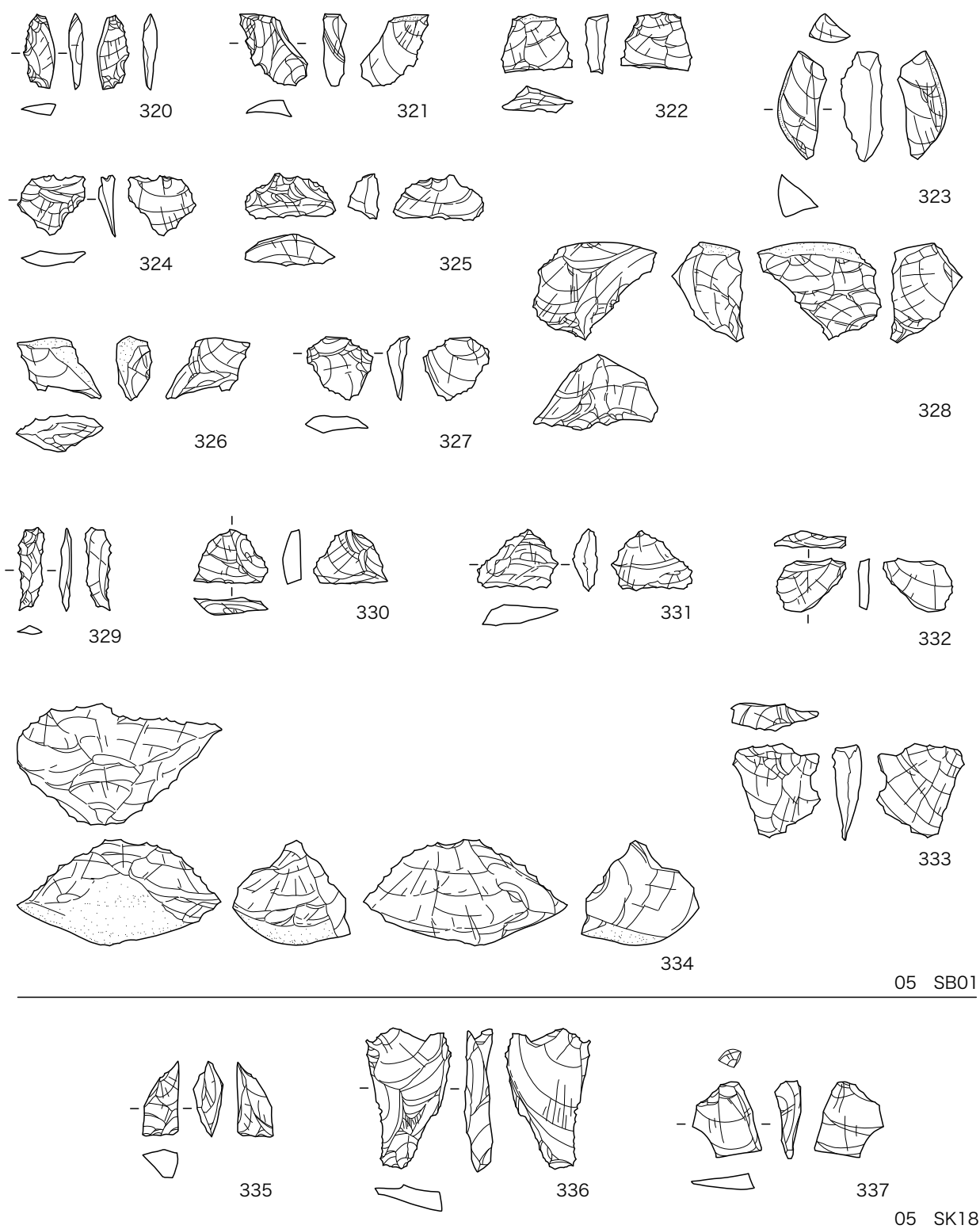


05 SB01

図34 05区出土石器01(2:3)

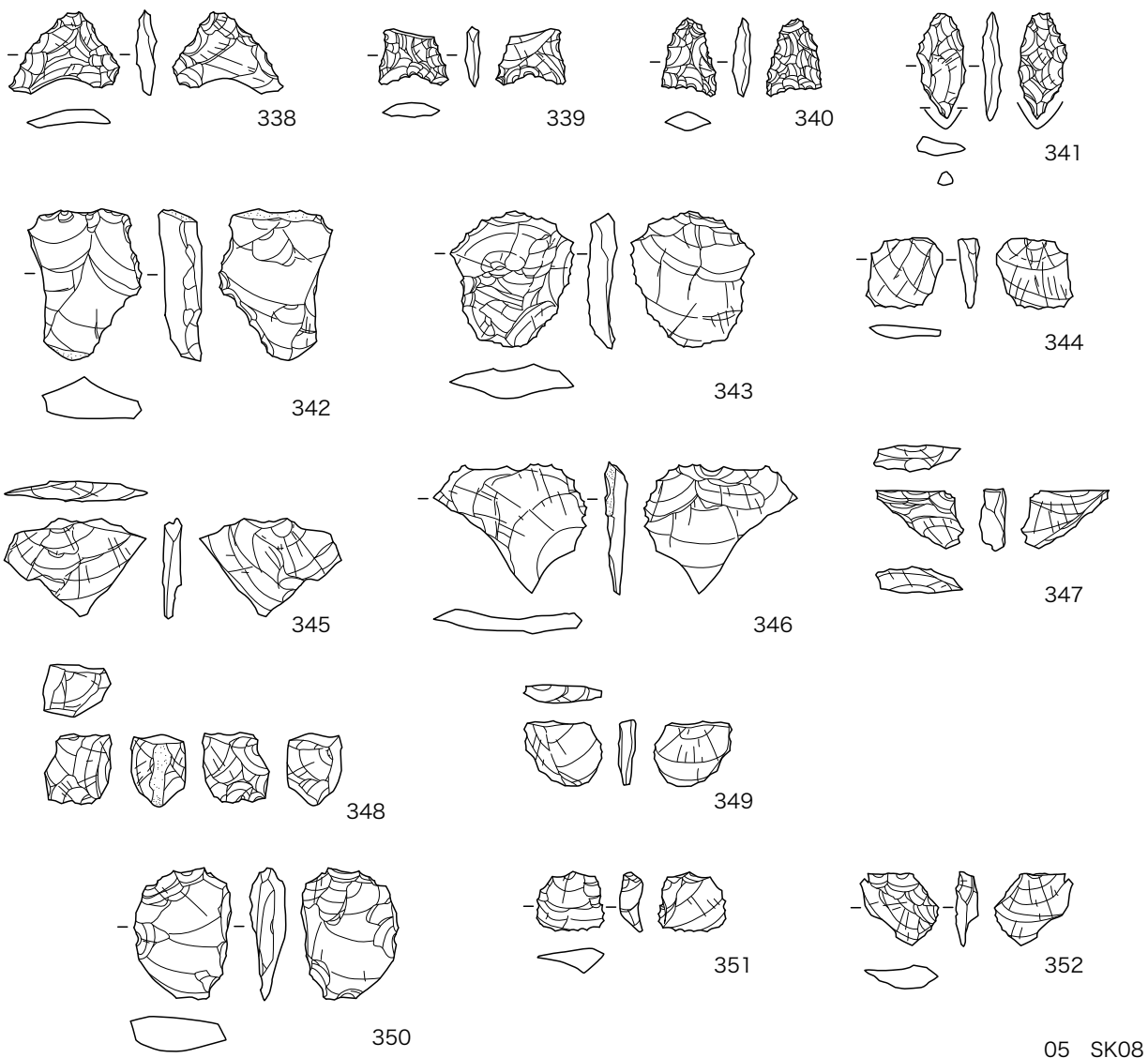
が加えられている。320～328はチャート剥片・石核と考えられるものである。320は両端にやや細かい二次調整が連続して行なわれた剥片である。321～323は縦長状の剥片で、324～327はやや横長状を呈する剥片である。328は石核で、打面転移を行ないながら、連続して剥片の作出が

行なわれたものである。最終的には長さ2cm程度までの剥片作出が行なわれたようである。329～334は石英（水晶）剥片・石核である。329～333は剥片で、333はやや縦長状で、それ以外はやや横長状を呈するものである。334は石核で、礫面が残存している側から中に向って、同一方向

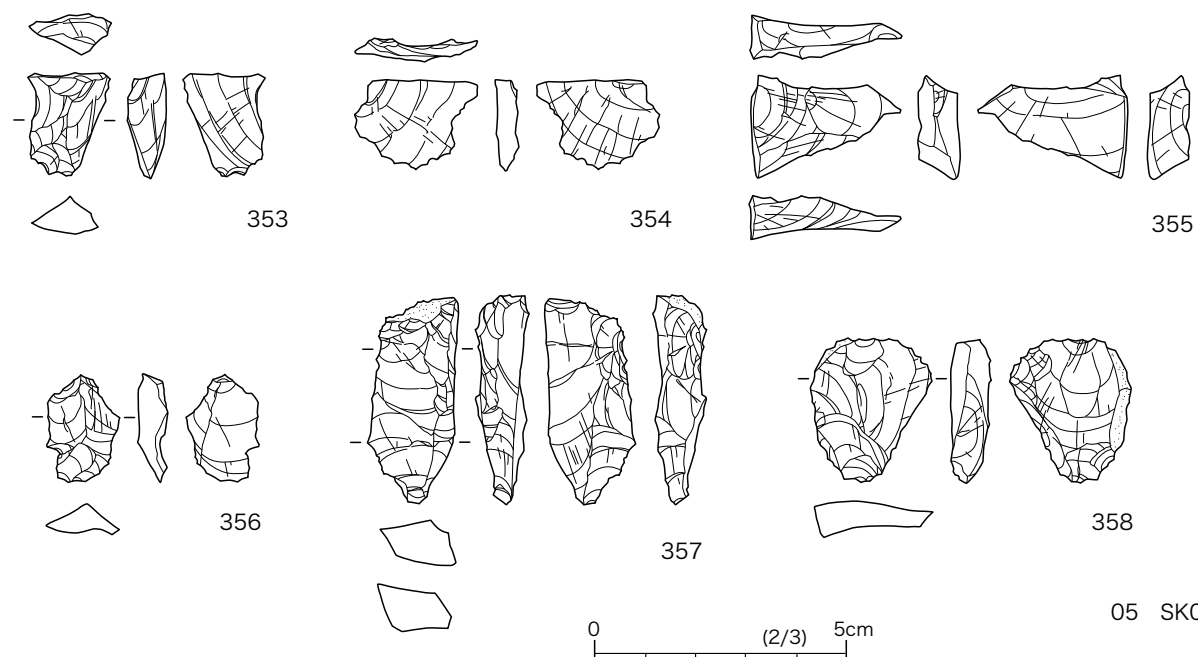


335 サヌカイト?、320～328・336・337 チャート、329～334 石英

図35 05区出土石器02(2:3)



05 SK08



05 SK09

0 (2/3) 5cm

338・339・341・345～349・353～355 下呂石、305 サマイト?、340・342・350～352・356～358 チャート、343・344 石英

図36 05区出土石器03(2:3)

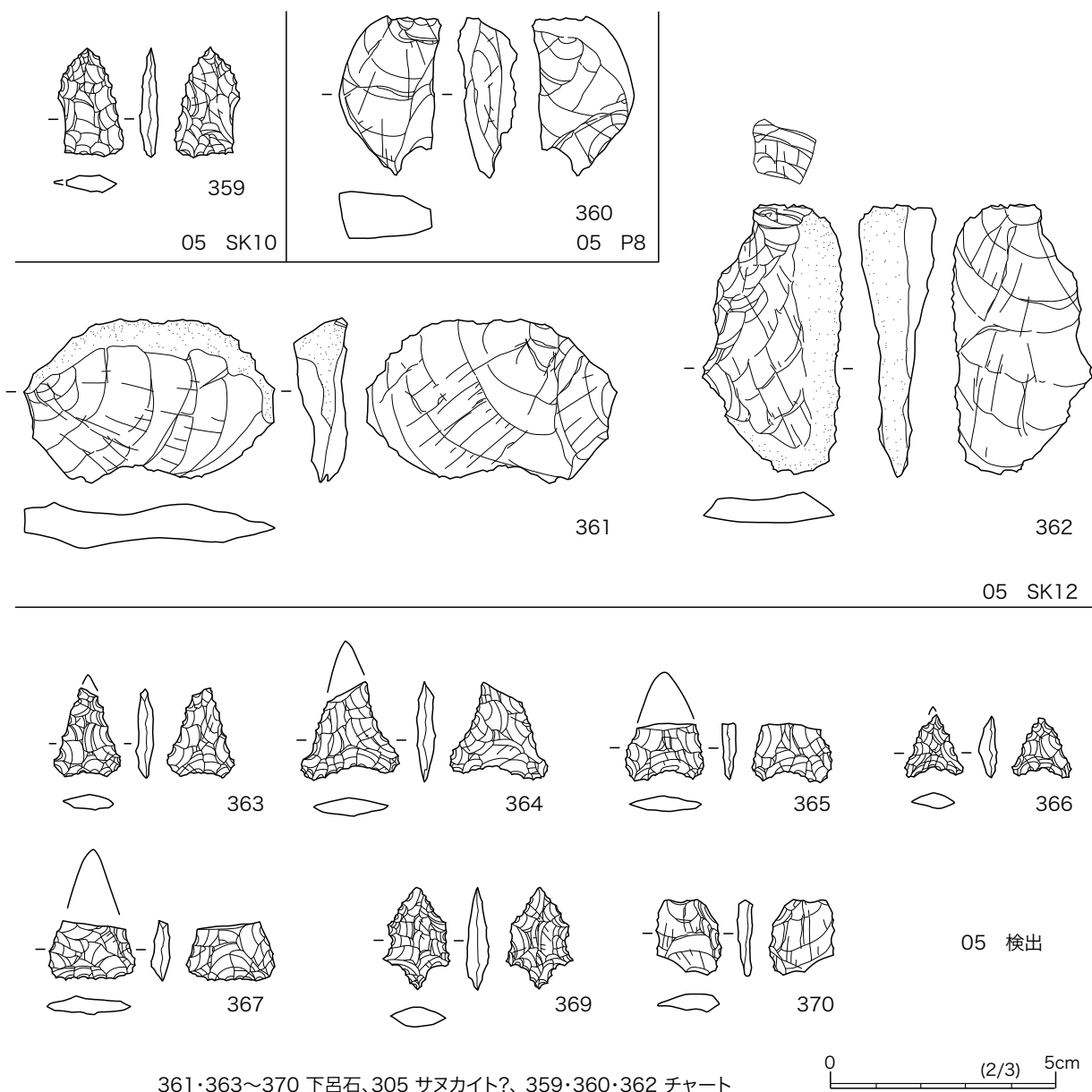


図37 05区出土石器04(2:3)

に調整が認められるものである。

b) 05 SK18 出土石器 (図 35 の 335 ～ 337)

剥片 8 点、その他微細剥片が出土しているうち、剥片 3 点を図化した。335 は両極方向から調整あるいは剥片作出が行なわれているものである。楔形石器の可能性もある。石材はサヌカイト。336 は横長状、337 は縦長状の剥片である。ともに石材はチャートである。

c) 05 SK08 出土石器 (図 36 の 338 ～ 352・図 38 の 371) 出土器種は、石鏃 3 点・石錐 1 点・

使用痕剥片 1 点・剥片 15 点・石核 1 点・微細剥片・および磨製石斧 1 点がある。338～340 は石鏃で、いずれも凹基無茎鏃である。338・339 の使用石材は下呂石、340 はチャートである。341 は石錐である。両面とも同様な二次調整が施されているもので、先端部には使用による磨滅痕がある。下呂石製。342 は使用痕剥片である。縦長状の剥片の端部には不連続な剥離痕が確認できる。使用石材はチャートである。343～352 は剥片・石核である。343・344 は石英（水晶）で、や

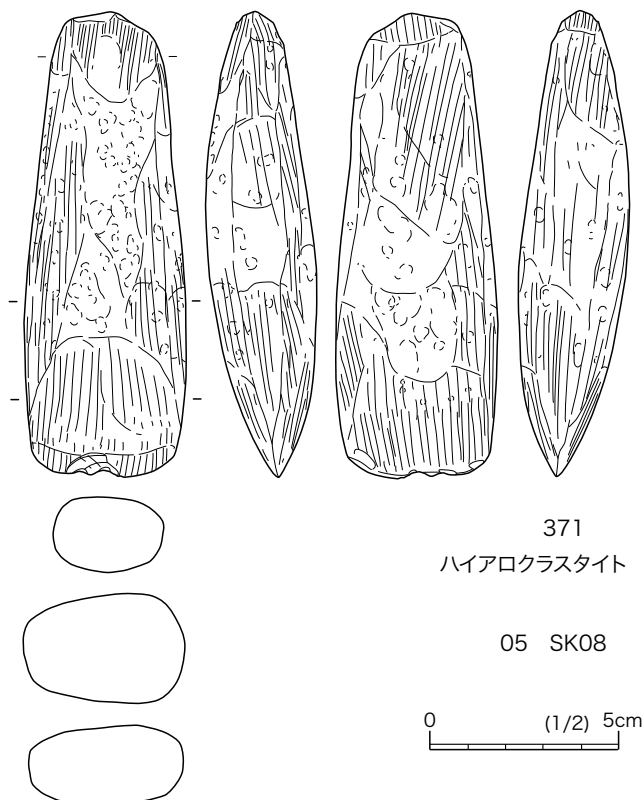


図38 05区出土石器05(1:2)

や縦長状の剥片である。345～349は使用石材が下呂石で、348が石核、それ以外が横長状の剥片である。350～352の使用石材はチャート、350は縦長状の剥片、351・352は横長状の剥片である。371は、本遺跡で唯一出土している磨製石斧である。側辺に面を有しないもので、敲打調整ののち、刃部全体および胴部にも研磨が施されているものである。刃部は直縁気味になっており、使用によると考えられる剥離が認められる。ハイアロクラスタイト製。

d) 05 SK09 出土石器 (図36の563～568)

石錐1点・剥片および調整のある剥片が7点、微細剥片が出土している。353～355の使用石材は下呂石で、いずれもやや横長状の剥片である。356～358の使用石材はチャート、357・358は両面に二次調整が施されているものである。357は尖っている一端が欠失している可能性もあり、石錐かもしれない。

e) その他遺構出土石器 (図37の359～362) 359は平基無茎鏃でチャート製、360も使用石材チャートの縦長状の剥片である。361は下呂石円礫の横長状の剥片で、幅が5cm以上と、この遺跡で出土している下呂石剥片類の中では大型の部類に属するか。362は使用石材チャートの縦長気味の剥片で、長さが5cmを越えるものである。

f) 包含層出土石器 (図37の363～367・369・370) 包含層からは、石鏃・剥片および調整のある剥片・微細剥片が出土している。この中で石鏃および調整のある剥片についてはすべて図化した。363～366は凹基無茎鏃である。363・366は長さが3cm以下である一方、364・365は3cmを越えるものと考えられる。最大厚の断面形状は扁平な菱形かカマボコ形で、いずれも下呂石製。367は平基無茎鏃で、断面形状は扁平な菱形で下呂石製。368は平基有茎鏃で、鏃身が五角形を呈するものである。断面形状が扁平な六角形状で、下呂石製。370は縦長状の剥片で、側辺に連続した二次調整剥離が認められる。使用石材は下呂石である。

第4章 古墳時代以降の遺構・遺物

第1節 弥生時代～古墳時代の遺構・遺物

1. 検出遺構 地形全体として、01A区 NR01

から05区にかけて低くなっており、黒色土の堆積が確認されている。このうち、01B区・05区では、畦畔と考えられる区画が検出されている。

01B区では水田跡12枚と溝1条を検出した。水田の残存状況は悪く、畦畔跡を検出するにとどまった。畦畔は北東から南西にかけて並行する大畦畔3本と、それに直交する小畦畔からなる。調査区が北西に細長く、全形を窺い知る畦畔はないが、およそ3.5m四方を測る。溝の残存状況も悪く、調査区南側で円弧を描くように走り、検出長約12m・幅約25cm・深さ約1cmを測る。溝は切り合いから水田より新しい。遺物は調査区西側で広口壺片が出土した。

05区では、古墳前期の水田跡は、調査区の西端で南北に並ぶ2筆(ST01・02)を検出するにとどまり、これ以上東には水田域が広がらないことを確認した。さらに水田区画の東には南北溝SD01がある。遺物は縄文後期と古墳前期の土器を含むが、水田区画とは方位が異なることや、水田耕作土と同一層である黒色粘土層を切って掘削されていることから、水田区画よりも新しく、さらにこの溝が洪水によって埋没したのちに形成された土層から山茶碗が出土しているため、中世より以前に機能していたと考えられる。

また、00区東端でも、00 SX01・SX02 という浅い落ち込みが検出されている。平面プランは

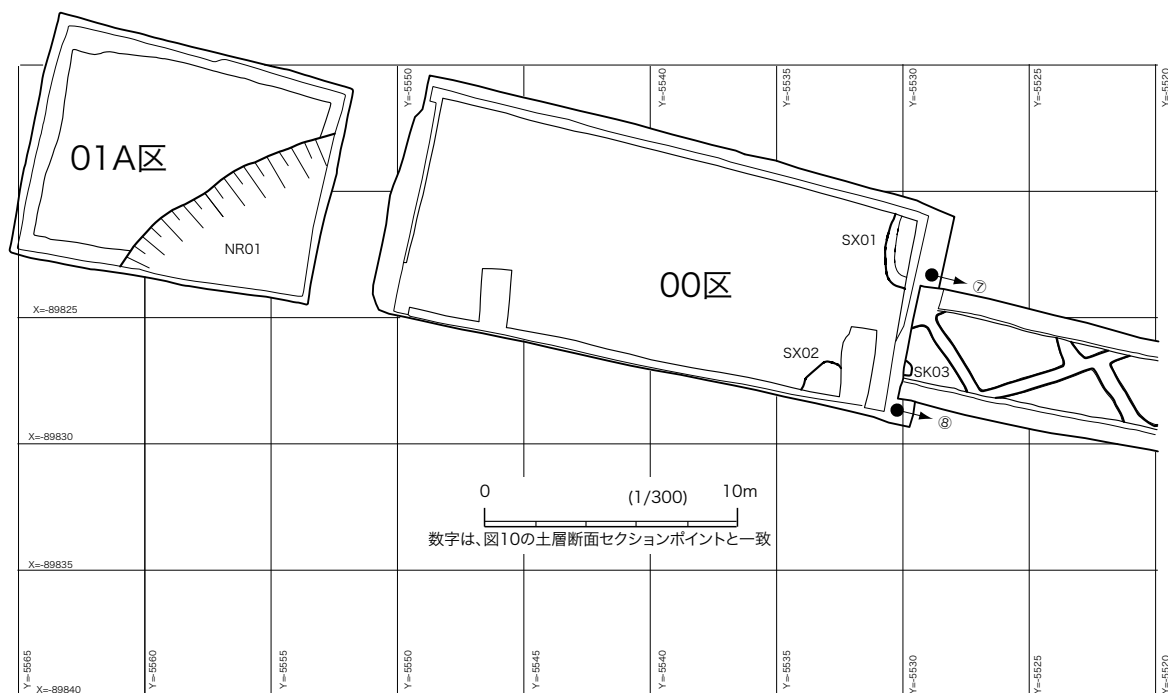


図 39

楕円形を呈するものであるが、01B区および05区で検出された畦畔と同様な性格のものかもしれない。SX01は粗粒砂混じりの黄灰色粘土質シルト、SX02は細粒砂混じりの黄灰色粘土質シルトを埋土とする。

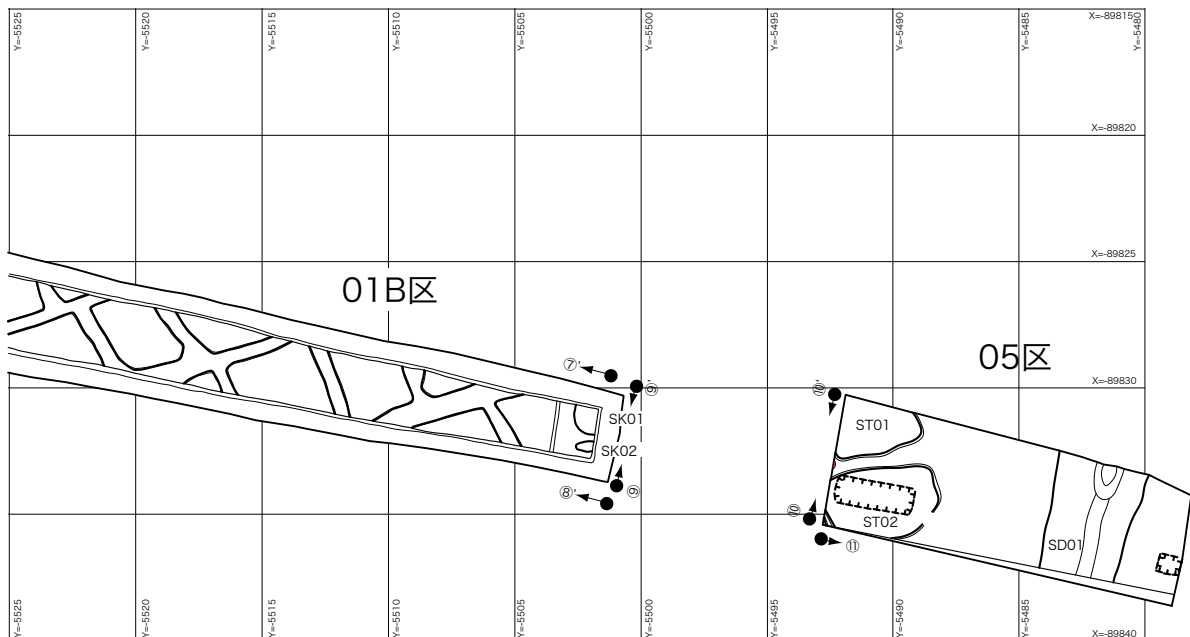
これら畦畔を主体とする遺構群は、堆積状況・出土遺物の状況などから、概ね古墳時代前期の所産のものと考えられる。

2. 出土遺物 いずれも土器片で、断片的なものである。出土は、00 SX01・00 SX02からの出土がある以外は、いずれも包含層を掘削時のものである。

401は広口壺の口縁部片で、402は壺類の胴部片と考えられる。403も壺類と考えられるが、頸部から胴部上半部にかけての部分である。404と405は壺類の口縁部、406は細頸壺の口縁部で、口縁端部外面には二条の凹線が横走するものである。409も壺類の底部と考えられる。202は甕類の口縁部と考えられ、口縁端部外面には貼

付けの隆帯が一条認められる。410は高杯坏部から脚部にかけてである。411は高杯あるいは壺類の口縁部と考えられるが、端部が鋭く尖る状態を呈する。412は壺類の口縁部と考えられるが、端部上面に面取りが施されているものである。

これらの遺物は、概ね古墳時代前期頃に属するものと考えられるが、406のみは弥生中期後葉に属するものと考えられる。



古墳時代以降遺構配置図 (1 : 300)

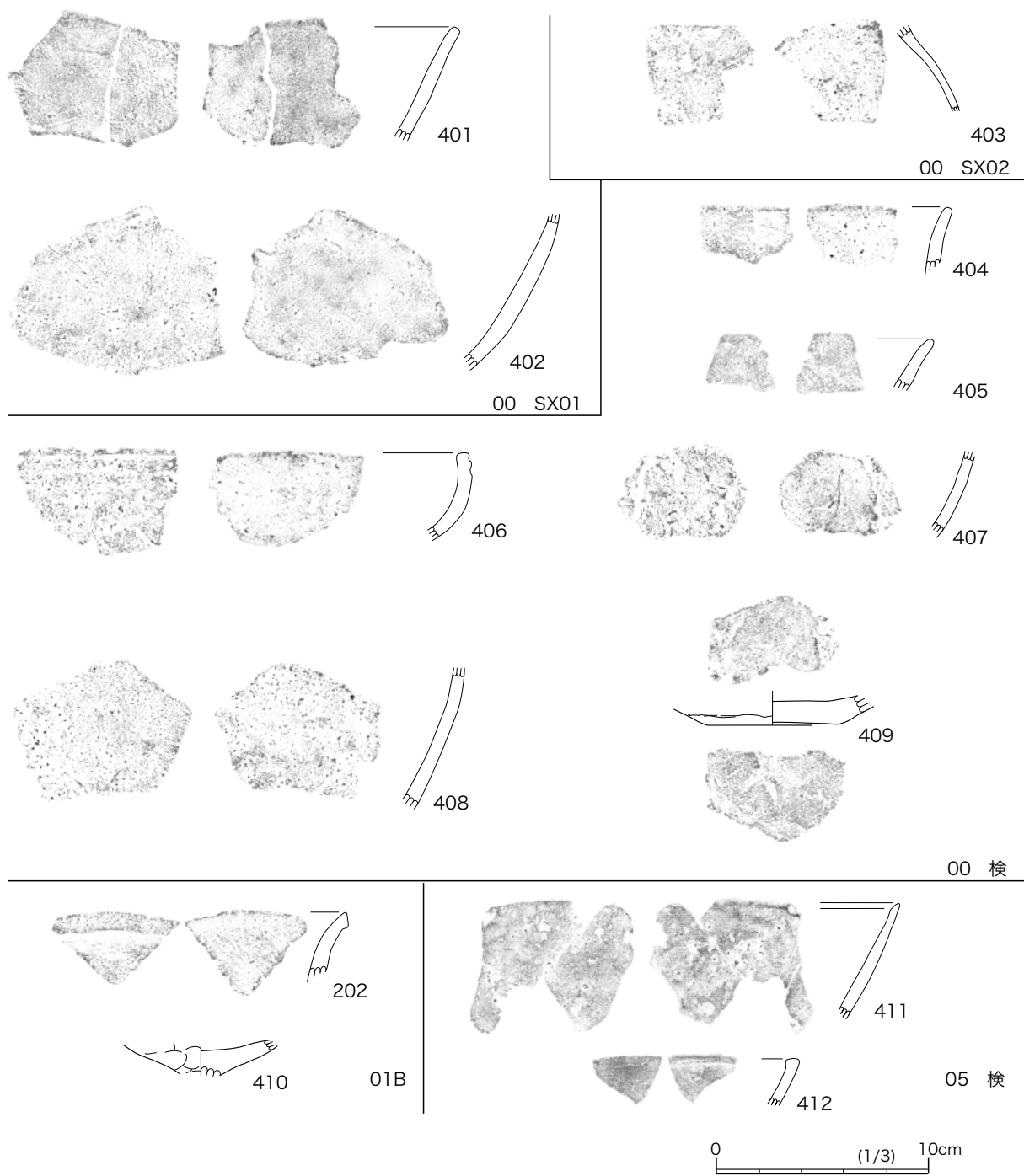


図 40 各調査区弥生時代～古墳時代出土遺物 (1 : 3)

第2節 古墳時代後期以降の遺物

大坪西遺跡では、古墳時代後期以降の遺物も調査区全体から若干出土している。出土は、上層の水田耕作土が多く、状況も散漫とした様相を呈する。

a) 陶器・磁器 (図 41・42)

501 は須恵器坏身である。立ち上がりが斜方向に、くの字状を呈し底部側の形状は丸みを帯びる。内面にはロクロ回転ナデ、底面には回転ヘラケズリが明瞭である。7世紀頃のものと考えられる。502・503 は古代の須恵器と考えられるものである。502 は壺瓶類の頸部付近で、503 は坏身と考えられる。503 の底面には糸切痕が残されている。

504 ～508 は灰釉陶器である。504 は皿で、高台部分が欠失しているものである。506 は碗で、505・507・508 も碗と考えられるものである。506・507 は施釉をハケ塗りで行なわれているものである。高台が残存している 505・507・508 では、断面形状がそれぞれ異なっており、505 は玉状に膨れる形状、507 はハの字状に広がる形状、508 は屈折するいわゆる三日月形高台である。

509 ～546 は南部系山茶碗で、509 ～535 は碗である。512 ～527 は貼付高台が認められる

ものであり、517 ～527 のように底面には靱圧痕が多数認められものと、512 ～516 のように砂粒状の圧痕が若干認められるものの二者が認められる。526 の貼付高台は極めて低位のものであり、形状も安定していない。528 ～535 は貼付高台の認められない底部である。536 ～546 は小皿である。547 ～551 は北部系山茶碗で、547 ～549 は碗、550・551 は小皿である。552 ～554 は施釉陶器(古瀬戸)で、552 が縁釉小皿、553 が碗類、554 が蓋と考えられる。555・556 は青磁碗、557 は陶丸と考えられる。また、558 ～560 は近世期以降の遺物である。

b) 石器 (図 43)

501・502 はともに砥石で、いずれも手持ち砥石と考えられる。501 は側辺が湾曲する形状で、平面・側面ともに表面に使用痕(線條痕)が認められる。使用痕の幅は1～2cmほどで、特に側面の使用痕は長軸方向に対して垂直方向に形成されているのが特徴である。凝灰質泥岩製。502 は扁平な直方体状を呈するものである。平面および側面に使用痕(線條痕)が認められる。こちらは、側面の使用痕は長軸方向に対して平行方向に形成されている。凝灰岩製。

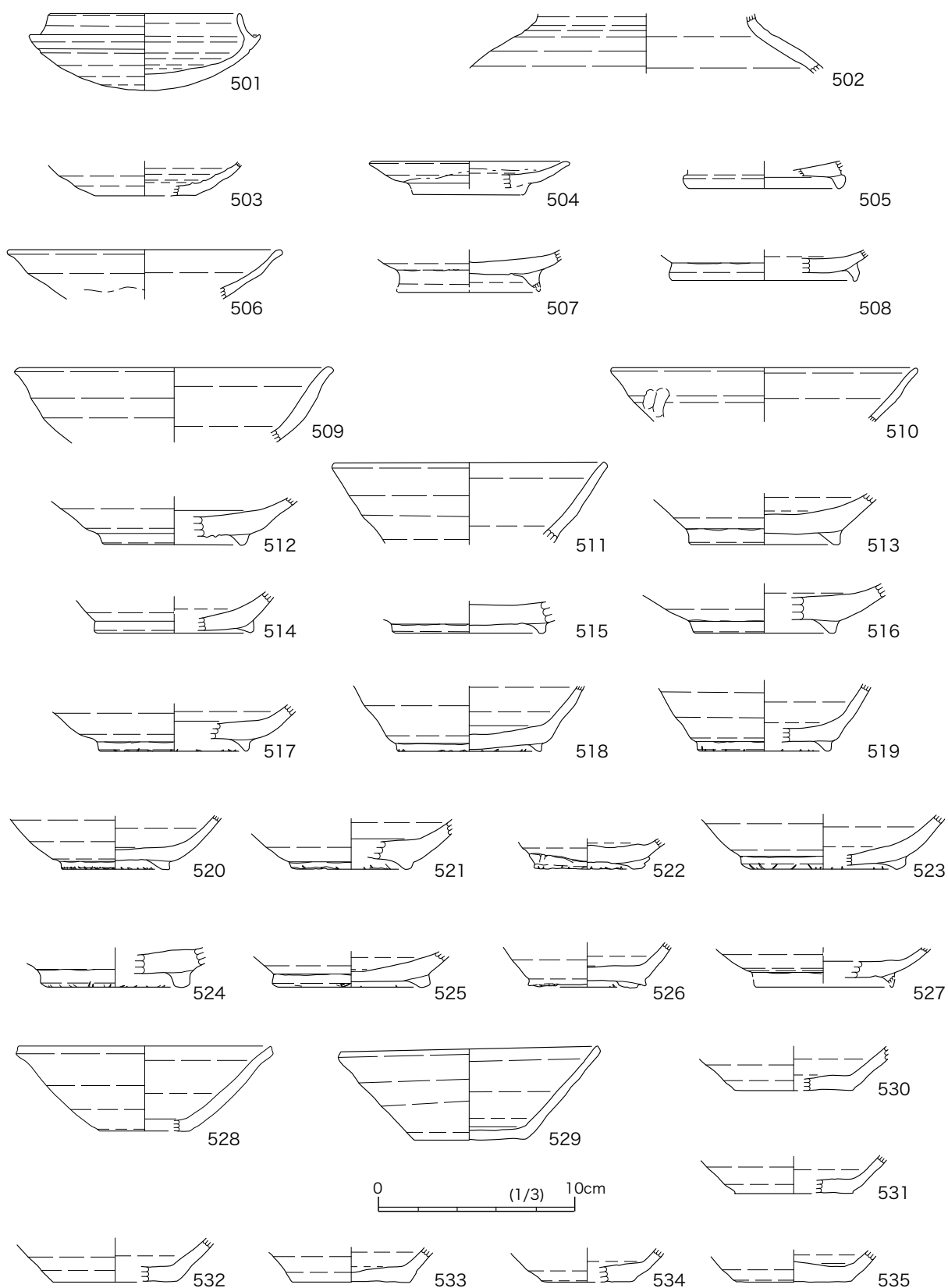


図 41 各調査区古墳時代以降出土遺物 01(1 : 3)

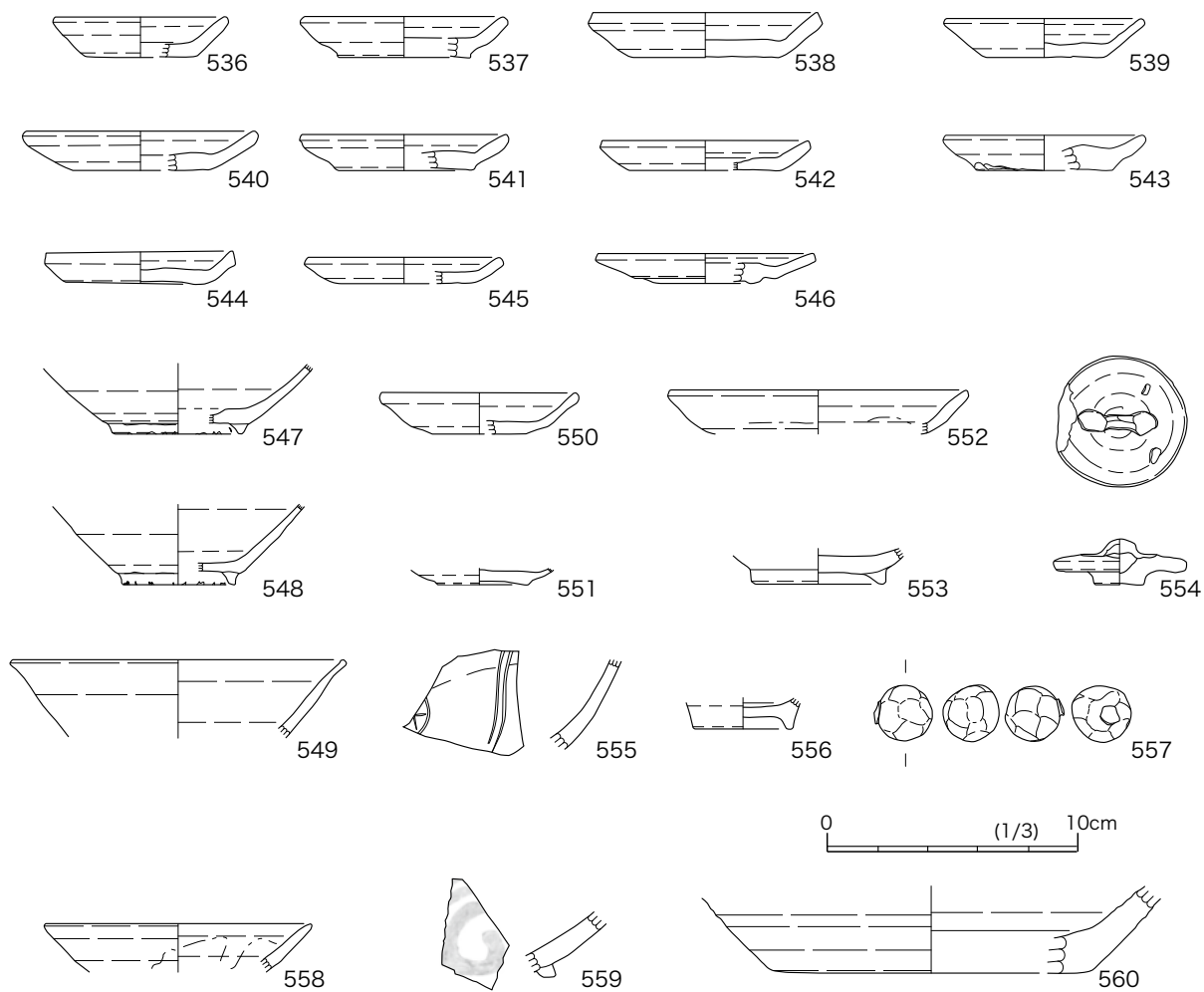
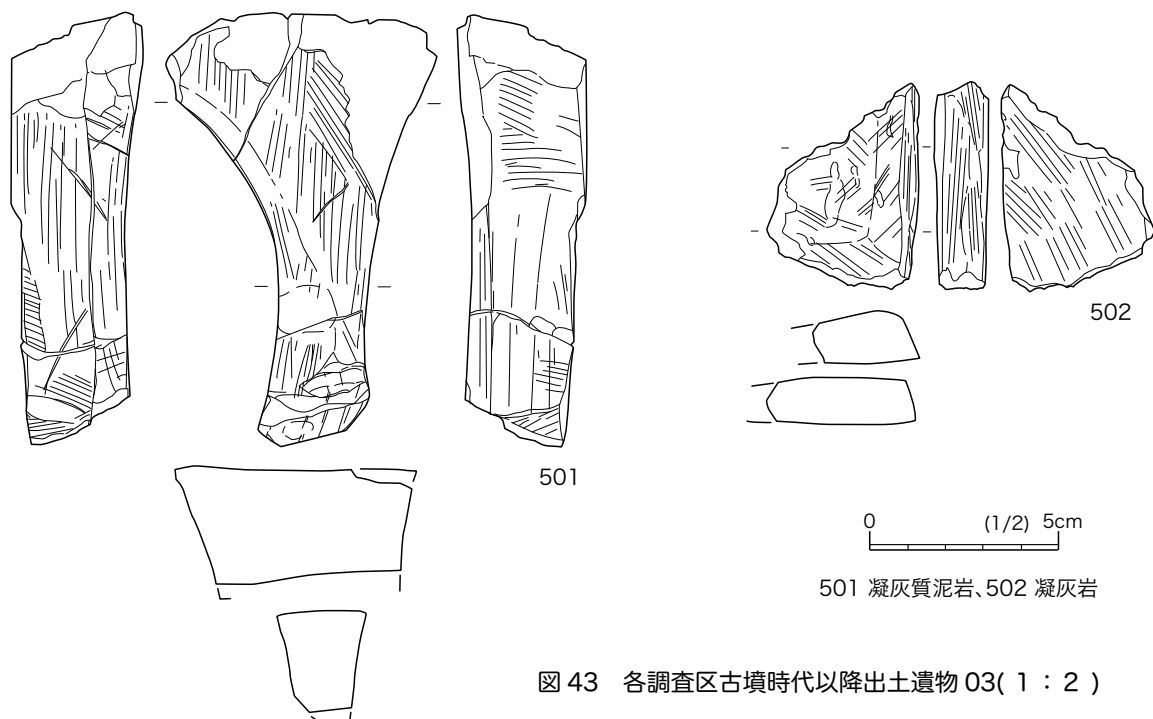


図 42 各調査区古墳時代以降出土遺物 02(1 : 3)



501 凝灰質泥岩、502 凝灰岩

図 43 各調査区古墳時代以降出土遺物 03(1 : 2)

第5章 自然科学的分析

第1節 植物珪酸体分析

馬場 健司（パリノ・サーヴェイ株式会社）

はじめに

大坪西遺跡は瀬戸市大坪町に位置し、矢田川と丘陵の間に広がる標高約 96 m の低地上に立地する。今回の分析調査では、調査区における古墳時代前期以降の土地利用状況に関する情報を得ることを目的として、当該期の堆積物について植物珪酸体分析を実施する。

1 試料

分析調査は、II SOT 0 B 地点の古墳時代前期の畦畔状遺構が検出されている断面から採取された試料 1～5 の 5 点である。試料の層位関係は、上位より、試料 1、試料 3 と 4（同一層準）、試料 2 と 5（同一層準）になり、試料 3・5 採取層の上面において古墳時代前期の畦畔状遺構が検出されている。

2 分析方法

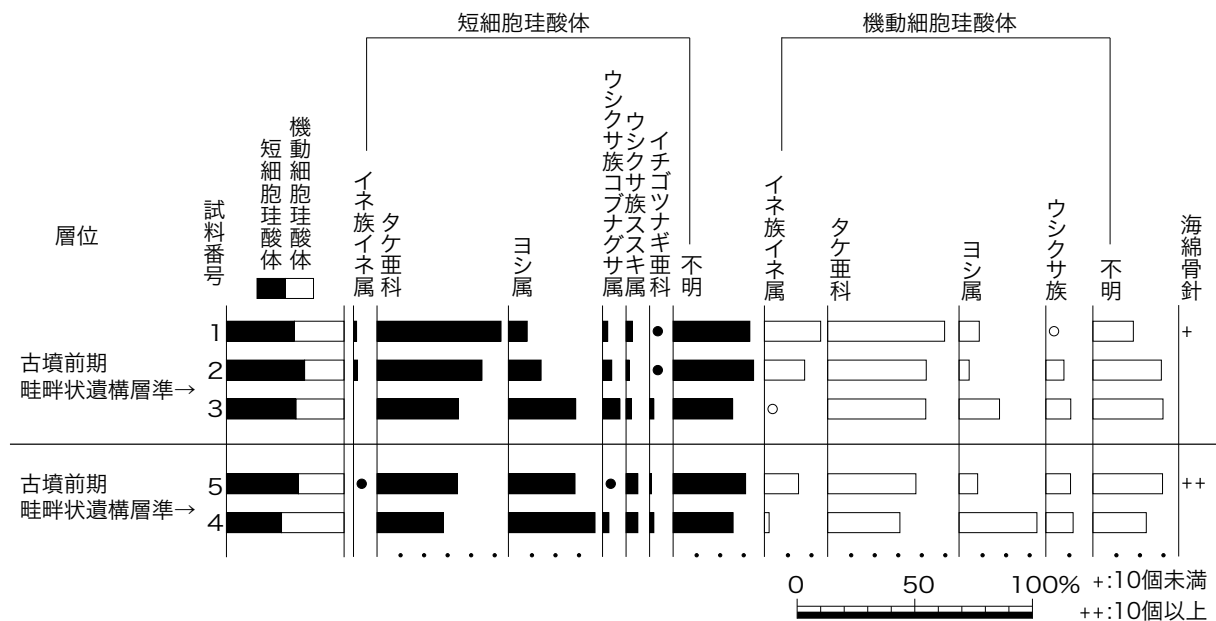
湿重 5 g 前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W，250KHz，1 分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、

短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、産出した種類とその個数の一覧表として示す。また、産出した植物珪酸体の産出傾向から古植生や稲作について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の層位分布図を作成した。各種類の産出率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

表 2 大坪西遺跡 01B 区の植物珪酸体分析結果

種 類	試料番号				
	1	2	3	4	5
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ族イネ属	3	4	－	－	1
タケ亜科	118	103	75	62	82
ヨシ属	18	32	62	81	68
ウシクサ族コブナグサ属	5	9	16	6	1
ウシクサ族ススキ属	6	3	5	11	12
イチゴツナギ亜科	1	1	4	4	2
不明キビ型	18	41	30	23	23
不明ヒゲシバ型	41	24	17	22	33
不明ダンチク型	14	14	8	11	18
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ族イネ属	39	20	1	5	22
タケ亜科	81	49	63	77	57
ヨシ属	14	5	26	83	12
ウシクサ族	1	9	16	29	16
不明	28	34	45	57	45
合 計					
イネ科葉部短細胞珪酸体	224	231	217	220	240
イネ科葉身機動細胞珪酸体	163	117	151	251	152
総 計	387	348	368	471	392
そ の 他					
海綿骨針	3	－	－	－	29



産出率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。
 なお、●○は1%未満の種類を示す。また、海綿骨針の産状を産出個数により+の記号で示す。

図 44 植物珪酸体群集と海綿骨針の産状

3 結果

結果を表 2・図 44 に示す。各試料からは植物珪酸体が比較的多産する。ただし、その保存状態は悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められるものが多い。

各試料から産出する植物珪酸体の種類構成は、いずれの試料も類似する。栽培植物のイネ属、高燥な場所に生育するタケ亜科、水湿地生の大型の抽水植物であるヨシ属、高燥な場所から湿地にかけて分布する種を含むススキ属などからなる。

層位的産状をみると、上面において古墳時代前期の畦畔状遺構が検出されている層準（試料 3・4）では、ヨシ属・タケ亜科が多産する。栽培種のイネ属も産出するが産出率は低率である。古墳時代前期の畦畔状遺構の上位層準になると多産していたヨシ属が減少し、栽培植物のイネ属が増加傾向を示す。タケ亜科は層位的にほとんど変化しない。

4 考察

上述の結果で述べたように今回の調査地点の植物珪酸体群集は、古墳時代前期の畦畔状遺構検出層準を境として、層位的に変化していることが確認された。

古墳時代前期の畦畔状遺構の下位層準では、湿地や沼地などに群落を形成するヨシ属の植物珪酸体が多産した。このことから、当概期の調査地点はヨシ属などが分布する湿地のような堆積環境であったことが推定される。また、高燥地に生育するタケ亜科も比較的多産することから、後背地にタケ亜科が分布する高燥地の領域も存在したことが推定される。ただし、タケ亜科は他の種類に比較して、植物珪酸体生産量が多く、かつ頑丈であるため、実際の植生量より過大評価されていると考えておく必要がある。

また、本層準からは低率ながらも栽培種のイネ属も産出した。このことと、発掘調査の結果、本層上面において畦畔状遺構が検出されていること

を踏まえると、本層準形成期に調査地点ないしその近辺で稲作が行われるようになった可能性がある。

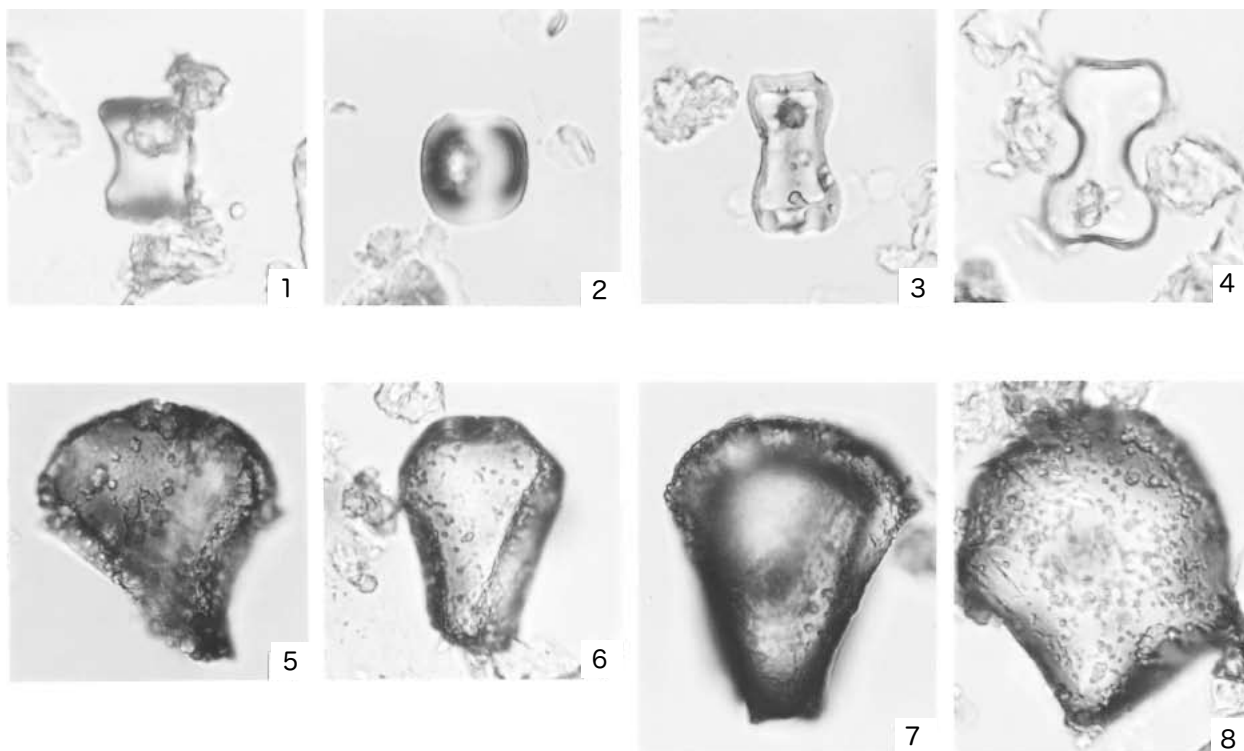
一方、古墳時代前期の畦畔状遺構の検出層準より上位層準では、栽培植物のイネ属が増加傾向を示し、これとは逆にヨシ属が減少傾向を示すようになる。水田土壌表層における機動細胞珪酸体総数に占めるイネ属機動細胞珪酸体の割合は、長野農業試験場の水田土壌表層で9%、イナワラ堆肥連用（8年間,500kg/0a/年）の水田土壌表層で6%であったと報告されている（近藤,1988）。今回の結果では、イネ属機動細胞珪酸体の産出率は、畦畔状遺構検出層準の直上層準で4～7%、さらにその上位層準で2%を示した。いずれの層準も現在の水田耕作土の割合を上回る値を示しており、古墳時代前期の畦畔状遺構の検出層準より上位層準の堆積層が人為的擾乱が及んだ層相を呈しているとすれば、当概期の調査地点において稲作が行われていたことが推定される。また、ヨシ属の減少も耕作地開発に伴う生育域の

減少を反映している可能性が考えられる。

以上、今回の植物珪酸体群集の層位変化から、調査区では古墳時代前期の畦畔状遺構の検出層準を境として、土地利用状況が大きく変化した可能性が指摘される。なお、植物珪酸体の産状は、耕作地の微地形およびそれを構成する堆積物の粒度組成や一筆単位の水田面積の違いと関連することが指摘されている（外山,2002）。また、植物珪酸体は、土壌が風化する早い段階で粘土化する可能性があり（近藤,1988）、乾湿を繰り返すような環境下でも、保存が悪くなることが指摘されている（江口,1994,1996）。したがって、植物珪酸体分析などの微化石分析結果から、過去の耕作の有無や土地利用状況の変遷を検討する場合、調査地点の堆積層の堆積学・土壌学的な層相解析結果に基づく評価が必要である。今回の結果についても、今後、そのような視点からの検討を行い、発掘調査成果との複合的解析を行っていくことが大切であると認識される。

参考文献

- 江口 誠一, 1994, 沿岸域における植物珪酸体の分布 千葉県小櫃川河口域を例にして, 植生誌研究, 2, 9-27.
- 江口 誠一, 1996, 沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物の pH 値, ペトロジスト, 40, 8-84.
- 近藤 鍊三・佐瀬 隆, 1986, 植物珪酸体分析, その特性と応用, 第四紀研究, 25, p. -64.
- 近藤 鍊三, 1988, 十二遺跡土壌の植物珪酸体分析, 鋳師屋遺跡群十二遺跡―長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書―, 御代田町教育委員会, 77-8.
- 外山 秀一, 2002, 池島・福万寺遺跡の立地と環境, 「池島・福万寺遺跡2（福万寺I期地区）一級河川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書-分析・考察編」, (財)大阪府文化財センター, 4-429.



1. タケ亜科単細胞珪酸体 (IISOT01B : 1)
2. ヨシ属単細胞珪酸体 (IISOT01B : 2)
3. コブナグサ属単細胞珪酸体 (IISOT01B : 2)
4. ススキ属単細胞珪酸体 (IISOT01B : 1)
5. イネ族機動細胞珪酸体 (IISOT01B : 5)
6. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (IISOT01B : 3)
7. タケ亜科機動細胞珪酸体 (IISOT01B : 1)
8. ヨシ属機動細胞珪酸体 (IISOT01B : 3)

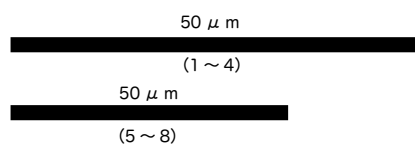


写真 1 大坪西遺跡 01B 区で検出された植物珪酸体

第2節 大坪西遺跡出土の石器石材について

川添和暁・堀木真美子（愛知県埋蔵文化財センター）

1. はじめに

本節は、大坪西遺跡における石器石材について、岩石学的な立場から記述を行なったものである。ここでは岩石名を同定した根拠を示すことを目的としており、このことで各報告で呼称されている岩石名との異同を検討する材料を提示することができるであろう。他報告との対比の参考になれば、幸いである。

なお、以下、岩石名横に記されている括弧内の数字は、遺物の整理番号であって、石器報告時に使用している遺物登録番号とは異なる。遺物整理番号に対して遺物登録番号の方が圧倒的に少ないため、番号の差し替えを行なうことはしなかった。両番号の対照は、添付 CD にある、遺物一覧表にある。なお、後述する内容について、各石器資料個別の記述も添付 CD を参考されたい。（川添和暁）

2. 大坪西遺跡出土石器および礫などの岩石記載

○ハイアロクラスタイト (368)

1点のみ。表面の観察では周囲が白色化した円形および長柱状の鉱物の抜け跡が多く観察できる。石基は灰緑色。角閃石と思われる黒色長柱状の鉱物や白色化した鉱物の抜け穴が線状に並ぶ。白色化した鉱物の大きさは、円形のものが最大1mm、平均0.5mm、長柱状のものの最大が2×0.2mm、平均1×0.2mm、黒色長柱状の鉱物は、まれに見られる程度に含まれる。大きさは2×1mm。

○砂岩 (1)

暗灰色細粒砂岩。接触変成作用を受けていると

思われる。

○泥岩 (2・9)

風化面は灰白色、新鮮な破断面は暗灰色。

○凝灰岩：笏谷石？ (3)

灰緑色の包有物をふくみ、全体に緑色がかった色調を呈する。研磨面において不定形の間隙が見られる。笏谷石と呼ばれる武生市付近に産する緑色凝灰岩か？

○花崗岩 (4・435・436・437・438・439・440・441・443・444・448)

1. 優白質の細粒花崗岩。黒雲母を含む。大きさは最大1.5mm程度。平均1mm程度。まれに2×1mm程度の角閃石を含む。黒雲母を含まない粗粒な部分が脈状に存在する(4・435・436・437・438・439・440・444・448)。

2. 優白質の中粒花崗岩。石英がやや紫を帯び、クロット状をなす事がある。保存状態は不良。黒雲母の他に角閃石をまれに含む(441・443)。

2種類に分類された花崗岩は、いずれも優白質であることから、岩体を特定するにはいたらない。また、2つの岩体に産する物か、同一岩体からもたらされたものかの識別も困難である。

○下呂石：結晶質黒雲母流紋岩 (5～8・10～15・17・18・21～23・25～29・31・33・35・36～38・40～47・49～64・73～78・80・83～88・91・93・95～102・104・107・112・114・116・118・119・122～124・126・130・131～134・138～141・151・154・157・162・166～173・192～196・198・201・203・204・206・

213・214・217・218・225・226・231・233
 ～ 238・242・244・247・248・250・252・
 253・254・256・258・259・263・264・
 267・268・273・278・281・282・284・
 285・286・291・292・301・304・307・
 308・311・314・315・317・320・321・
 322・325・327・328・330・331・333・
 335・338 ～ 340・342・343・345・346・
 348・353・354 ～ 359・369・370・372 ～
 377・381 ～ 385・387・389・392・394・
 398・399・402・403・405 ～ 412・415・419
 ～ 421・428・433・434)

結晶質な石基に黒雲母の班晶がまれにみられる。黒雲母の分布は偏りがみられる。また極まれに角閃石がみられるものもある(104・109)。縞状の部分がみられるもの、黒色のガラス質が強いもの、ほぼ無班晶のもの、黒雲母の方向が揃っているものやバラバラのものなど多種類の組織が存在した。

○凝灰質泥岩 (16・136)

無班晶。石基は灰緑色。

○ホルンフェルス：接触変成岩 (19)

風化面は白色。新鮮面において変成鉱物粒が認められることからフォルンフェルスと同定。構成鉱物の粒の大きさから泥岩起源と砂岩起源のものを区別した。砂岩起源(19・39・111)、泥岩起源(128)。

○チャート

色調で大別すると以下のようなものである。

1. 白色 (305・306・341・349・352・388・397・404・426)。
2. 黄色 (186・416・418・432・442・447)。
3. 赤褐色 (20・110・146・159・184・185・229・232・245・246・260・265・289・

290・296・312・323・380・393・414・423・424)。

4. 黒 色 (32・113・115・189・207・309・310・313・319・40・,446)。

5. 灰白色 (28・125・183・187・197・200・202・249・251・261・266・276・278・283・294・300・326・332・361・364・378・379・390・395・396・400・413)。

6. 灰 黒 色 (180・190・208・209・212・228・255・257・270・271・295・298・302・336・351・371・386・429・430)。

7. 灰 緑 色 (143・144・145・147・148・149・150・158・160・181・182・188・199・239・274・287・288・318・347・361・363・366・425・427・431)。

8. 多色部分からなるもの (156・176・177・178・362・391・445)。

大型の遺物は、白色、多色部分を持つもの、黄灰色があった。

○サヌカイト?：黒色緻密安山岩 (24・34・48・65・66・71・72・79・81・82・89・90・94・106)

黒色で緻密な組織の石基を持つ安山岩。まれに鉱物が観察される場合もある。

1. まれに石英および斜長石の斑晶が確認されたもの (65・67 ～ 70・82・89・90・94・108・117・127・142・163・165・205・243・262・275・277・279・293・297・324)。

2. 石英および斜長石の抜けた痕跡が確認されたもの (66・103・105・120・121・303・329・334・337・344・422)

3. 角閃石が確認できたもの (34・79)

4. 輝石が確認できたもの (164)

5. 黒雲母が確認できたもの (48)

6. 特徴的な楕円形の窪地を呈する風化面が観察できたもの (71・72・81・275)

7. 班晶は確認できないが石基が他のサヌカイトとした物と同様に緻密なもの (299)

古銅輝石を薄片観察をして確認している訳でも、化学組成の検討を実施した訳でもなく、単なる肉眼観察による同定のため、厳密な「サヌカイト」であるとは限らない。

○片麻岩 (196)

黒雲母や長石などが片状をなす岩石。面構造は持たない。領家の変成岩類。愛知県内ならば、幡豆北部に変成岩類が分布している。

○石英（黒水晶）：石英 (135・152・153・174・175・179・210・211・215・216・219・220・221 ～ 224・227・230・240・241・272・316・360・365・367)

無色～褐色の石英。円磨された面を持つ礫 (227) も存在した。遺跡近傍の地域では、瀬戸市八王子付近に黒水晶を持つ蛭川花崗閃緑岩の小岩体が存在している。また遺跡の東方向にそびえる猿投山を形成する猿投花崗岩も晶洞を形成しやすい岩体である。いずれも遠隔地からの搬入を想定する必要はないと考えられる。

○長石 (179)

白濁の結晶片。長石は、花崗岩の岩体にもとなつて産したり、水晶などの晶洞の壁面を形成する場合もある。

○赤鉄鉱 (137・155・350・417)

赤褐色の塊状物質。長石や石英の粒を挟む。

○褐鉄鉱 (160)

黄褐色の塊状物質。長石や石英の粒を挟む。

○珪質岩 (191・269)

石英粒が集合しているもの。アプライトの破片

か石英晶洞の壁面か？ (191)、長石か？ (269)。

○凝灰質砂岩 (350)

黄灰色。細粒の砂を 70% 程度含む。やや弱い片状をなす。（堀木真美子）

3. 大坪西遺跡出土石器石材についての補足

上述した石材は、調査において出土した石器および礫についてのものである。縄文時代の石器については、石鏃・石錐・搔器・使用痕剥片・剥片・石核・微細剥片と、小型剥片石器に関わる石材と、磨製石斧に関わる石材が出土している。一方、古墳時代以降では、石材に関わる遺物として砥石がある。ここでは下呂石とチャートに関して補足を加えていく。

下呂石 礫は、表皮の磨滅の状態により、河川転石の状態を示す円礫と、転石の状態を示さない角礫に大きく二分され、磨滅程度により、角礫・亜角礫・亜円礫・円礫などにも細分が可能である。下呂石に関しては、各地点における礫の状態と、当時の原石採集・流通経路に関して、齊藤基生・田部剛士の研究がある（齊藤 1993 ほか・田部 2001）。円礫は、飛騨川および木曽川岸で転石として採取でき、中濃地域から尾北地域にかけてが採取地点と考えられ、そこからの陸路の移動が想定される。一方、角礫は下呂石原産地である湯ヶ峰付近からの陸路による移動が想定されるものであり、ルートとしては裏木曽地域から東濃地域への移動が想定されるものである。

大坪西遺跡では、石器に礫風化面が残存しているものが、00 区 1 点・01A 区 4 点・05 区 22 点と資料点数が多くないものの、いずれも円礫で、角礫は認められなかった。円礫の風化の度合いにより、表皮に爪状の模様が残るものが 00 区 1 点・05 区 2 点存在し、それ以外は完全に磨滅してい

るものである。これは、同じ円礫の中でも、下呂石の流通経路が複数存在していることを示すものとして注目できよう。

チャート 現在のところ、鉱脈が広域に広がっているなどの理由から、チャートに関しては、石材の点的な原産地の同定が難しいとされる。従って、石材流通についても詳細は不明なママである。しかし、遺跡出土の石器を観察すると、時代（時期）・地域によって、岩石学的にはチャートと一括される石材の中でも、石器の使用に好まれる種類があるようである。

ここでは、大坪西遺跡で出土した石器について、チャートの石材分類を行ない、48 種類に分類した。器種との対応関係で言及すると、(1) ツール・剥片・石核のいずれも器種も確認できるもの、(2) ツールのみで確認できるもの、(3) 剥片・石核のみで確認できるものに、大きく 3 群に分けられる。(2) の一部には、ツールのみが搬入された可能性も考えられよう。但し、これら石器では製作において、特異な様相を呈するものは存在しないようである。（川添和暁）

表 3 大坪西遺跡出土石器チャート石材分類表

チャート細別	色調	光沢	節理	不純物
チャート01	10R4/4 赤褐色	鈍い	少ない	少ない
チャート02	10R3/2 暗赤褐色	やや鈍い	少ない	砂粒状のものを所々含む
チャート03	10R4/2 灰赤色	やや鈍い	少ない	少ない
チャート04	10R4/1 暗赤灰色 (7.5Y7/1 灰白色を筋状に含む)	やや鈍い	やや多い	少ない
チャート05	10R2/2 極暗赤褐色 (10Y7/1 灰白色を筋状に含む)	やや鈍い	やや多い	少ない
チャート06	10R3/2 暗赤褐色 (10Y7/1 灰白色を筋状に含む)	やや鈍い	やや多い	少ない
チャート07	10R3/3 暗赤褐色	明瞭	少ない	少ない
チャート08	10R5/6 赤色	やや鈍い	やや多い	砂粒状のものを所々含む
チャート09	10R4/2 灰赤色	鈍い	少ない	少ない
チャート10	10R3/2 暗赤褐色 (10Y7/1 灰白色を筋状に含む)	やや鈍い	やや多い	少ない
チャート11	N4/1 灰色 (5B7/1 明灰青色を筋状に含む)	やや鈍い	少ない	少ない
チャート12	N3/1 暗灰色	明瞭	少ない	少ない
チャート13	N4/1 灰色 (N6/1 灰色を筋状に含む)	やや鈍い	少ない	少ない
チャート14	N3/1 暗灰色	鈍い	少ない	少ない
チャート15	N5/1 灰色	やや鈍い	少ない	少ない
チャート16	N6/1 灰色	明瞭	少ない	少ない
チャート17	N4/1 灰色	鈍い	少ない	少ない
チャート18	N6/1 灰色	鈍い	少ない	少ない
チャート19	N5/1 灰色	やや鈍い	少ない	少ない
チャート20	N4/1 灰色	やや鈍い	少ない	少ない
チャート21	10Y5/1 灰色	鈍い	少ない	少ない
チャート22	7.5Y5/1 灰色	鈍い	少ない	少ない
チャート23	7.5GY5/1 緑灰色	明瞭	少ない	少ない
チャート24	N7/1 灰白色	やや鈍い	少ない	少ない
チャート25	5GY5/1 オリーブ灰色	やや鈍い	少ない	少ない
チャート26	N7/1 灰白色 (N4/1 灰色を筋状に含む)	鈍い	少ない	少ない
チャート27	5GY6/1 オリーブ灰色	やや鈍い	少ない	少ない
チャート28	5GY7/1 明オリーブ灰色	鈍い	少ない	少ない
チャート29	2.5GY5/1 オリーブ灰色	鈍い	少ない	少ない
チャート30	10Y5/2 オリーブ灰色	鈍い	少ない	少ない
チャート31	N7/1 灰白色 (5YR4/4 にぶい赤褐色を筋状に含む)	鈍い	やや多い	少ない
チャート32	7.5Y6/2 灰オリーブ色	鈍い	少ない	少ない
チャート33	7.5GY6/1 緑灰色	鈍い	少ない	少ない
チャート34	N7/1 灰白色	鈍い	やや多い	少ない
チャート35	7.5Y6/1 灰色	鈍い	少ない	少ない
チャート36	N7/1 灰白色	鈍い	やや多い	少ない
チャート37	7.5Y7/1 灰白色	鈍い	少ない	少ない
チャート38	7.5Y5/1 灰色 (7.5Y3/1 オリーブ黒色を筋状に含む)	鈍い	少ない	少ない
チャート39	10Y7/1 灰白色	鈍い	少ない	少ない
チャート40	N8/1 灰白色	鈍い	少ない	少ない
チャート41	N6/1 灰色 (5Y7/4 浅黄色を筋状に含む)	鈍い	やや多い	少ない
チャート42	5Y6/2 灰オリーブ色 (5Y8/3 浅黄色を筋状に含む)	鈍い	少ない	少ない
チャート43	5Y7/1 明白色 (5YR4/4 にぶい赤褐色を筋状に含む)	鈍い	少ない	少ない
チャート44	10Y7/1 灰白色 (N3/1 暗灰色を筋状に含む)	鈍い	やや多い	砂粒状のものを所々含む
チャート45	10YR5/6 黄褐色	鈍い	やや多い	少ない
チャート46	N3/1 暗灰色 (N8/1 灰白色・2.5YR5/6 明赤褐色を含む)	鈍い	多い	少ない
チャート47	2.5Y5/4 黄褐色	鈍い	多い	少ない
チャート48	10YR8/2 灰白色	鈍い	多い	少ない

第3節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

小林紘一・丹生越子・伊藤茂・廣田正史・瀬谷薫

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani

1. はじめに

愛知県瀬戸市・大坪西遺跡、愛知県岩倉市・御山寺遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表4のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3. 結果

表5に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行

って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、

表4 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-7733	遺跡名：大坪西遺跡 位置：01A区 遺物No.：整理番号476	試料の種類：土器付着炭化物 付着部位：内面（おこげ） 状態：dry	超音波洗浄 サルフィックス 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.1N,塩酸:1.2N)
PLD-7734	遺跡名：大坪西遺跡 位置：01A区 遺物No.：整理番号552 登録番号110	試料の種類：土器付着炭化物 付着部位：内面（おこげ） 状態：dry	超音波洗浄 サルフィックス 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.1N,塩酸:1.2N)
PLD-7735	遺跡名：御山寺遺跡 位置：TP-1 層位：黒色土層 図46	試料の種類：土器付着炭化物 付着部位：口縁部内面（おこげ） 状態：dry	超音波洗浄 サルフィックス 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.1N,塩酸:1.2N)
PLD-7736	遺跡名：大坪西遺跡 位置：01A区 遺物No.：整理番号669 登録番号031	試料の種類：土器付着炭化物 付着部位：内面（おこげ） 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.1N,塩酸:1.2N)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal3.10 (較正曲線データ: INTCAL04) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率

を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

参考文献

- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎 . 日本先史時代の ^{14}C 年代 . 3-20.
- Ramsey, C.B. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
- Ramsey, C.B. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hoog, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Ramsey, C.B., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

表 5 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-7733 遺物No.: 整理番号476	-26.88 $\pm$ 0.16	3292 $\pm$ 20	3290 $\pm$ 20	<u>1610BC(68.2%)1525BC</u>	<u>1630BC(95.4%)1510BC</u>
PLD-7734 遺物No.: 整理番号552 登録番号110	-27.13 $\pm$ 0.14	3343 $\pm$ 20	3345 $\pm$ 20	<u>1685BC(68.2%)1610BC</u>	<u>1690BC(79.1%)1600BC</u> 1590BC(16.3%)1530BC
PLD-7735	-26.91 $\pm$ 0.13	2878 $\pm$ 19	2880 $\pm$ 20	1120BC(7.7%)1100BC <u>1090BC(60.5%)1010BC</u>	<u>1130BC(95.4%)990BC</u>
PLD-7736 遺物No.: 整理番号669 登録番号031	-24.74 $\pm$ 0.11	3387 $\pm$ 20	3385 $\pm$ 20	1735BC(23.0%)1710BC <u>1695BC(34.8%)1660BC</u> 1655BC(10.5%)1635BC	<u>1740BC(95.4%)1620BC</u>

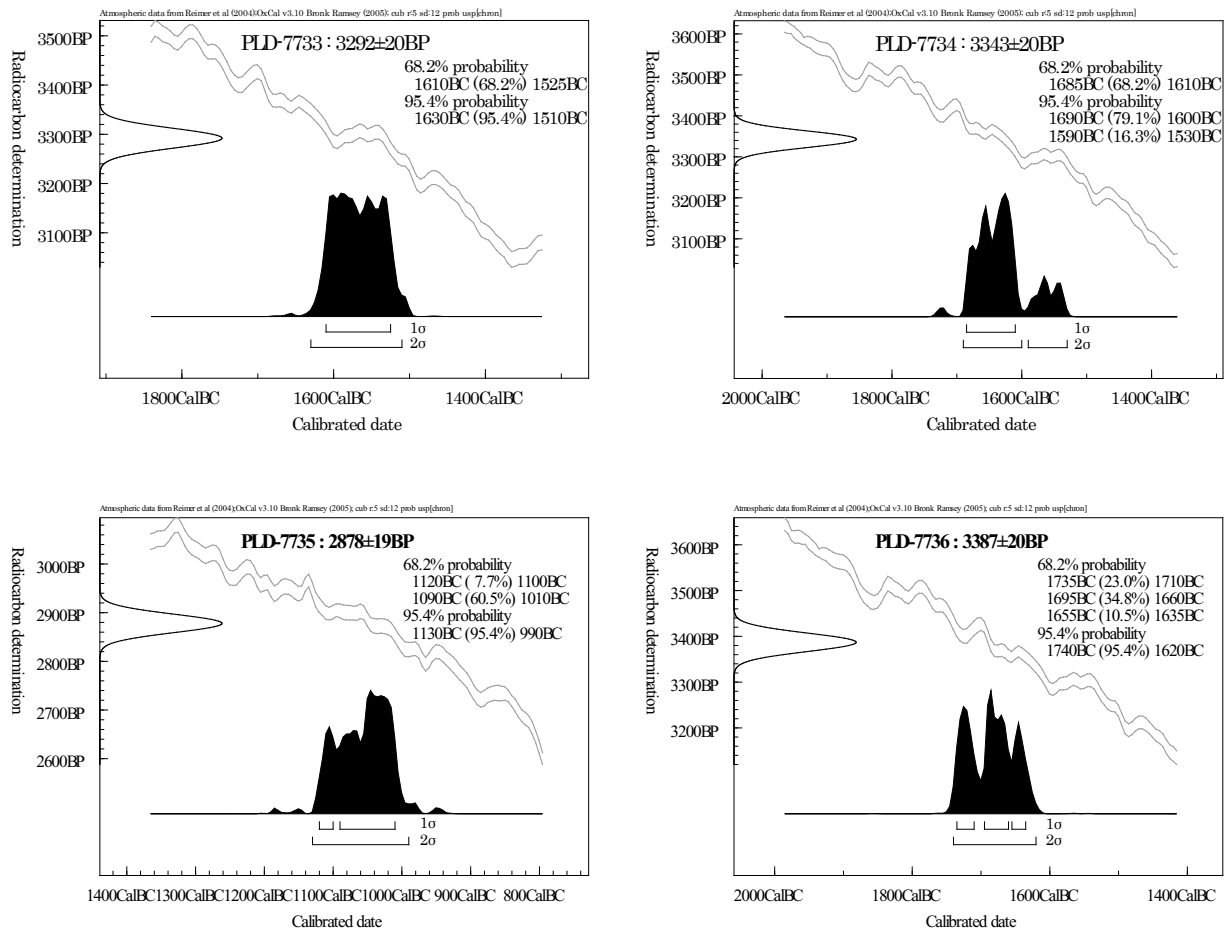


図 45 暦年校正結果

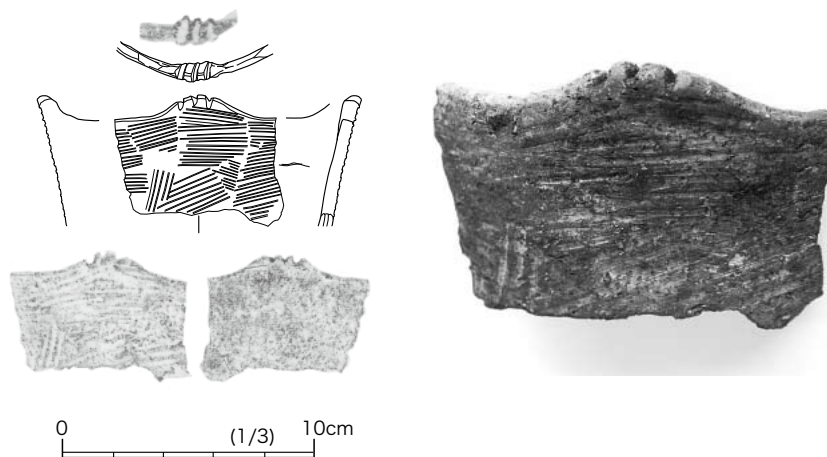


図 46 御山寺遺跡出土縄文土器（1：3）

御山寺遺跡は、岩倉市鈴井町ほかに所在する遺跡で、平成 19 年度の調査において黒色土の堆積が確認され、上面から縄文時代晩期前半期を中心とする土器がややまとまって出土した。

第6章 総括

第1節 遺跡の変遷

大坪西遺跡では、縄文時代・古墳時代の遺構調査、および縄文時代から近世までの遺物が出土した。各調査区における遺構・遺物の検出状況と、遺跡の形成状況を示したものが、図47である。

本遺跡は山口川（矢田川）南岸の丘陵袖部に立地しているが、東西に細長く、各調査区において基盤層および遺物包含層の様相が異なっている。

縄文時代の遺物・遺構の検出がまとまって認められたのは、調査区の東端の05区および西端の01A区である。05区では丘陵の基盤層である黄褐色砂礫層が、01A区では人為的作用を受けていない緑灰色砂層の堆積が認められた。01A区では縄文時代後期中葉の遺物包含層が検出された。遺物包含層は黄灰色砂層を主体とし、調査区

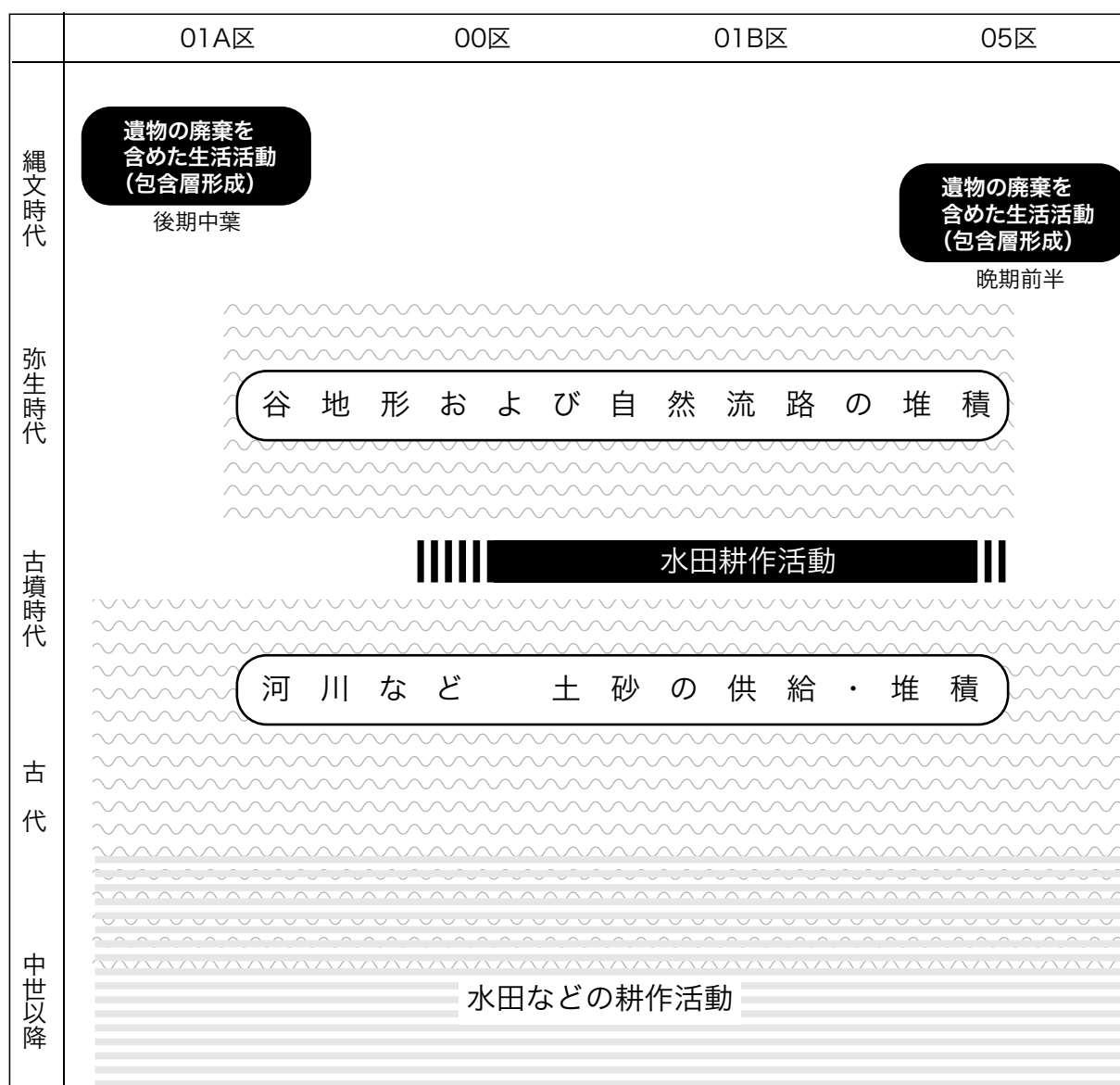


図47 大坪西遺跡遺跡変遷図

南東側にある自然流路 01A NR01 の西岸からより西側に広く展開しているようである。遺構の検出は認められず、岸辺での遺物の廃棄活動が、主体であったと考えられる。一方、05 区では掘り方が浅いものの土坑などの遺構が検出されている。遺物包含層および遺構埋土は灰色および褐灰色粘土層である。01A 区と 05 区で検出された縄文時代遺物包含層は、時期もさることながら、立地・形成状況にも違いが認められる。詳細については第 2 節で言及する。

大坪西遺跡において、各調査区で共通して認められる時期としては、古墳時代以降の遺構および堆積である。01A NR01—00 区全体—01B 区全体—05 区西半分は、全体的に地形が低く、ここに弥生時代以降、土壌の堆積が継続していたようである。そして古墳時代前期になって水田耕作が

行なわれるようになって、調査では 00 区東端—01B 区全体—05 区西半分で水田畦畔跡が検出された。畦畔は真北に対してやや北西—南東方向に振った形で検出されているが、地形の傾斜方向に沿っているものと考えられる。今回の調査区は東西に長く、畦畔の全体的な様相を把握することはできないものの、調査区内では畦畔に付随する溝は検出されておらず、水田への水配りは、田面の高低差を利用する、田越し灌漑によっていたものと考えられる。なお、05 区では、古墳時代の水田耕作土が縄文時代晩期の遺物包含層と一体化していることが注目される。

その後、古代以降、河川などによる土砂の供給があったと同時に、水田の畦畔が繰り返しくられたものと考えられる。

第2節 縄文時代の出土遺物について

今回の調査では、01A区で後期中葉、05区で晩期前半を主体とする遺構・遺物が調査された。01A区資料および05区資料は、縄文時代の時期が異なるばかりではなく、その様相に大きな違いが認められる。ここでは、その点について言及をしていく。

1.01A区資料

出土土器群 本資料は、図20の47の1点を除いて、後期中葉の西北出式の様相を示す一群と考えられる。土器群の大多数が無文の深鉢あるいは鉢で占められ、他器種には浅鉢や注口土器が認められる。深鉢には、蜆塚KII式(蜆塚III)を示す、口縁部に垂直方向の貼付けの認められる深鉢などがある。注口土器には、加曽利B1・B2式土器あるいは、それに比定されるような土器が存在する。器面調整は、いずれもナデ調整で、丁寧な調整を呈するものもある。

石器群 土器の多量出土に比較すると、石器の出土量は多くない。本調査区内での出土石器としては、石鏃など若干の製品と剥片・石核などの小型剥片石器で占められており、打製石斧・磨製石斧・磨石敲石類・石皿台石類の出土が認められず、河川際の遺跡でありながら石錘の出土も確認できなかった。一方、石製品としては石棒と考えられる棒状の遺物が出土しており、

遺物の出土状況 遺物の出土は、いわば遺跡包含層中からの出土で、遺物出土の集合群は認められたものの、遺構内からのまとまった出土は確認できていない。南東方向に傾斜する谷地形の肩部に包含層は存在しており、包含層は黒色化を呈しておらずかつ粘性の著しく強くない砂層である。

本資料の性格 01A区は、縄文時代後期中葉においては遺物廃棄を行なった活動の場であったと考えられる。遺物包含層は砂層で、黒色土化あるいはシルト化していることがなく、活動は限定的であった可能性が考えられる。遺物の廃棄活動などは行なわれたと考えられるが、埋没は自然営力によるものと考えられる。

2.05区資料

出土土器群 本資料は、晩期前半期の様相を示す一群と考えられ、元刈谷式の新相(佐野2002)・雷IIc式(増子2003など)から桜井式・稲荷山式段階までの資料と考えられる。半截竹管文系条痕土器の後半とも考えられる時期である。器種は深鉢あるいは鉢が圧倒的多数を占め、他器種の存在は稀である。また、異系統が窺えられる資料は極めて少なく、ごく短い間での遺跡形成で終了してしまった可能性が考えられる。

石器群 05区は01A区と比較して、総体として石器の出土量が多いといえる。但し、それでも石鏃・石錐・搔器・使用痕剥片・楔形石器・剥片・石核などの小型剥片石器類が主体であり、それ以外の石器としては磨製石斧が1点存在しているのみである。本資料群でも打製石斧・石錘・磨石敲石類・石皿台石類などの出土は認められなかった。

遺物の出土状況 本調査区内では、包含層の出土もさることながら、遺構内出土遺物が多く認められた。遺構の掘り方はいずれも極めて浅く、黒色化した粘土質シルト内に遺物が包含している状態である。05区SB01とした遺構内が象徴的であるが、黒色土の堆積が厚く認められる部分にのみ遺物の出土が多く認められる。

の一部には、掘り方が地山の砂層下まで達しているものもあるが、多くの遺構が砂層上で終了している。



第3節 縄文時代後晩期集落研究の現状と課題

今回、大坪西遺跡の調査で、01A区では後期中葉期、05区で晩期前半期の遺構・遺物がそれぞれ出土した。ここで、問題となるのは、01A区では大坪遺跡と関係、05区では大六遺跡との関係である。ここでは、縄文時代後晩期の地域社会論的観点に立脚した遺跡研究を行うため、この2つの関係について考えていく。

1. 大坪遺跡・大六遺跡との関係

大坪遺跡・大六遺跡については、第1章で既に紹介しているところではあるが、本論に關係する点についてのみ、ここで再び取り上げていく。

大坪遺跡（水野 1957・宮石ほか 1958）

大坪西遺跡南西側 140m の河岸段丘上、薬師川が矢田川沖積地に合流する地点に位置する。標高は約 100m である。1956 年の調査では、遺物包含層とされる黒色有機土層は地表下約 1m の位置に存在していたようで、土層の關係は不明ながら竪穴建物跡 1 軒が検出され、中央には地床炉が見つかったとされる。出土遺物は、縄文時代後期中葉～後葉を中心として晩期まで認められ、土器・石鏃・石錐・石匙・打製石斧・磨製石斧あるいは磨製石斧様の石製品・礫器様石器・磨石敲石類などが出土した。

大六遺跡（宮石ほか 1963）

大坪西遺跡の西 1,400m ほどの、標高約 85m、山口川南側の河岸段丘上に位置する。当地は、山口川に大六川が合流する地点付近にあたる。1961～63 年に調査が行われ、調査区中央区を中心に縄文時代の遺構・遺物が調査された。遺構は土器棺が 2 基とピット、および遺物包含層であ

る。出土遺物には、縄文時代晩期前半期を中心とする土器群と、土製耳飾り、石鏃・石錐・石匙・スクレイパー・異形石器・楔形石器・打製石斧・礫器様石器・磨製石斧・切目石錘・礫石錘・磨石敲石類・台石・石棒石剣類がある。また、調査区東区からは古墳時代の竪穴建物跡が調査されている。

縄文時代晩期の遺物包含層（黒褐色砂礫土層）は、第 3 トレンチ・第 4 トレンチ付近が最も保存状況が良好であったようで、厚さ 20cm 以上を測る場所も確認された。黒褐色砂礫土層はやや高低差のある微地形上に形成されたようであり、特に第 3 トレンチでは緩斜面上に形成された様子が看取される。ピット B と C は長軸 1m 前後の平面プラン方形状を呈する遺構で、土坑墓の可能性も考えられる遺構である。中央区南側では、縄文文化期柱穴とするピット群が報告されており、その一つは上述したピット B と重複關係が認められるようである。

次に、大坪西遺跡 01A 区と大坪遺跡、大坪西遺跡 05 区と大六遺跡との關係について検討する。

大坪西遺跡 01A 区と大坪遺跡 段丘上に立地している大坪遺跡と、沖積低地上に立地している大坪西遺跡は、直線距離で 140m ほどの距離と近接した關係にあるといえる。両者は同時存在していたことが考えられる。大きな差としては、遺跡の継続時期と遺物包含層の様相・出土遺物の様相にある。

まず、遺跡の継続期間という点からは、大坪遺跡は後期中葉以降、繰り返しの場の利用があった

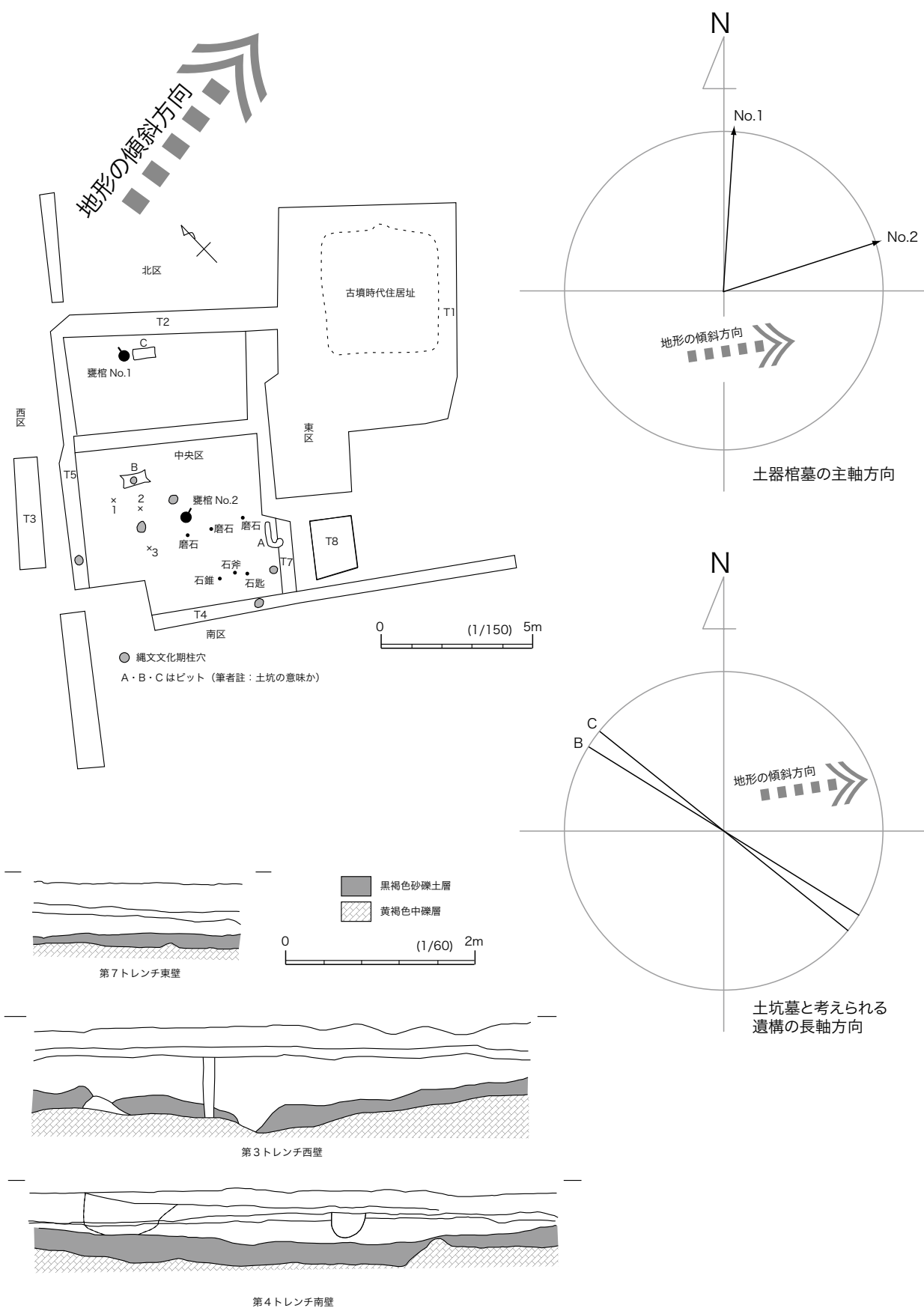


図 49 大六遺跡 (宮石ほか 1963 を改変)

と考えられ、少なくとも後期後葉までは、顕著に利用があったものと考えられる。一方で、大坪西遺跡 01A 区では後期中葉西北出式期にほぼ限定されることから、ある短い時期で完結する活動痕跡の場といえよう。次に遺物包含層の様相である。大坪遺跡では、土層断面図などの提示がなく詳細は不明ながらも、遺物包含層は黒色有機土層であると記されている。台地上の黒色土の形成は、活動とともに垂直あるいは水平方向に広がって形成されたものと考えられそれとともに竪穴建物跡などの遺構も形成されたものと考えられる。一方、大坪西遺跡 01A 区の遺物包含層は砂層で、黒色土化あるいはシルト化していることがない。上述したように、遺物の廃棄活動などは行なわれたと考えられるが、埋没は自然営力によるものと考えられる。次に出土遺物の様相である。大坪遺跡では、土器の出土は深鉢・浅鉢・注口土器があり、文様の少ない深鉢が圧倒的多数を占めるなか、口縁部に横方向の沈線が巡る土器群がまとまって認められる。一方、大坪西遺跡 01A 区では、器種は深鉢あるいは鉢・注口土器があるものの、深鉢あるいは鉢では無文土器の割合が極めて高い。石器の出土では大坪遺跡では石鏃・石錐・石匙・打製石斧・磨製石斧あるいは磨製石斧様の石製品・礫器様石器・磨石敲石類と、各種の石器が出土している。一方で、大坪西遺跡では石器の出土は小型剥片石器出自の剥片が若干出土しているのみである。石製品では、石棒とした片岩製のものが 1 点出土している。

両遺跡は極めて至近距離であり、ほぼ同時期に人為的営みがあったことが考えられるならば、台地上で黒色土が形成される状態であった大坪遺跡と、黒色土の形成がなされないまま遺物廃棄が行なわれた大坪西遺跡 01A 区という関係が認識さ

れる。大坪遺跡では石器の出土量が多く、人為的活動が盛んに行なわれた様子が窺えられる。竪穴建物の形成など具体的な生活痕跡も見つかっており、主体的に活動が行われた場であったと考えられよう。その活動に関連した人たちが、集落の縁辺部に一時期遺物廃棄を行った活動痕跡の場として考えることが可能であろう。

大坪西遺跡 05 区と大六遺跡 この両者も、台地上に立地する大六遺跡と、沖積低地上に立地する大坪西遺跡 05 区という関係ではあるが、直線距離で 1,400m 程度離れている。ここでも、大きな差としては、遺物包含層の様相・出土遺物の様相にある。大六遺跡における縄文時代晩期の遺物包含層（黒褐色砂礫土層）は、遺物を多量に含み、かつ垂直方向・水平方向に広がりを持ちつつ形成が行なわれたと考えられ、遺物包含層の形成と同時に、竪穴建物や土器棺墓・土坑墓などの遺構も形成されたと推測される。一方、大坪西遺跡 05 区では、遺物包含層は黒色化した粘土質シルトである。調査時の状況では深さが保たれていない土坑状およびピット状の落ち込みが認められ、この中に遺物が若干含まれる状態である。遺構の形成が行なわれていたとしても、ごく僅かであると考えられ、一部は微地形の凹地内に落ち込んだ部分に遺物の出土が確認される状態であったものもあったと考えられる。大坪西遺跡 05 区の黒色化した粘土質シルトは、遺跡立地の状況からしても黒色化の原因も含めて、大六遺跡とは別の要因による可能性が考えられる。出土遺物の様相に関しても、大きな差が存在する。土器では、大六遺跡では、有文深鉢・無文深鉢とともに、平行沈線内に連続して垂直方向への単沈線が施された文様をもつ鉢や、その他浅鉢類が出土している。一方、大坪西遺跡 05 区ではすべて深鉢あるいは鉢の類

であり、他器種の出土は認められない。石器についても大六遺跡では、小型剥片石器類のみならず、各種石器が出土しているが、大坪西遺跡 05 区では石鏃を中心とする小型剥片石器類が主体であり、磨製石斧が 1 点出土しているのみである。大六遺跡では、滑車形耳飾り・石棒の出土が報告されているが、大坪西遺跡 05 区では土製品・石製品の出土が認められなかった。

両遺跡の様相は、出土遺物・遺跡の立地・形成状況など、極めて対照的な位置にあると考えられる。特に、大坪西遺跡 05 区の様相を検討すると、当時のヒトの活動において、大坪西遺跡 05 区の場合のみで、完結するような活動は想定しにくい。遺跡は活動の場として異なった役割があったと考えられる。

大坪遺跡と大坪西遺跡 01A 区の関係と、大六遺跡と大坪西遺跡 05 区の関係との差は、大坪西遺跡 01A 区は遺跡の同一範囲内における場の利用の差として理解することができ、大坪西遺跡 05 区は大六遺跡からは離れた地点における活動の場として想定することが可能である。以下、特に大六遺跡と大坪西遺跡 05 区の関係性を考察するために、東海地域の縄文時代晩期前半期を中心とした遺跡の様相について検討を加えていく。

2. 遺跡形成過程について

遺跡形成過程の詳細な議論については別で行うこととして、本論に関する部分の概略を述べておく。

遺跡形成過程への考察は、遺跡を構造的に検討するための一方法論であり、遺跡から当時の人たちの活動の場（あるいは集落）に昇華させるための導入になると考えている。後期旧石器時代

研究において、遺跡形成過程の検証がしばしば行われているが、これは、原位置論に関連して、遺物が遺跡に存在してから以降の議論である場合が多い。ここでは、その場合も含めてであるが、主に人為的行為によってどのように遺跡が形成されたのか、という人為的側面をも視野に入れて検討する。

遺跡形成過程を検討する際には、分析対象とする時期・時代を中心に、（１）活動前形成、（２）活動中形成、（３）活動後形成の、三区分が可能である。（１）活動前形成は遺跡の地理的・地質的立地もさることながら、対象とする時期以前の堆積もこれに該当する。（２）活動中形成は対象としている時期の遺構の形成および遺物包含層の堆積状況などが当てはまる。（３）活動後形成は、その後の人為および自然の堆積、さらには攪乱・削平などの作用などが該当する。このように遺跡に認められる諸作用を整理することによって、（２）活動中形成の質的内容を、調査を通じてでき得る限り精査することが重要であると考えている。

3. 遺跡類型の提示

東海地域の縄文時代後晩期には、次の大きく 4 タイプの遺跡が存在するようである。

タイプ A：活動中形成における遺物を多量に含む包含層の形成が著しい遺跡。遺物包含層には、しばしば焼土・炭化物が認められる。竪穴建物跡をはじめとする建物跡や、ピット・土坑が多数存在し、埋葬遺構が認められることがしばしばある。

タイプ B：遺物の散布が認められ、包含層の形成は確認できる遺跡。遺物包含層の形成は著しくない場合が多い。

タイプC: ドングリピットなどの貯蔵穴や水場遺構などの、いわば湧水・流水を利用した場の利用を行なっている遺跡。

タイプD: 埋葬遺構のみが単独で存在する遺跡。

このタイプA～Dの遺跡は、縄文時代後期から晩期にかけて常に認められる訳ではない。例えば、タイプCは現在までのところ縄文時代晩期前葉の時期には不明瞭であったり、タイプDは条痕文期が考えられるが、これに関してはさらに検討の余地がある。また東海地域のタイプCに関しては、土器などの人工遺物の包含が極めて少ないことが、関東など他地域の様相と比べて特筆すべき点である。

タイプDの遺跡は除外して、タイプAからCの遺跡について、別の名称を提唱したい。タイプAの遺跡では、当時の諸活動の痕跡が複合しているという意味から、これを複合的遺跡と仮に呼称する。但し、埋蔵文化財の用語としての複数の時代・時期が認められる、複合遺跡とはまったく別概念である。タイプBの遺跡は現象面からすると活動内容が少ないことから単的遺跡と、タイプCの遺跡では、植物質食料利用という内容が限定される遺跡であることから限定的遺跡と呼称する。

4. 大坪西遺跡 05 区の評価

複合的遺跡とは、さまざまな活動の重複の結果、および時期的累積の結果、顕在化するものである。換言すれば、当時の人たちが活動を行う上で、自然のおよび社会的理由による地勢的上優位な場所に当たると考えられる。但し、複合的遺跡の性格は同一ではなく、活動の種類やその種類の数、お

よび遺跡の継続期間によって様相は大いに異なるものである。単的遺跡は、おおそ、いわゆる大きい遺跡に含まれない遺跡がこれに当たることが多いと考えられる。

小地域内における複合的遺跡・単的遺跡・限定的遺跡との関係は、人間集団との関係においてどのような様相を示しているのであろうか。ここで鍵となるのは、小地域内における複合的遺跡と単的遺跡との関係である。図50は、上述した小地域区分内に、晩期前葉～中葉の遺跡分布を当てはめたものである。晩期前葉に関しては、各小地域に1カ所および数カ所の複合的遺跡が存在しており、その間隔は、近接した状態において直線距離で5km～10kmの間隔で存在するようである。複合的遺跡の周囲には単的遺跡が存在するものの、現在知られている中でそのような遺跡数は多くなく、遺跡数や規模が大きくないのかもしれない。また、複合的遺跡同士の規模の大きさには顕著な差はないようであるが、牟呂貝塚群のハマグリを中心とする貝類採取のみならず、吉胡貝塚・伊川津貝塚・枯木宮貝塚での貝輪製作、吉胡貝塚・伊川津貝塚における鹿角製装身具類の製作など、各遺跡において特色が認められる。

ここから窺えられる姿は、複合的遺跡を基軸して、複合的遺跡を形成した集団の一部が、生業活動などを行うに際して、単的遺跡あるいは限定的遺跡を形成したという様相である。複合的遺跡が小単位集団の核となる活動の場であったと考えられるのである。

さて、以上の検討により、筆者は、大六遺跡を複合的遺跡に、大坪西遺跡 05 区を単的遺跡の部類に入るものと考えている。それは、両遺跡の遺跡形成過程からの検討で明らかであろう。各複合的遺跡の立地状況を概観すると、当時の地形とし

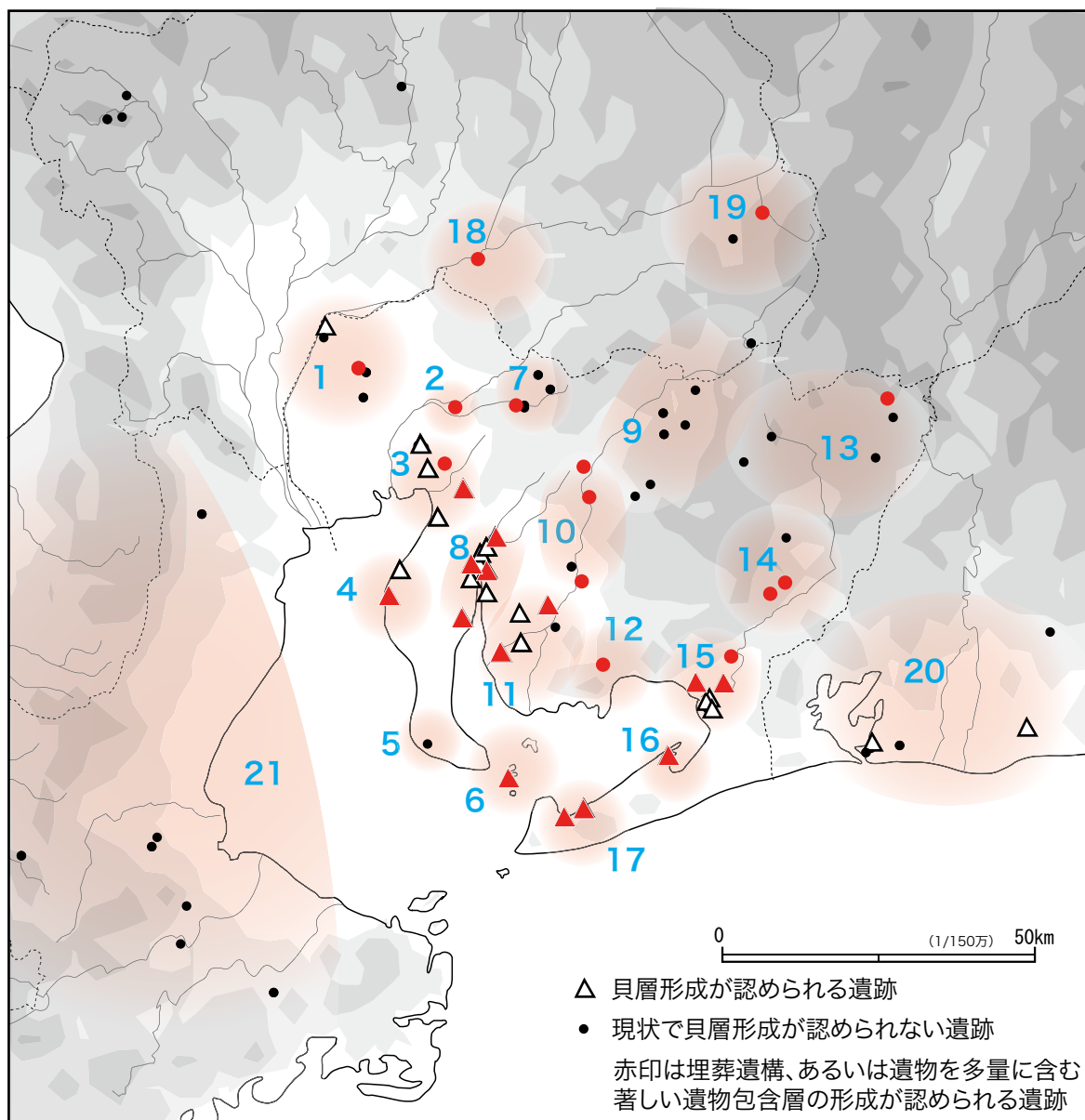


図 50 縄文時代晩期前葉～中葉の小地域区分案

て高い位置（台地上あるいは微高地上）に立地している事例が多く、これが複合的遺跡が形成される一条件であった可能性がある。従って、今後の埋蔵文化財調査において、低地部分において新規発見の遺跡として調査が行われる可能性が高いの

は、単的遺跡および限定的遺跡であろう。これらの遺跡の資料を域社会論の俎上に乗せるべく、確実に調査・報告が行われることが重要であり、今後の縄文時代晩期研究において、最も鍵になる遺跡になると考えられるのである。

参考文献

- 青木 修編,1997『品野西遺跡』財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター。
- 青木 修,1998「瀬戸市の縄文遺跡について」『研究紀要』6.1～102頁。財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター。
- 青木 修編,2005『吉野遺跡』財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター。
- 岡本直久・佐野 元・河合君近,2002『内田町遺跡』財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター。
- 川添和暁編,2002『牛牧遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
- 川添和暁編,2005『上品野遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
- 酒井俊彦編,2008『惣作・鐘場遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター。
- 佐野 元,2001「東海地方西部縄文晩期緑帯文土器様式の様相 瀬戸市大六遺跡出土晩期前葉遺物を中心として」『研究紀要』9.1～82頁。財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター。
- 齊藤基生,1993「下呂石—飛騨・木曽川水系における転石のあり方—」『愛知女子短期大学 紀要・人文編』26.139～157頁。愛知女子短期大学。
- 瀬戸市教育委員会,1997『瀬戸市詳細遺跡地図』
- 武部真木編,2003『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
- 田部剛士,2001「石器石材の変遷と流通—主に愛知県の下呂石を中心に—」『三河考古』14.1～31頁。三河考古刊行会。
- 永井宏幸編,2004a『吉野遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
- 永井宏幸編,2004b『長谷口遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
- 永井宏幸ほか,2005『鳳山C窯跡 惣作・鐘場遺跡Ⅰ』愛知県埋蔵文化財センター。
- 服部 郁,1991「Ⅱ.【資料紹介】瀬戸市域の先史遺跡Ⅰ—大坪遺跡—」『昭和63・平成元年度 瀬戸市埋蔵文化財年報』12～60頁。瀬戸市教育委員会。
- 服部 郁ほか,1992「吉田・吉田奥遺跡」『上之山—愛知県瀬戸市吉田・吉田奥遺跡群 広久手古窯跡群発掘調査報告書—』
- 久永春男,1963「元刈谷式土器について」『大六遺跡』49～52頁。瀬戸市教育委員会。
- 久永春男,1969「中部地方」『新版 考古学講座』3.231～248頁。東京 雄山閣出版。
- 増子康眞,1966「後編 雷貝塚の研究」『鳴海のあけぼの』文化財叢書42.6～40頁。名古屋市教育委員会。
- 増子康眞,1979「東三河における縄文後期末・晩期前半の研究」『古代人』35.名古屋考古学会。
- 増子康眞,1980「東三河における縄文後期末・晩期前半の再検討(Ⅱ)」『古代人』36.13～24頁。名古屋考古学会。
- 増子康眞,1988「刈谷市本刈谷貝塚報告の縄文土器の分析」『古代人』49.名古屋考古学会。
- 増子康眞,1994「加曾利B式に平行する東海地方の縄文後期土器」『古代人』55.名古屋考古学会。
- 増子康眞,2003「愛知県西部の縄文晩期前半土器型式の推移」『古代人』63.15～47頁。名古屋考古学会。
- 増子康眞,2004「東三河縄文晩期前半土器群の編年再編」『古代人』64.10～38頁。名古屋考古学会。
- 増子康眞,2005「伊勢湾岸地域の縄文後期初頭土器群」『古代人』65.名古屋考古学会。
- 増子康眞,2007「愛知県西部の縄文晩期<寺津・雷ⅡA式>土器組成の検証」『古代人』67.名古屋考古学会。
- 増子康眞,2008「晩期半截竹管文土器」『総覧 縄文土器』774～781頁。『総覧 縄文土器』刊行委員会。
- 水野 収,1957「先史時代の瀬戸」『考土』2～7頁。瀬戸市教職員考土サークル。
- 宮石宗弘ほか,1958『大坪遺跡』山口遺跡調査保存会。
- 宮石宗弘ほか,1963『大六遺跡』瀬戸市教育委員会。

写真図版



大坪西遺跡の現況（2008 年 3 月） 上：東から、下：北から



発掘前状況（西より）



01A区西壁



01A区 炭化材出土状況



01A区 縄文時代遺物出土状況（東より）



01A区 縄文時代遺物出土状況（北西より）



01A区 遺物出土状況
(北東より)



01A区 遺物出土状況
SU02 (南より)



01A区 遺物出土状況
SU03 (東より)



01A区 完掘全景（西から）



01A区 完掘全景（東から）



05 区西半分 縄文時代遺構全景（西より）



05 区 縄文時代遺構検出状況（南西より）



05 区 SB01（北より）



05 区 遺物出土状況
SK12 (西より)



05 区 遺物出土状況
SK09 (南より)



05 区 遺物出土状況
SK08 (北より)



01B区 古墳時代水田(西より)



01B区 南壁



01B区 北壁





01B区 SK01・02、SD01 (東より)



05区西半分 古墳時代以降全景(南より)



05区 ST01・02 (西より)



05区西半分 古墳時代以降全景(東より)



05区東半分 全景(西より)



05区東半分 南壁



00区 完掘（東より）



00区 SX02（北より）



00区 SX01（南東より）



00区 南壁





1



2



3



4



5



6

01A区 SU01



7



8



9



10



11



12



13

01A区 SU02



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24

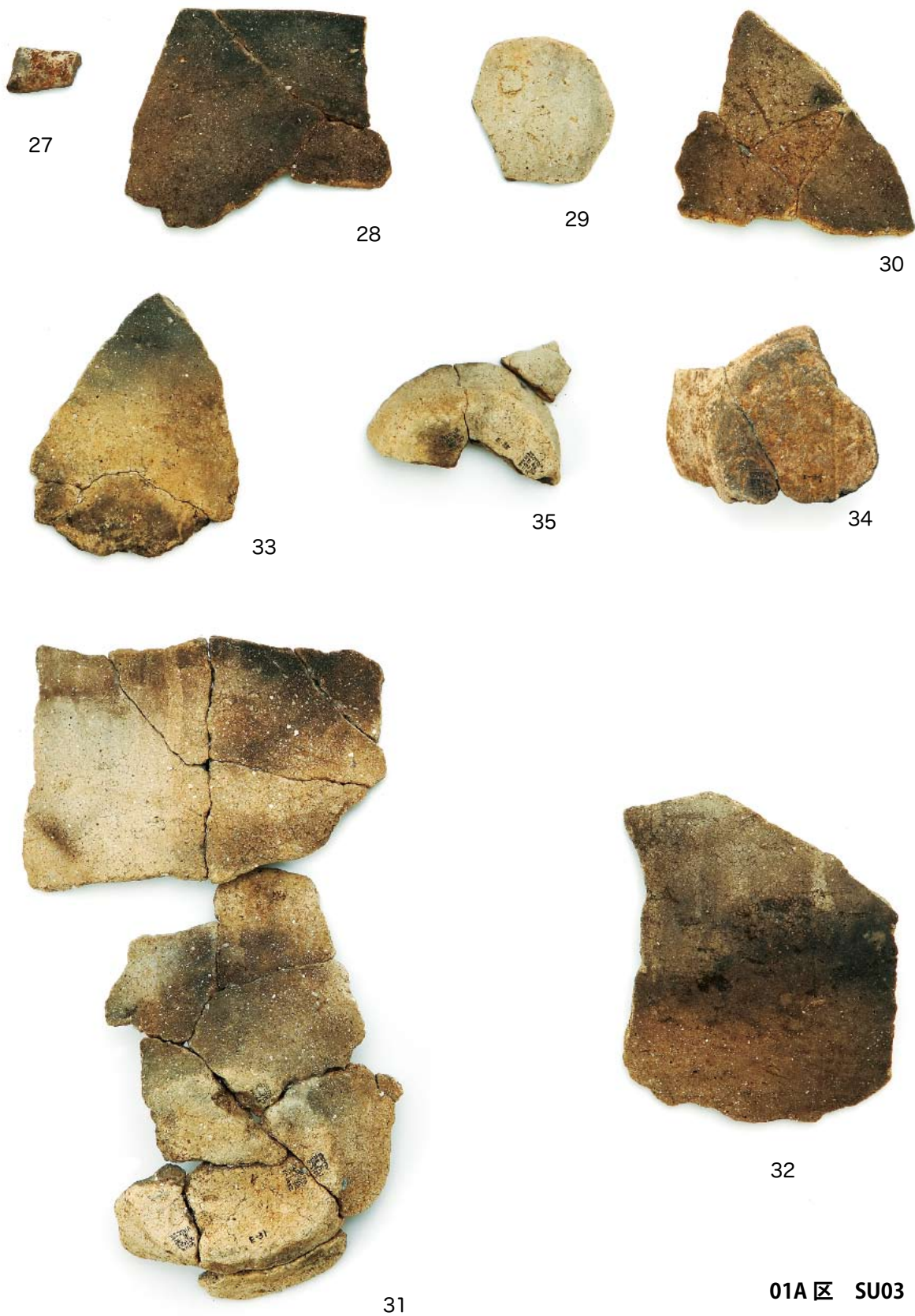


25



26

01A区 SU02



01A区 SU03



36



37



38



39



40



41

01A区 SU04



42



43



45



46



44



48



49



50



51



52



53



54

01A区



47



55



57



58



59



60



61



62



63



68



65



66



67



70



72



73



71

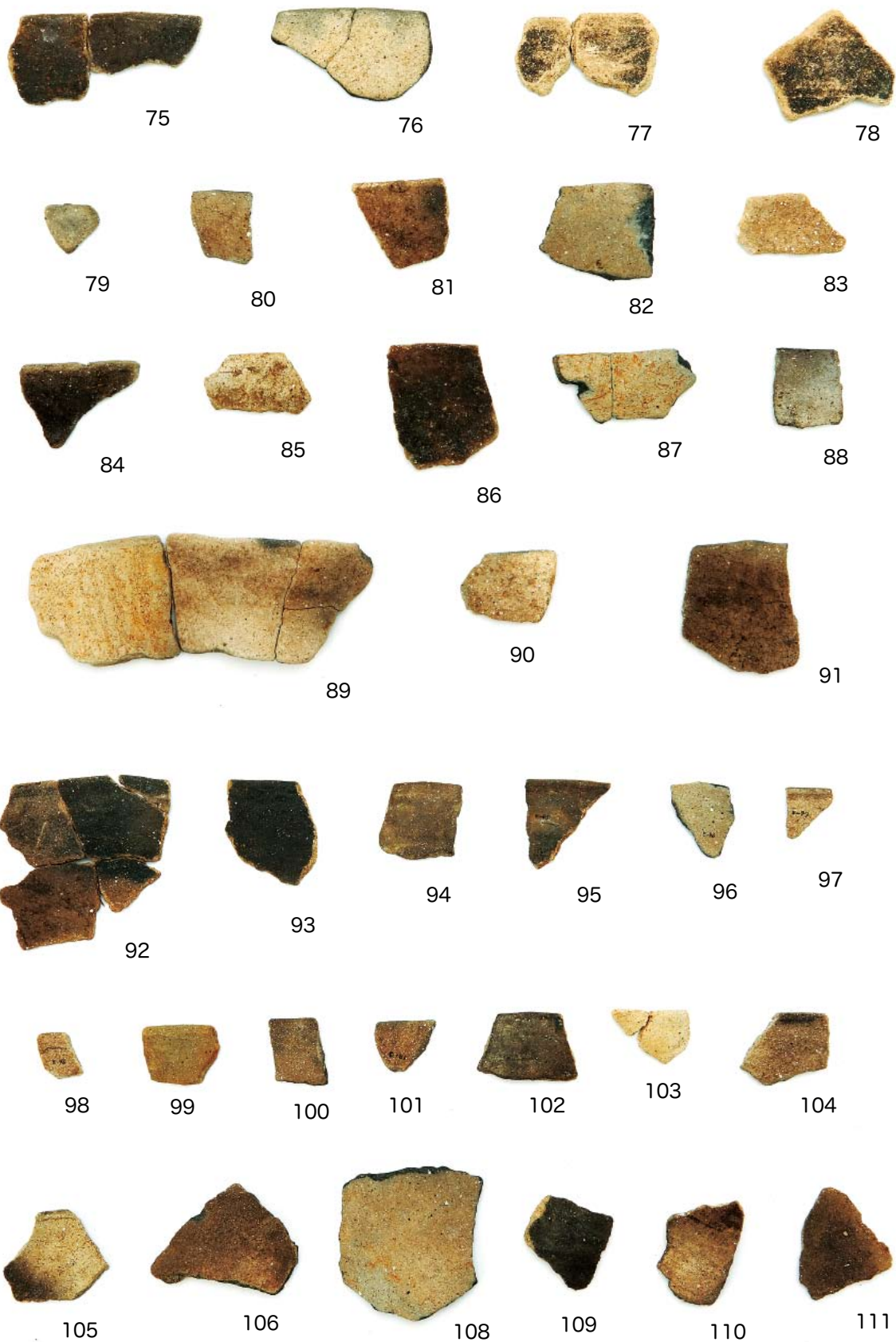


56



74

01A区



01A区



107



112



113



114



115



117



118



119



120

01A区



201



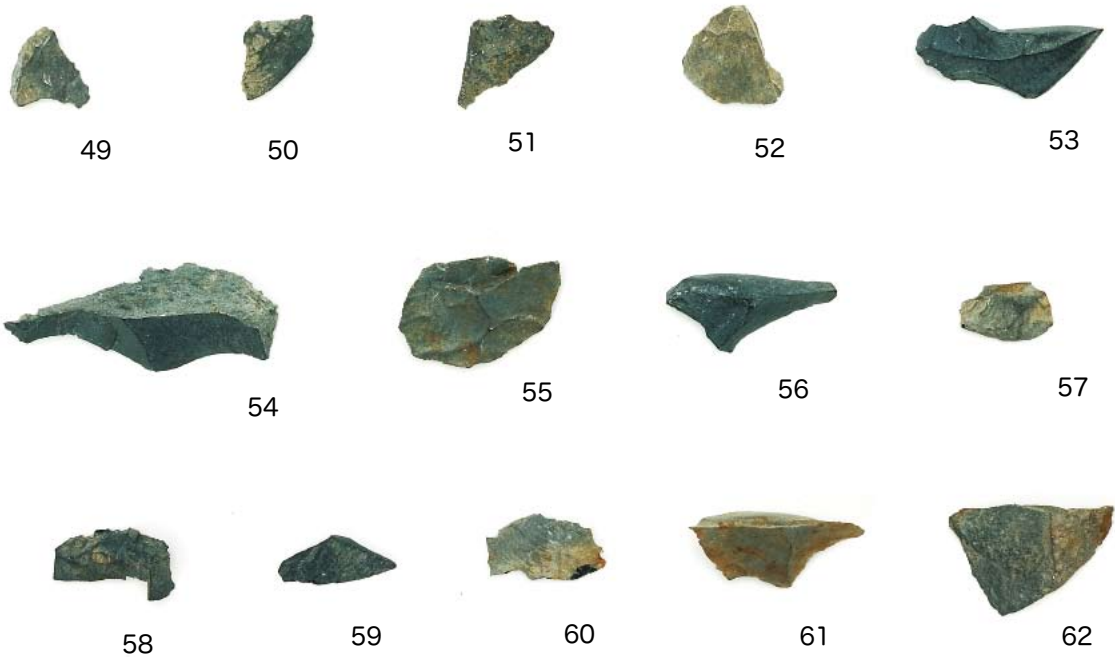
203

01B区

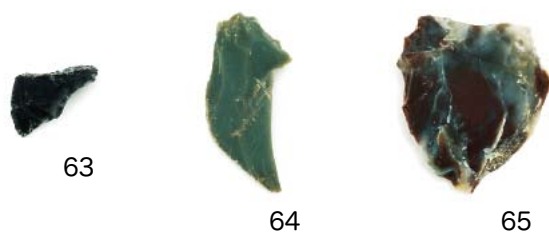
01A区 縄文時代遺物
(石器)



01A区



01A区



01A区

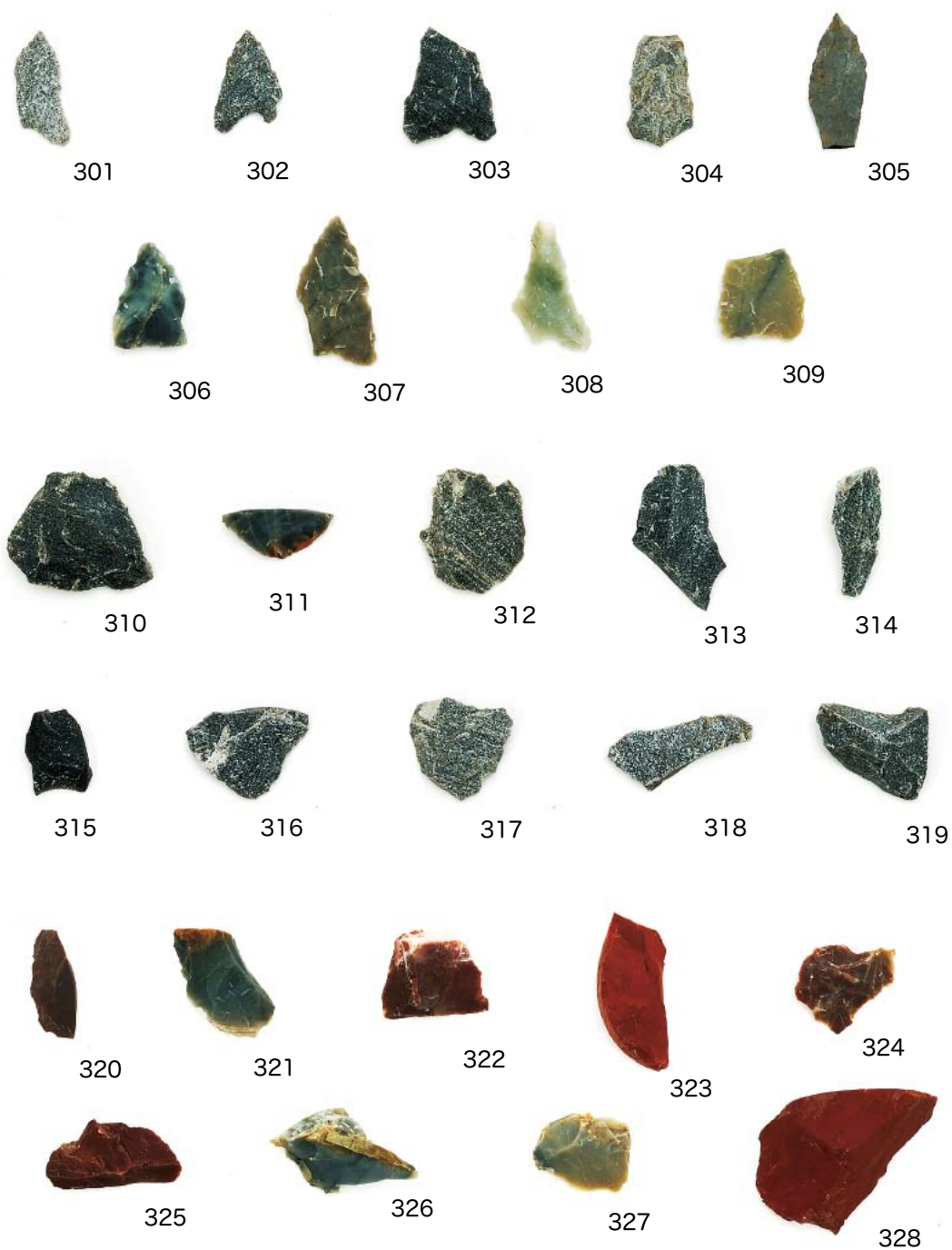


01A区



01A区 SU02





01A 区 SB01

05 区 縄文時代遺物
(石器)







報告書抄録

ふりがな	おおつぼにしいせき							
書名	大坪西遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第157集							
編著者名	川添和暁・堀木真美子・馬場健司・小林紘一・丹生越子・伊藤茂・廣田正史・瀬谷薫 Zaur Lomtadize・Ineza Jorjoliani							
編集機関	財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24							
発行年月日	西暦2008年8月							

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおつぼにしいせき 大坪西遺跡	せとしおおつぼちよう 瀬戸市大坪町	03	030915	35度 11分 40秒	137度 6分 14秒	200010～ 200511	1,150㎡	国道248号線の建設に伴う 事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大坪西遺跡	集落・水田遺跡	縄文後期中葉	遺物包含層	縄文土器・石器・石棒	
		縄文晩期前半	遺物包含層・竪穴状遺構・土坑など	縄文土器・石器	
		古墳	水田跡など	土器片・陶器片など	

文書番号 発掘届出(12埋セ第163-1号／ 13埋セ第83号・13.9.4／ 17埋セ第60号・17.10.3)
通知(12教生第216-38号・12.12.7／ 13教生第36-15号・13.9.17／ 17教生第1348号・17.10.20)
終了届(13埋セ130号・13.11.14／ 17埋セ第92号・17.12.19)
保管証・発見届(13埋セ130号・13.11.14／ 17埋セ第92号・17.12.19)
鑑査結果通知(12教生第216-38号・13.5.28／ 13教生第36-15号・13.12.11／ 17教生第2024号・18.1.26)

要約 O1A区では縄文時代後期中葉の遺物包含層、05区では縄文時代晩期前半の遺物包含層、01B区と00区では古墳時代の水田跡が検出された。O1A区は大坪遺跡の縁辺部に位置し、集落端に廃棄した地点である可能性が考えられる。05区は晩期前半期の単的遺跡と考えられ、同時期の遺跡として、大六遺跡を形成した人間集団との関係が考えられるものである。

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第157集

大坪西遺跡

2009年3月31日

編集・発行 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 サンメッセ株式会社